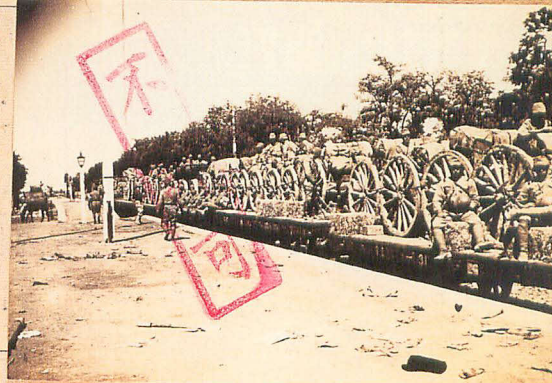
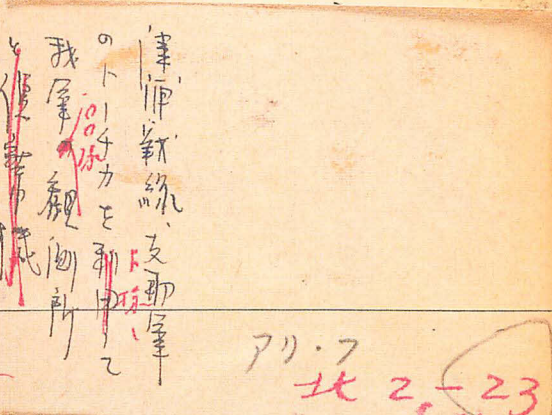
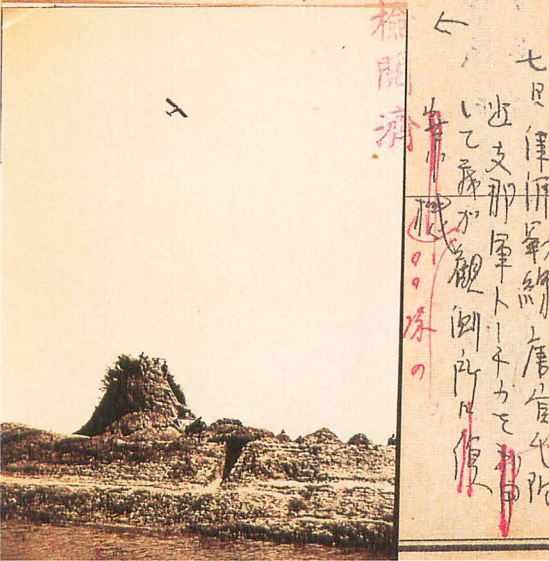
不許可写真
シリーズ
20世紀の記憶
2
陸軍・海軍・内務省・情報局の
検閲をかいくぐり日本でただ一つ
残された歴史資料写真
毎日新聞秘蔵
不許可
毎日新聞社

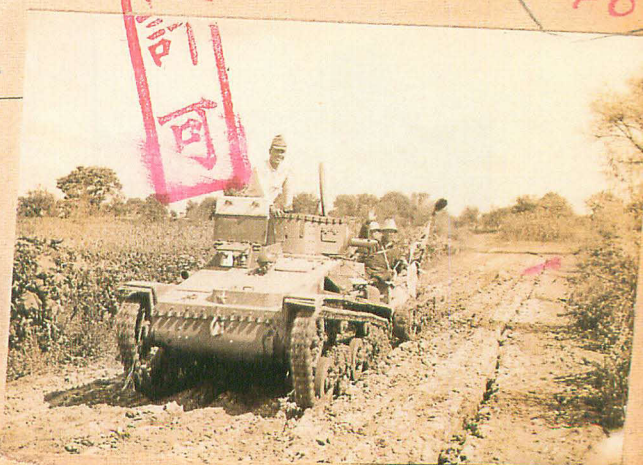
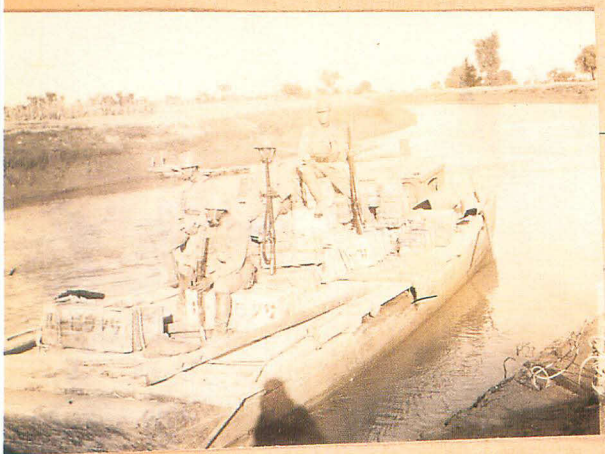
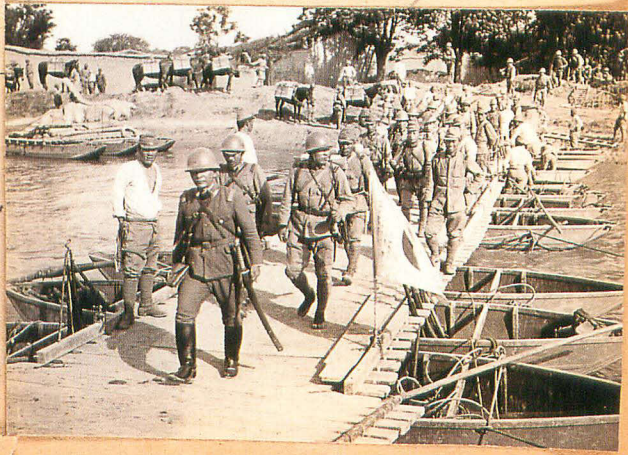
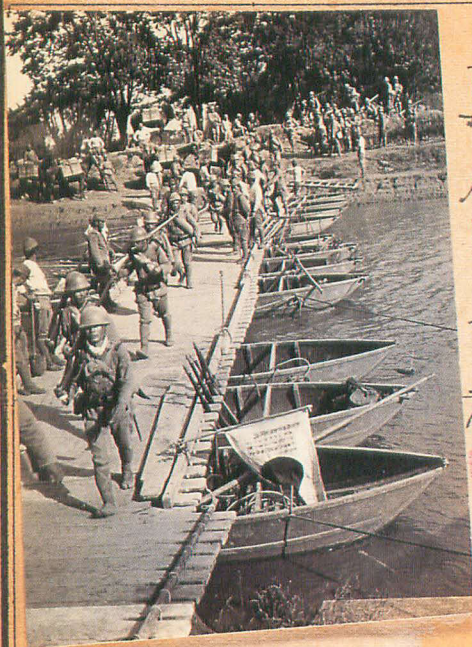
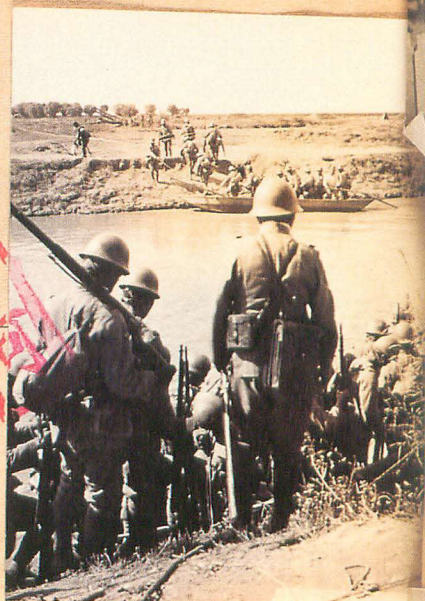
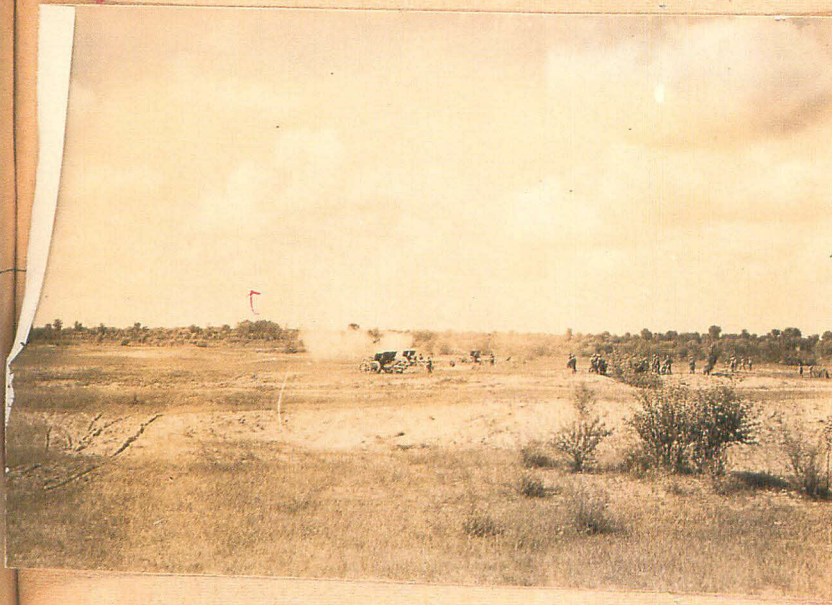
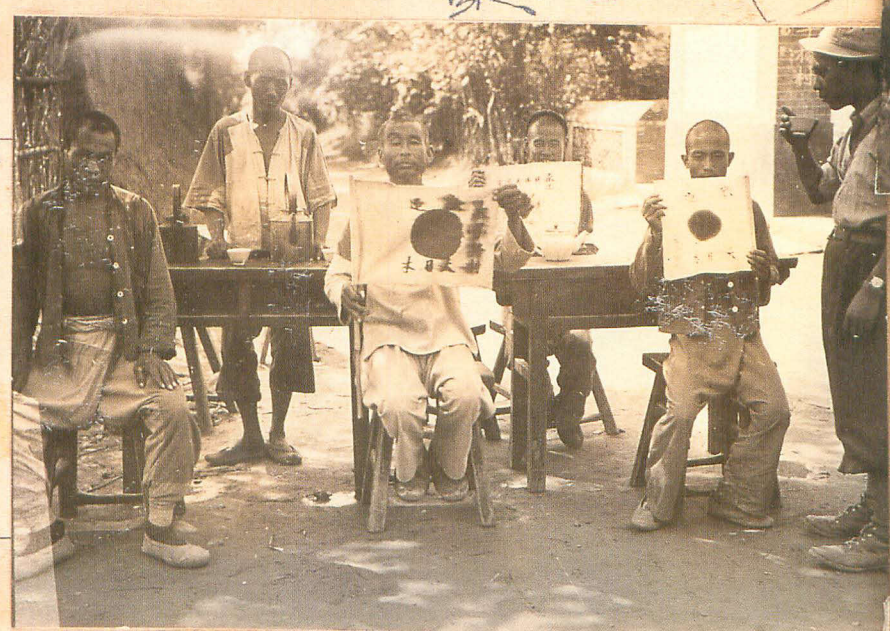
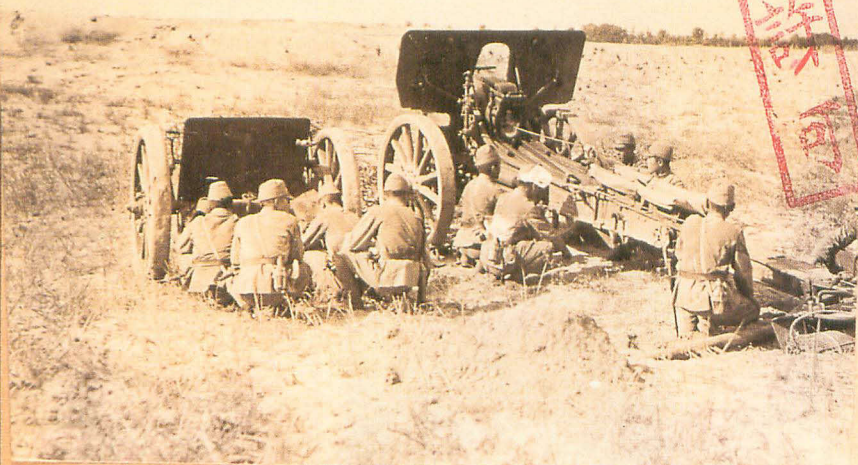
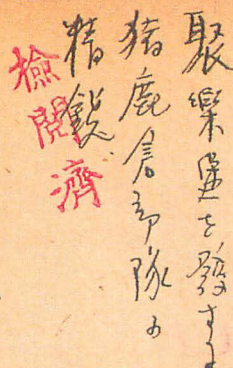
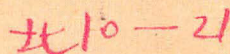
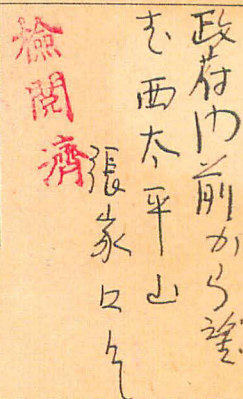
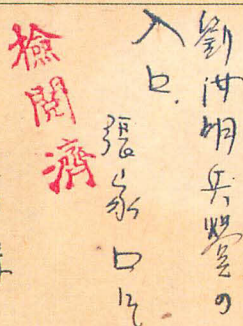
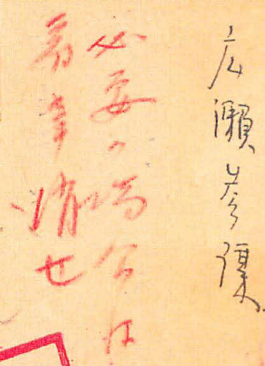
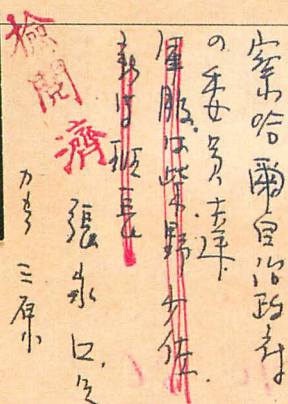
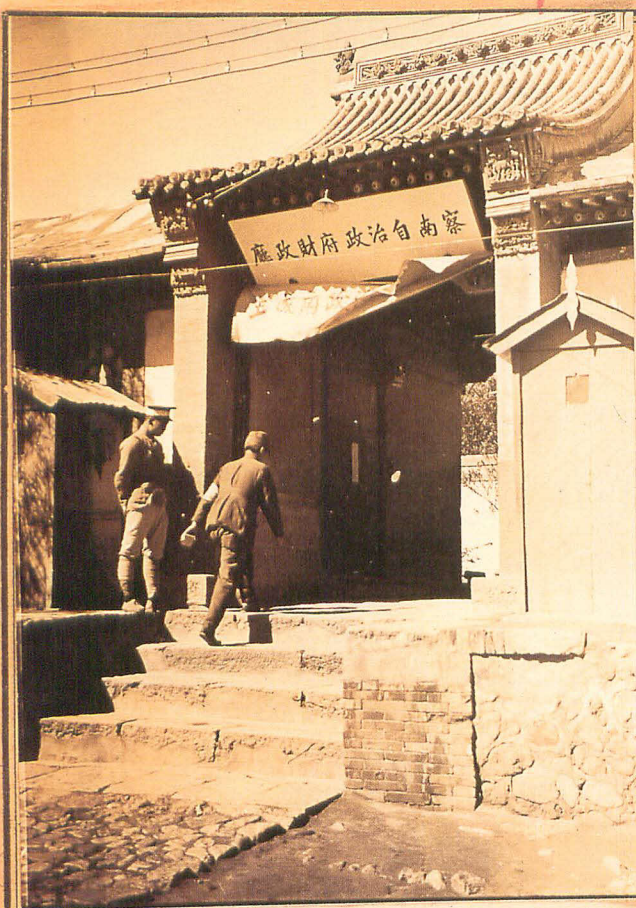
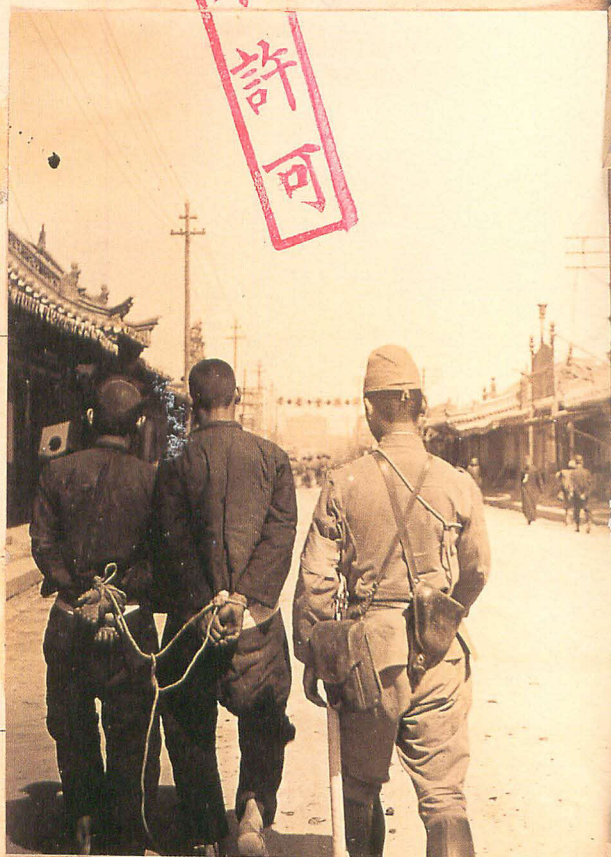
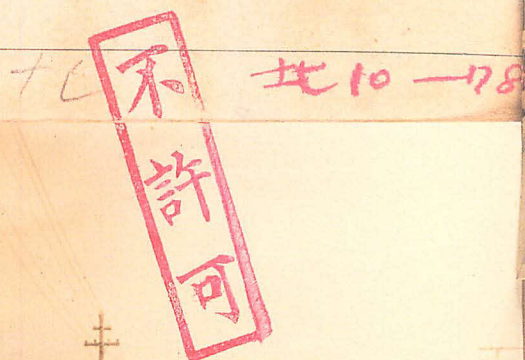
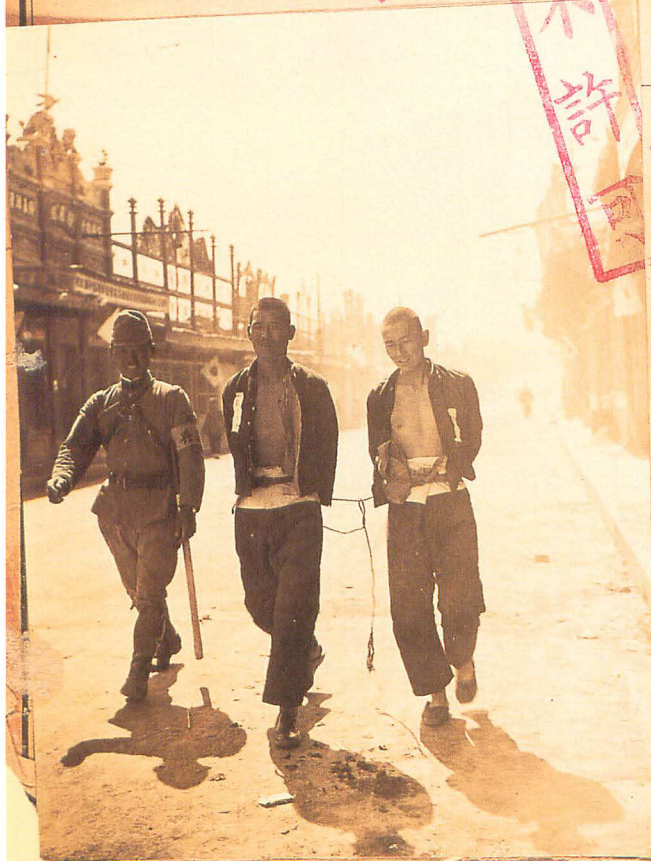
【表1写真】
上右:海軍落下傘部隊の演習…1943/5月
上左:津浦戦線、日本兵が中国人捕虜を銃剣で刺殺…1938/5月
下:ビスマーク諸島のニューアイルランド島カビエング(現パプアニューギニア)で捕虜となった英軍兵…1942年1月

【表4写真】
上:華南戦線、大嶺頂上から砲撃中の山砲部隊。双眼鏡を覗いている指揮官の姿が問題となった…1942/7/2
下右:最高機密のイ号第8潜水艦(略号・イ8潜)の出港準備中の写真。艦内に偵察機を格納したうえ、
14cm連装砲をもち、洋上23ノットと世界最高の速力を誇っていた
下左:軍直轄から民営になった最初の慰安所…上海・江湾鎮1938/1月

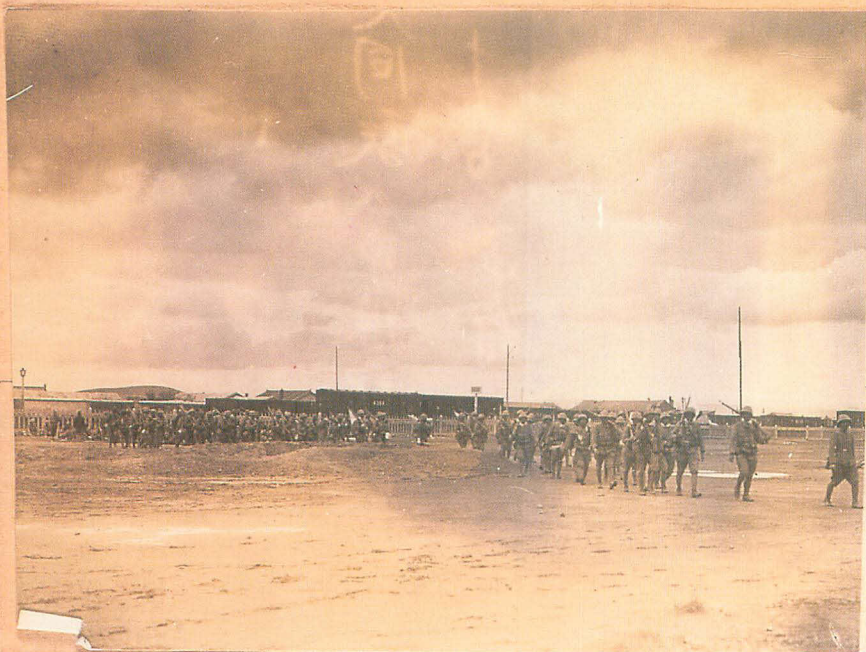
シリーズ20世紀の記憶

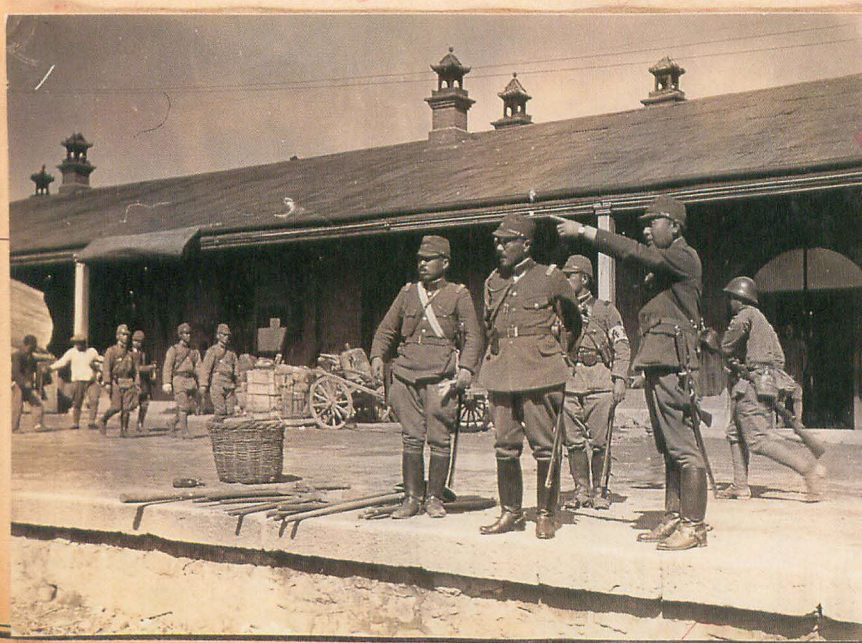
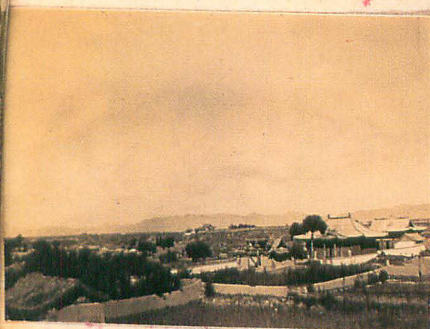
不許可写真 2

毎日新聞社

日中戦争 1937年9月 華北

日本軍支那駐屯軍は1937年7月30日までに、北平（北京）、天津を占領した。8月14日に大沽に上陸した第10師団は、天津から南へ向かう津浦線の沿線を馬廠方面へ向かった。9月4日には唐官屯を占領。上から2枚目の写真は写真説明で砲名が伏せられているが不許可、右下の「支那装甲列車を爆破装薬」の写真も不許可となった。左中、左下の写真は唐官屯付近の中国軍トーチカを観測所とした写真説明が付いていて、「トーチカを利用して」が、「トーチカを占拠して」との修正指示がある。右上の丸いハンコは大阪毎日新聞社写真部にフィルムが届いた年月日…1937/9月

不許可写真2

日本軍は華北へ兵力を増強し、北支那方面軍を編成した。同軍第2軍第10師団は9月11日馬廠を占領。
部隊長(旅団長、連隊長ら)の写っている写真(上2枚)と、日本軍の豆タンク(小型戦車、下2枚)の写真は不許可となった…馬廠1937/9/11

津浦線馬廠攻略に活躍した新兵器の装甲艇（上2枚）は不許可。
「前線に酒類到着」（左中）と津浦線馬廠川の軍橋を渡る赤柴部隊＝第10師団歩兵第10連隊（下）は検閲済みで許可…1937/9月

津浦線馬廠。不許可とならなかったのは馬廠川の架橋(上)の1枚のみ。軍橋を渡る歩兵第10連隊(上から2枚目)、馬廠川架橋(上から3枚目)、馬廠川渡河(下)の3枚は不許可となった。
不許可となった3枚は背景が写りこんでいるためか?…1937/9月

津浦線馬廠攻略の赤柴部隊（上）と敵前渡河（上から2枚目）の2枚は不許可。
「津浦線馬廠戦を終えて人も馬もくたぐたに」の写真説明のある写真（上から3枚目・「裏焼」）と北平西郊の門頭溝戦線（下）は不許可とならなかった…1937/9月

中部戦線（北平から南へ向かう京漢線沿線）で日本軍は9月14日、永定河を渡河し固安を攻略した。重砲隊遠藤部隊（上）、固安を砲撃する遠藤重砲隊（中）は、最初は不許可で後解消された。
下も中部戦線固安攻略の重砲陣地。写真説明の「重砲陣地」は「重砲隊」と修正指示がある…1937/9月

中部戦線、重砲隊遠藤部隊の砲撃の写真(上)は不許可。
中の写真は永定河の北岸楡垈鎮(写真説明では楡堡鎮とある)で日の丸を掲げて日本軍の「進出を喜ぶ現地人」…1937/9月

関東軍察哈爾（チャハル）（内モンゴル地区）派遣兵団は8月27日、張家口を占領した。さらに西へ進み9月11日聚楽堡、13日大同を占領した。
十川部隊長（同兵団混成第2旅団歩兵第1連隊長）や湯浅部隊（同歩兵第3連隊）の幹部の写真は不許可になった（上から4段目右、下2枚）…1937年

大同城内で捕らえた中国の便衣隊(平服を着て敵地に入り、敵を襲う兵。便衣とは中国で普段着、平服)の写真(中、下)は不許可。
上は大同市自治政府…1937/9月

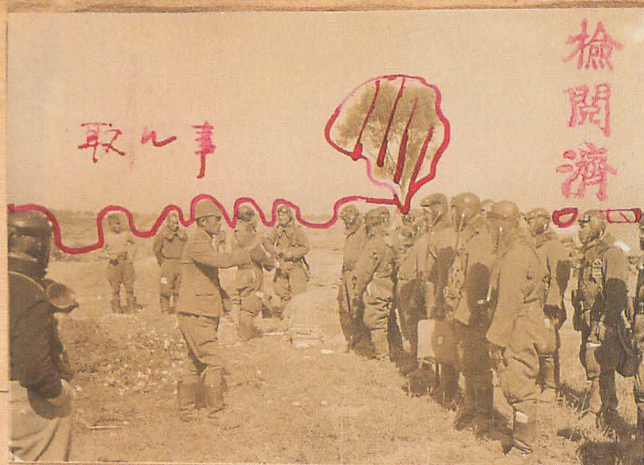
中部戦線では9月24日、日本軍は保定を占領した。25日保定入城式。各部隊の祝賀会(上)や部隊長保定占拠祝賀(上から2枚目右)の写真は不許可になった。
上から3枚目の写真は「○○部隊長　保定入城」という写真説明が「我軍の入城を喜ぶ保定市民」と書き換えられている。入城(上から4枚目)、中国人の祝賀旗行列(下、北平)…1937/9月

東條（英機）部隊長＝関東軍参謀長兼察哈爾派遣兵団司令官以下幹部の写っているもの（上）は不許可となった。関東軍は大同から北へ進み、9月24日平地泉（集寧）を占領した。平地泉一番乗りで屋根に登っている写真（中）や、豊鎮で占領したトーチカの上で万歳している写真（下）は許可された…1937/9月

綏遠省(現内モンゴル自治区)平地泉、大同。
中国人捕虜(便衣隊)を連行する写真(下)は不許可…1937/9月

上の写真は「日章旗をひるがえし前進する蒙古騎兵隊」。
下は大同駅の東條英機関東軍参謀長で不許可となった…大同1937/9/19

日本軍北支那方面軍は馬廠から津浦線をさらに南下し、10月3日徳州を占領した。日本軍を悩ました、ソ連式の鉄条網と水壕(写真上、右中)。
コレラの予防注射を受ける日本軍兵士の写真は不許可となった…1937年

日本軍北支那方面軍は10月1日、第5師団を察哈爾方面から山西省太原へ向かわせた。不許可となっている上2枚は、王家荘での板垣部隊（第5師団）幹部と板垣師団長（キャプションでは板垣部長）が写っているもの。右中の写真は背景の建物をカットして使用することとされた…山西省1937/10月

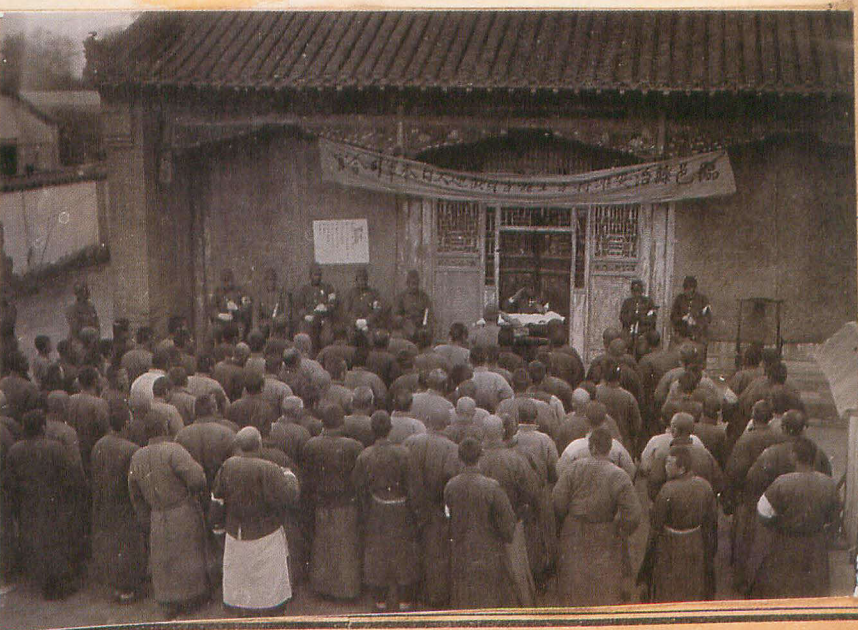
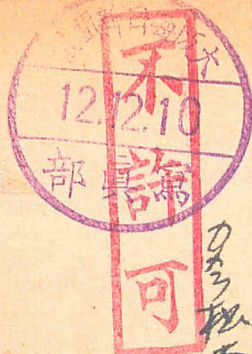
「津浦戦線　徳州飛行場　中平部隊(飛行第7大隊)」八八式軽爆撃機が大写しにされたこれら4枚はすべて不許可になった…徳州1937/10/23

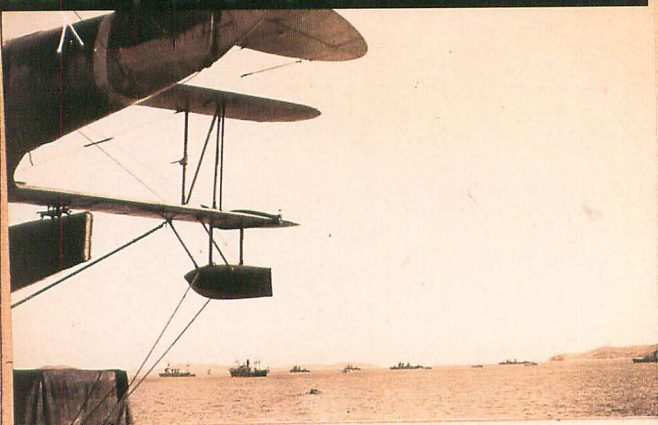
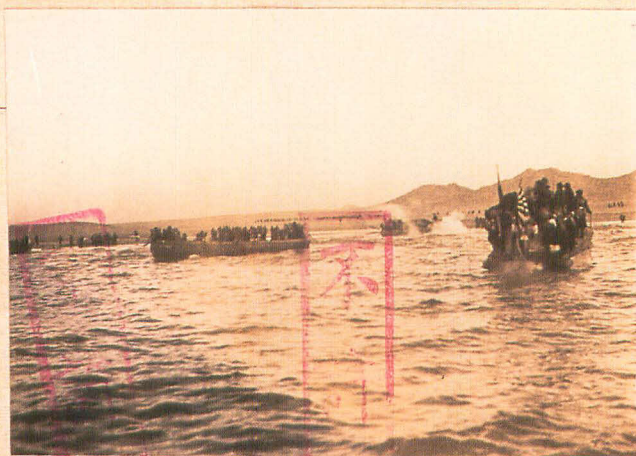
「津浦戦線　徳州飛行場　陸の荒鷲達　中平部隊」上2枚では、写真の背景を消すことと、説明から「徳州飛行場」を「○○に於ける」とぼかすこと、左下では機銃を消すことと地名をすべて削ることが指示され、ガソリン補給中の写真は不許可…徳州1937/10/22

背景や飛行機の機銃を消し、地名も完全に削るようにと指示された「津浦戦線　徳州飛行場」。
中国人が爆弾を運んでいる写真は不許可…徳州1937/10/22

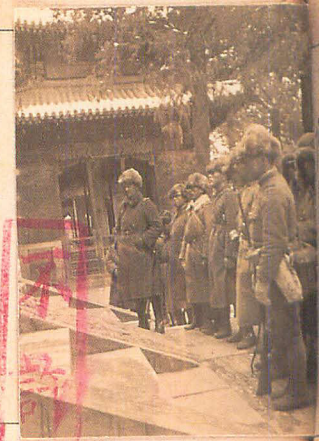
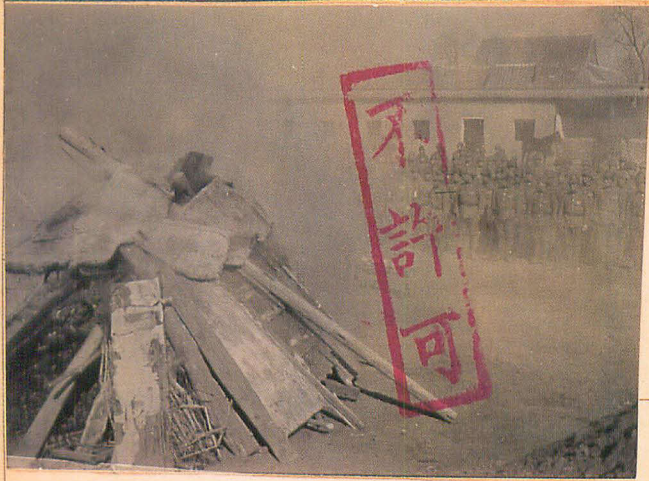
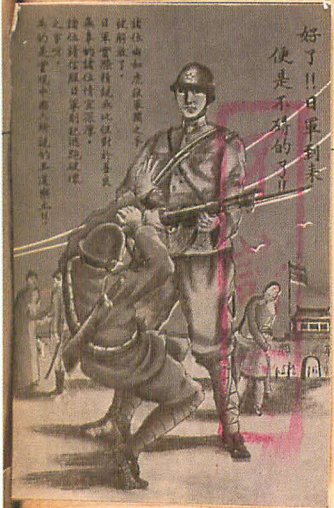
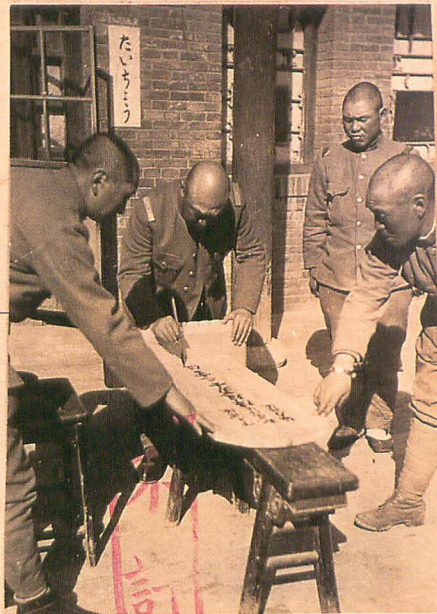
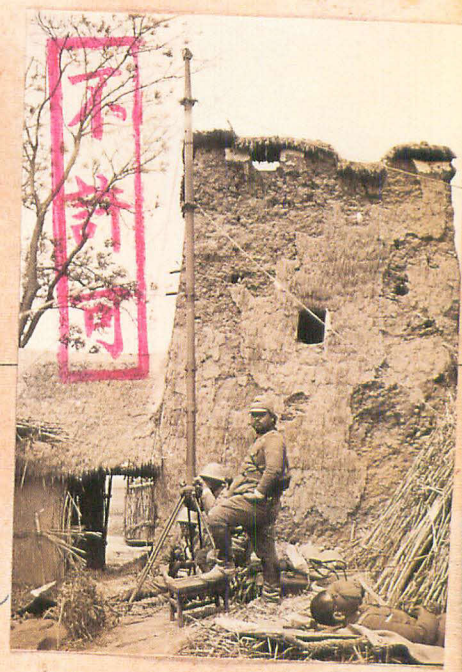
不許可となっているのは、前ページと同じく、中国人が爆弾を運んでいる写真。
徳州駅を警備する日本軍兵士は、背景を消すことが指示されている…徳州1937/10

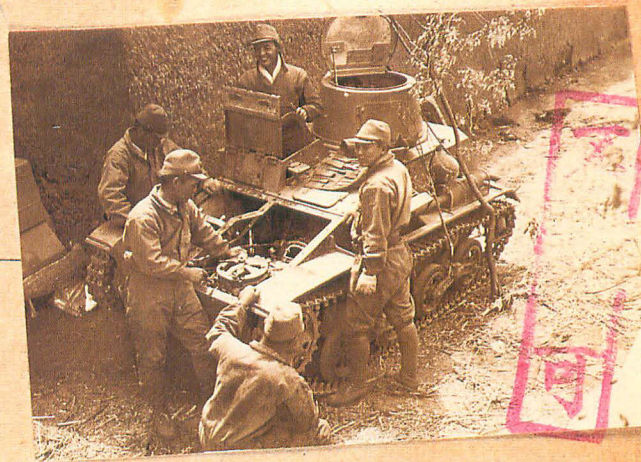
山西戦線。日本軍北支那方面軍は11月9日、太原を占領した。写真上は、太原の小北門を爆破し万歳を叫ぶ和田部隊＝第5師団工兵第5連隊。
中と下の写真は、太原の北大門を入城閲兵する板垣第5師団長(白手袋で敬礼している人物と思われる)で不許可になった…1937/11/9

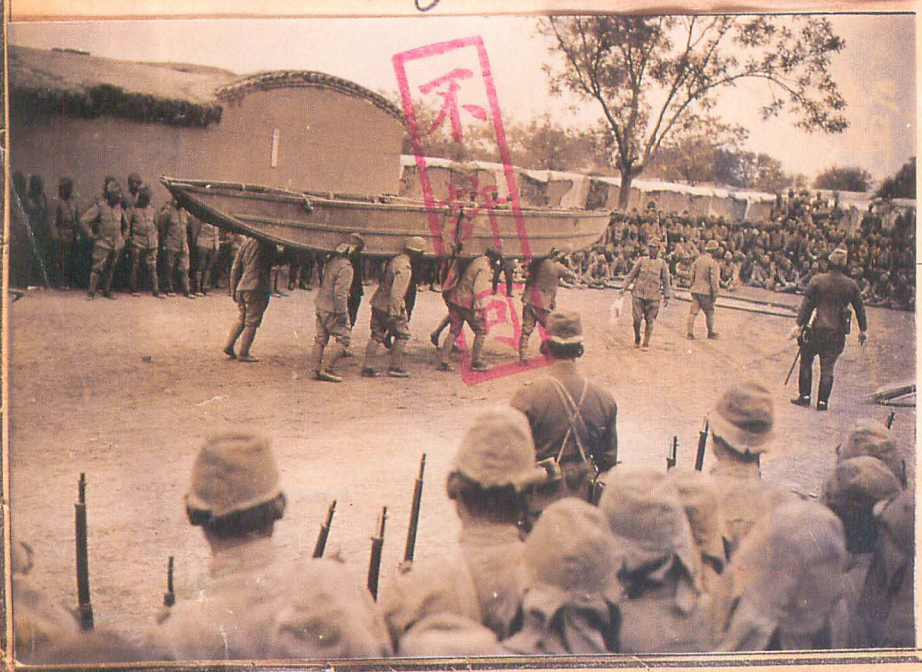
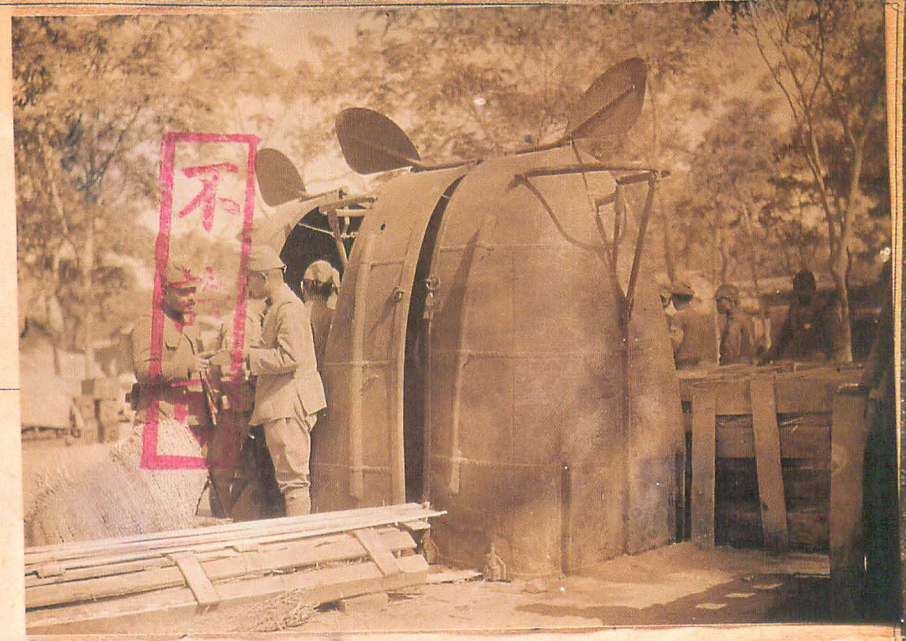
「山西戦線　太原陥落　板垣部隊長入城」(写真上)は、中央の白手袋姿で敬礼している人物が板垣部隊長＝第5師団長と特定できると思われたためか不許可。中の写真は上と同様だが、拡大しないことと肩章を消すこと、さらに「板垣部隊長」を「○○部隊」とすることで掲載許可となった。写真下は、肩章を消すことと、写真説明で同様の指示がされている…1937/11/9

津浦沿線を南下した日本軍北支那方面軍第2軍は11月15日には黄河北岸に達した。しかし参謀本部は、南京方面へ兵力を集中させるため、渡河作戦は延期とし、渡河に備えて偵察を命じた。
写真上は、黄河を渡るための偵察部隊。写真中は、渡る前の鉄舟修理の様子で不許可となった。下は、夕飯用に雁を撃つ兵士…1937/12/2

上の写真は11月30日、黄河偵察に現地の服に着替えた沼田部隊＝歩兵第39連隊。中の写真は12月6日、現地の服を着た日本軍兵士。日本軍兵士が中国服姿で写っている写真2枚は不許可となった。中の写真には、後に阪急、東映監督、パ・リーグ審判副部長を務めた井野川利春氏が写っている（左から2人目）…1937年

上の写真は11月30日、黄河偵察のため現地の服に着替える沼田部隊＝歩兵第39連隊で不許可とされた。
下の写真は、出発前に故郷に手紙を書く兵士。左の写真は12月6日、氷を砕いて水を汲む日本軍兵士…1937年

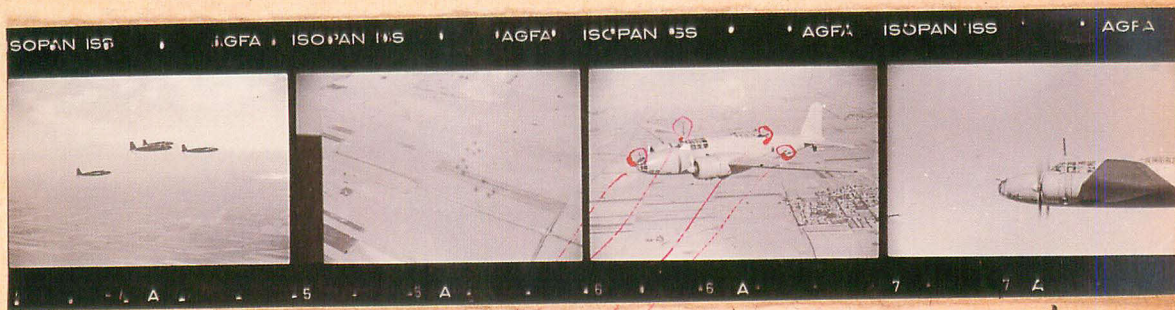
黄河岸で中国軍の陣地を観測する木下千田隊、木下部隊とするよう指示がある。
日本兵士が現地の服を着た姿で写っている2枚の写真は不許可とされている…1937/12/7

1938年1月10日、日本海軍第4艦隊は青島に上陸、占領した。上は長山列島付近に集結した第4艦隊(6日)。
中と下は山東半島に上陸する陸戦隊(10日朝)。中の上陸用舟艇の写真は不許可になった…1938/1月

上は青島湾の中国船舶。中の青島市街を進む戦車隊の写真は不許可になった。
下は湾から見た青島市街…1938/1月

日本軍北支那方面軍第2軍は、12月23日黄河を渡河、26日済南を占領、さらに津浦線を南下し1月4日曲阜、11日済寧を占領した。
上2枚は曲阜の孔子を祀る孔子廟大成殿を参拝する長瀬部隊長＝第10師団歩兵第8旅団長。中2枚は孔子の末裔と長瀬旅団長ら(22日)。
下は日本からの慰問小包を受け取る済寧の沼田部隊＝歩兵第8旅団歩兵第39連隊兵士たち(21日)。右の2枚は肩章を消す、長瀬部隊長を○○部隊とする指示があるが不許可…1938/1月

津浦戦線。上の日本軍戦死者を火葬している写真は不許可になった。
以下、済寧雑観。小西部隊長。砲兵観測所…済寧1938年/2月

日本軍北支那方面軍第1軍は京漢線沿線を進み、2月中に京漢線西の黄河北部地域を占領した。上は彰徳で大野部隊の先頭を進む帰順中国軍(22日)。
不許可は日本軍がまいた宣撫ビラと投降票…1938/2月

山西戦線。北支那方面軍第2軍第108師団は、京漢線邯鄲から山西省南部に進み、2月20日潞安を占領した。上から下元部隊＝第108師団慰霊祭における東京日日新聞特派員の弔旗。戦死者の位牌を書く苫米地部隊長＝歩兵第104旅団長の写真は不許可になった。「戦線美談古木部隊……佐藤繁則上等兵」。潞安民衆の万歳…潞安(現長治)1938/3月

津浦戦線の姫路部隊＝第10師団歩兵第39連隊。敵陣地を観測する兵士の写真は不許可になった。総攻撃する部隊(上)。
最前線でカメラを回す特派員。進撃する歩兵部隊(下)は、部隊名を消すよう指示がある…1938/4/26

津浦戦線、森の大木を押し倒して進む田村戦車隊。上から2枚目の修理中の戦車は不許可になった。
写真では戦車の砲身と字、写真説明では戦車隊名を消す指示がある…胡山1938/5月

津浦戦線。上は「胡山付近の敵陣を陥入れた田村戦車隊の万歳」。中2枚の日本兵が中国人捕虜を銃剣で刺している参考写真は不許可。
下は「作戦をねる田村戦車隊」。隊名は○○、砲身と字は消す指示がある…1938/5月
参考写真とは、不許可となる予想がついている写真(死体など)に現地特派員がつけたもので、検閲にまわさず社内極秘として保存されたものだが、
この2枚の写真がなぜ検閲にまわったのかはわからない。

日本軍大本営は徐州付近に集結中の中国軍主力に打撃を与えるため、徐州作戦を実施した。北支那方面軍第1軍は5月9日、第14師団に黄河渡河を命令した。
上下は黄河渡河用の鉄舟のモーターを調べる小金沢部隊、モーターの写真は不許可になった。中は並んで肩をたたき合う安田騎兵部隊＝騎兵第18連隊‥豚虎村1938/5/'10

上はカムフラージュして進む横山部隊＝第14師団歩兵第2連隊。
中下は黄河渡河用材と鉄舟を運ぶ小金沢部隊、鉄舟が写っている写真は不許可になった…豚虎村1938/5/10

上は黄河渡河用鉄舟のモーターを調べる小金沢部隊、鉄舟の写真は不許可になった、写真の折畳鉄舟は組み立てると36人の武装兵士が搭乗できた。
中は夕照の麦畑を行く安田騎兵隊＝騎兵第18連隊。下は黄河を泳いで偵察し、報告をする深津上等兵…豚虎村1938/5/10

以下61ページに続く

1939年 華北

九七式重爆撃機の機関銃座と無線アンテナを必ず消すという注意がある。
軍用機の装備・性能は機密にされた…1939年

検閲済

大阪毎日 写真部 16.9.28

セ334－2

不許可

セ334－3

不許可

セ334－4

検閲済

セ334－5

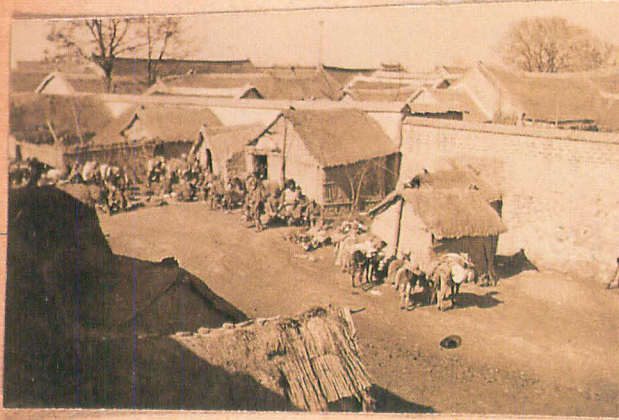
不許可

○○基地と基地名は伏せられている。戦闘機の出発準備をする整備員、エンジンの構造の一部が分かるため不許可になった。
上から4枚目は爆弾を戦闘機まで運ぶためにトラックに積み込む整備員、爆弾の写真は外形から性能が推定できるために不許可になるのが一般的だが、この写真は掲載許可となった…1941/9月

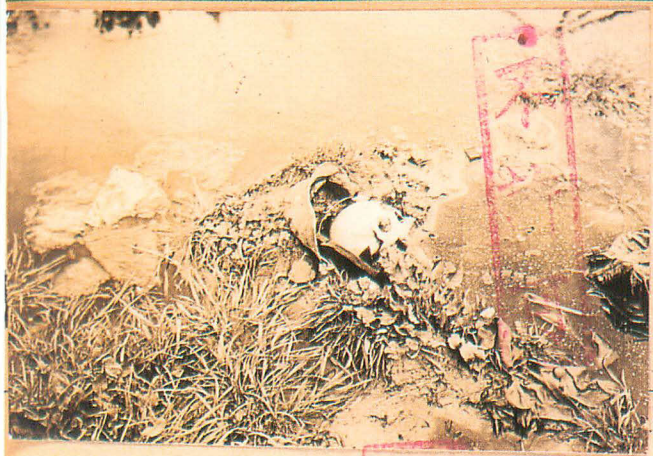
上は山西省西南の黄河畔を進む日本軍(26日)。中2枚は山西省・河南省境の山岳地帯を進む日本軍(26日)。「対岸の敵陣砲撃」の写真には「右のフトンの様なものを消すこと」との指示がある。
なお「手続不用」の判は、直接、軍の検閲に持参していた東京写真部が、検閲を受ける必要なしと判断したもの…1943/6月

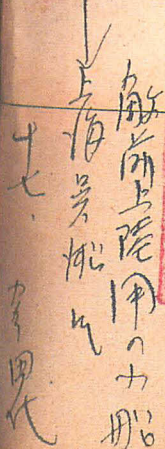
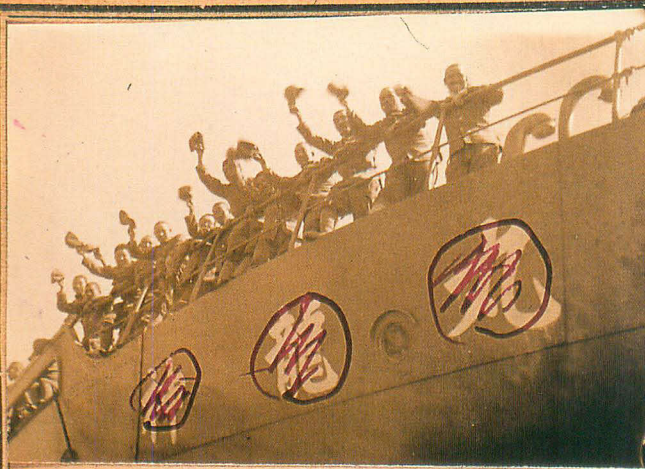
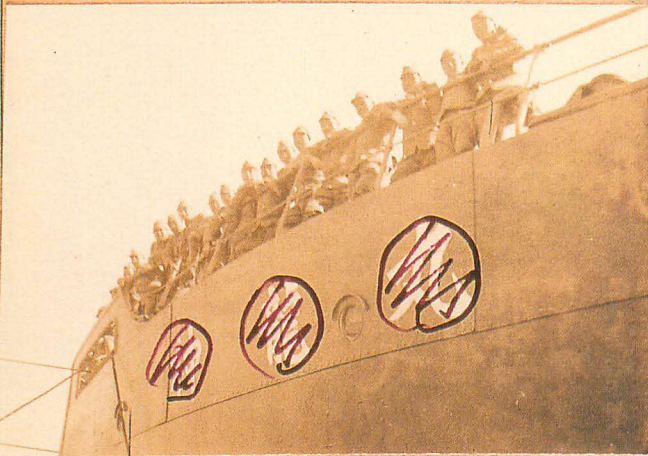
三笠宮の大陸視察。陸軍省提供の写真、上は前線部隊の射撃練習を視察（1943年12月）。中は一文字山戦跡で中国人老婆との会見（1943年1月）。内蒙古（モンゴル）自治区南部のオルドス・デルタを視察するために黄河を渡る船上（1943年8月）。1944年に「紙面掲載済」とある

上の軌道車で鉄道修理作業に従事する鉄道省保線手たちの写真は不許可になった(1月23日)。上海北部、呉淞鎮の廃墟に掲げられた日の丸の旗(22日)。大場鎮付近の農家修理(23日)。蕪湖(南京の南)の○○司令部より揚子江の眺め、写真説明の司令部を消す指示がある(22日)…1938/1月

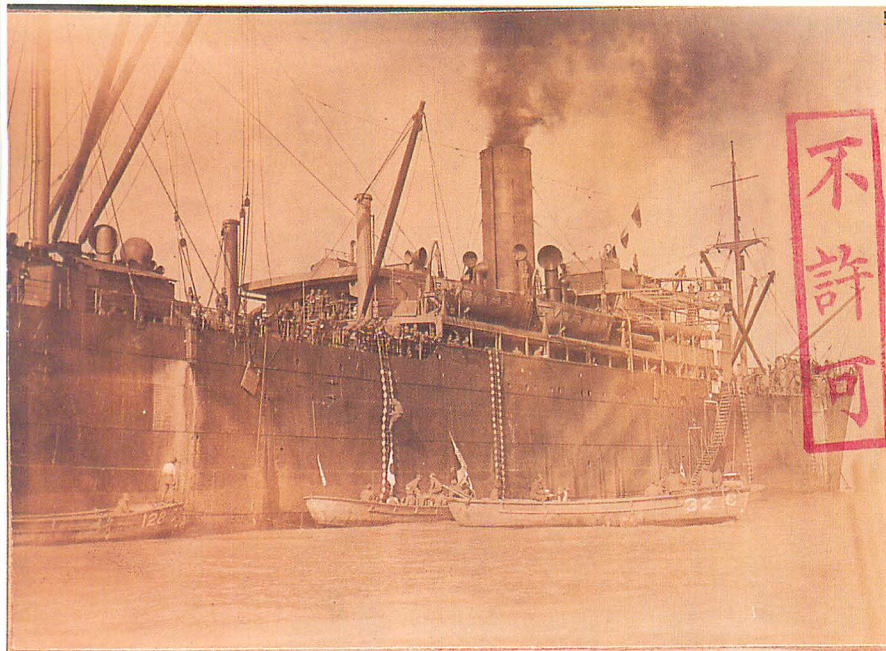
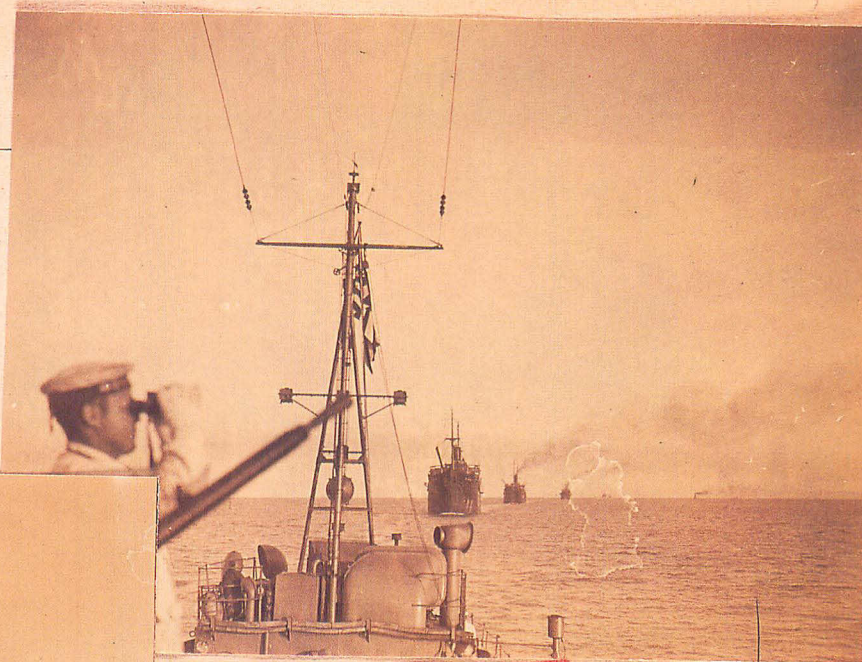
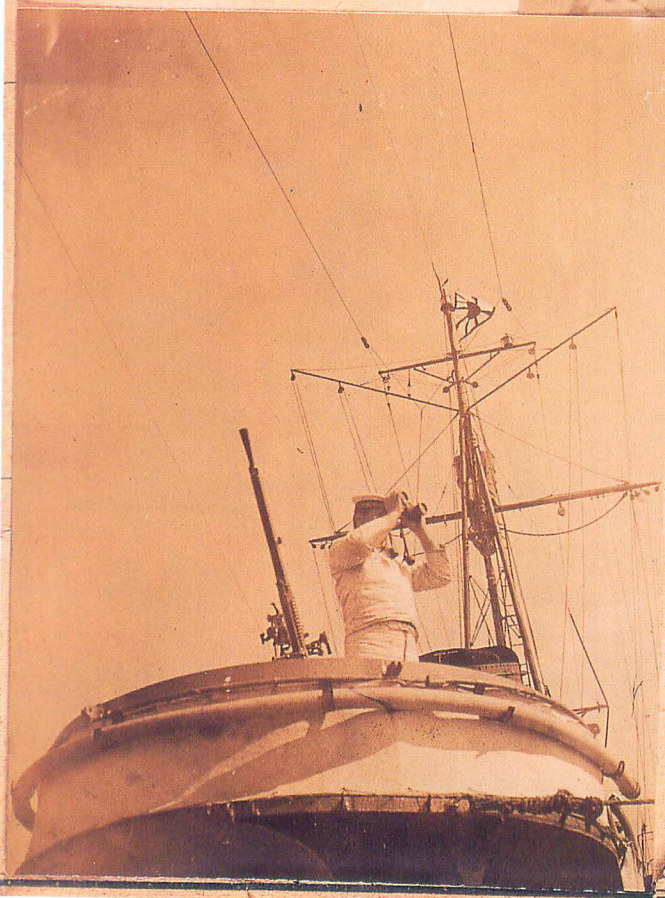
上海事変(第1次、1932年1月28日勃発)記念日の上海日本人墓地。上は陸戦隊慰霊碑に詣でる大川内(写真説明では大河内とある)上海特別陸戦隊司令官。
中の戦死者慰霊碑に焼香する艦隊参謀長の写真は不許可になった。下は上海事変海軍戦死者忠魂碑…1938/1/28

津浦線北上部隊＝上海派遣軍第13師団。上から南京北方の普善の現地小学校教室で食事をする沼田部隊長＝第13師団歩兵第26旅団長の写真は不許可になった。
中2枚は臨淮関入城後に一休みする部隊、沼田部隊は旅団であるため部隊名を○○にする指示がある。下は蚌埠入城の沼田部隊、戦車の「砲身をぼかすこと」との指示がある…1938/2月

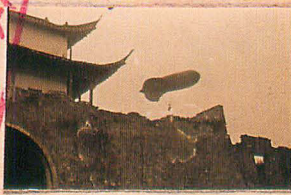
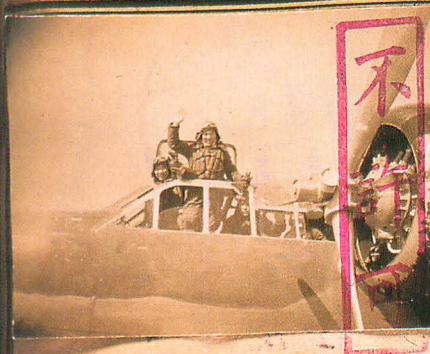
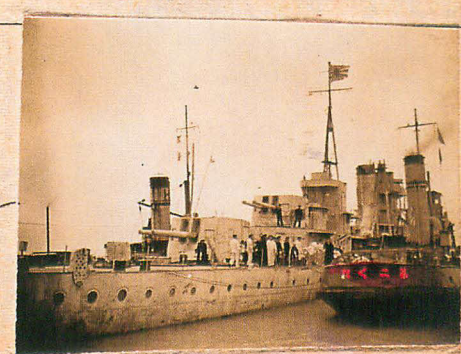
津浦線北上部隊。上左は津浦線蚌埠、部隊名入りのエプロンを着た中国人コック、エプロンには「堀場隊本部室　使用炊事」とある。上右は蚌埠入城する萩原部隊長。
下は南京城一番乗りで軍刀と賞状をもらった山際少尉と脇坂部隊長＝第9師団歩兵第36連隊長、賞状は不許可、肩章を消す、司令部玄関を○○玄関に直す指示がある…1938/2月

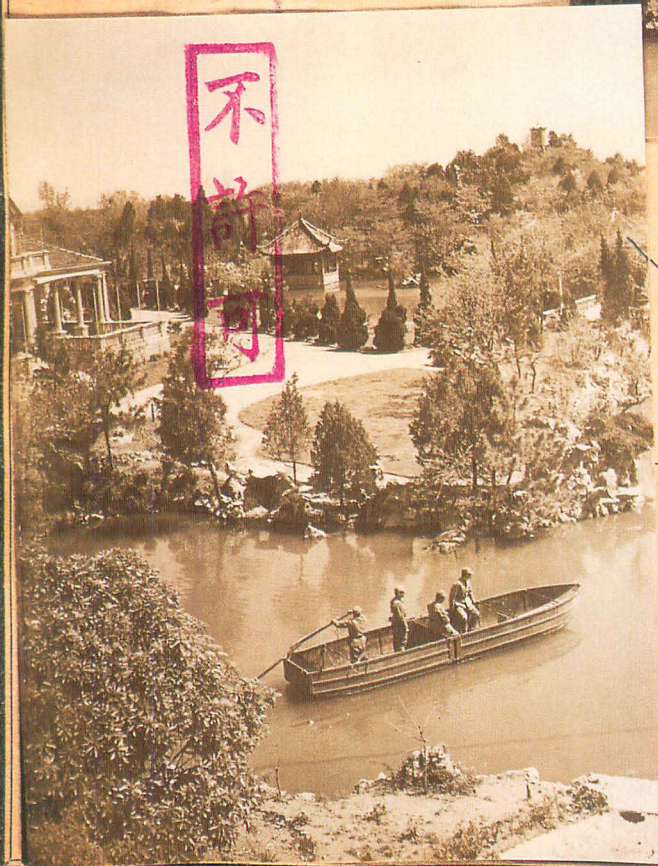
南京東方の鎮江。上左は中山路沿いの「床屋さんの開業」、上右は復興を急ぐ中国人。
下は自治委員会裁判所の写真で、押収された証拠品、裁判長前に立つ被告、裁判傍聴人、裁判所入り口など、被告の尻を竹で叩く写真は不許可になった…鎮江1938/2月

上海北郊の羅店鎮。上2枚は参考写真で、激戦半年後の中国兵の死体、この写真は不許可になった。187ページを参照。
下2枚は羅店鎮市場街…1938/2月

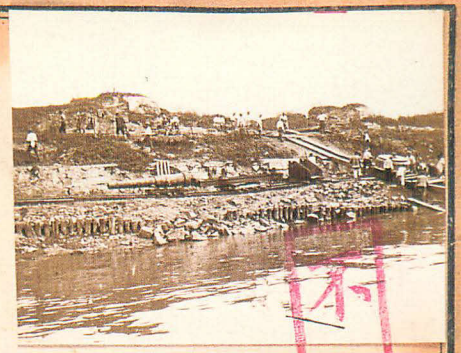
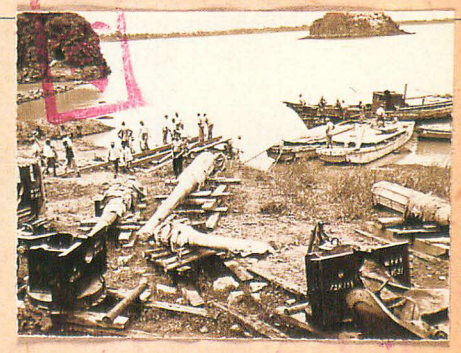
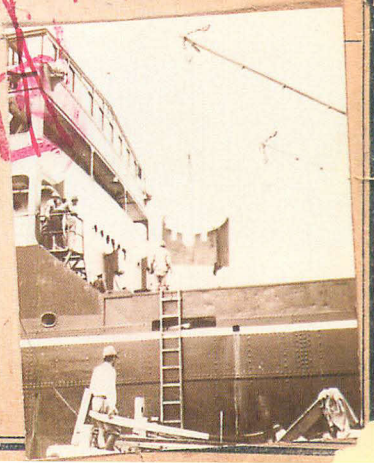
上3枚は南京市街、「のみの市」雑踏、都大路を行く日本女性(2月26日)。
下2枚は上海呉淞路、日本に帰る兵士の行進の写真は不許可になった(27日)。191ページを参照…1943/2月

上から帽子を振って上海に別れを告げる日本兵たち、船体の字を消す指示がある。乗船して一休みの谷川部隊。上陸艇の写真は不許可になった。
崇明島に敵前上陸の谷川部隊を乗せた神龍丸、船名を○○にする指示がある…上海呉淞1938/3/17

上から上海に別れを告げる日本兵たち。敵前上陸部隊を乗せた神龍丸。
下2枚は出港を待つ日本兵たち。船体の字は消す、船名は○○丸にする指示がある…上海呉淞1938/3/17

上2枚はサイン攻めにあう渡辺はま子、川畑文子(上)ら呉淞兵站支部を慰問した慰問芸術団。
揚子江沿岸に上陸する飯塚部隊＝第101師団歩兵第101連隊の写真は不許可となった…上海1938/3月

上から4枚目、母艦から揚子江沿岸に上陸する飯塚部隊＝歩兵第101連隊の写真は不許可。
3月17日南通州（南通）に入城する飯塚部隊など…1938/3月

陸軍部隊が乗船した御用船を援護し、上陸を見守る戦艦は名前を伏せることで許可。
御用船から上陸用舟艇に乗り込む南通上陸部隊の写真(上)は不許可となっている…南通1938/3/17

和平門付近での「藤岡部隊気球隊の障碍超越訓練演習　城門乗越」。
気球が大きく写った写真は不許可になっている…南京1938/3/20

「では行ってまいります」漢口爆撃に向かう海軍航空隊、機体が写った2枚は不許可。
隊員の記念撮影（上から2枚目）は「飛行機を消す」、中国軍艦「平海」の写真（下）は「船の字を消す」ことで許可となった…上海1938/3月下旬

「戦線にこの日本趣味」と写真説明がつけられた3枚のうち2枚は不許可に
…上海1938/4/15

馬淵部隊の軍旗手・美並義夫少尉の写真(上から2枚目)は不許可。
「腹がへっては戦は出来ぬ。帽子山頂の昼食」(下)など山中を進軍する馬淵部隊…1938/4月

杭州北方の日本軍部隊。
上から3枚目「杭州北方、上野旅団長(第3師団歩兵第29旅団長)　高級副官の稟議」は「○○部隊の幹部の稟議」と写真説明を直して許可に…1938/4月下旬

大砲引き下ろし作業。不許可とされた4枚のうち2枚は不許可が取り消され掲載可に。
上から4枚目の写真説明は「大砲引卸作業　船倉に」を削除し「積み込まれた砲弾」にとの指示…鎮江1938年

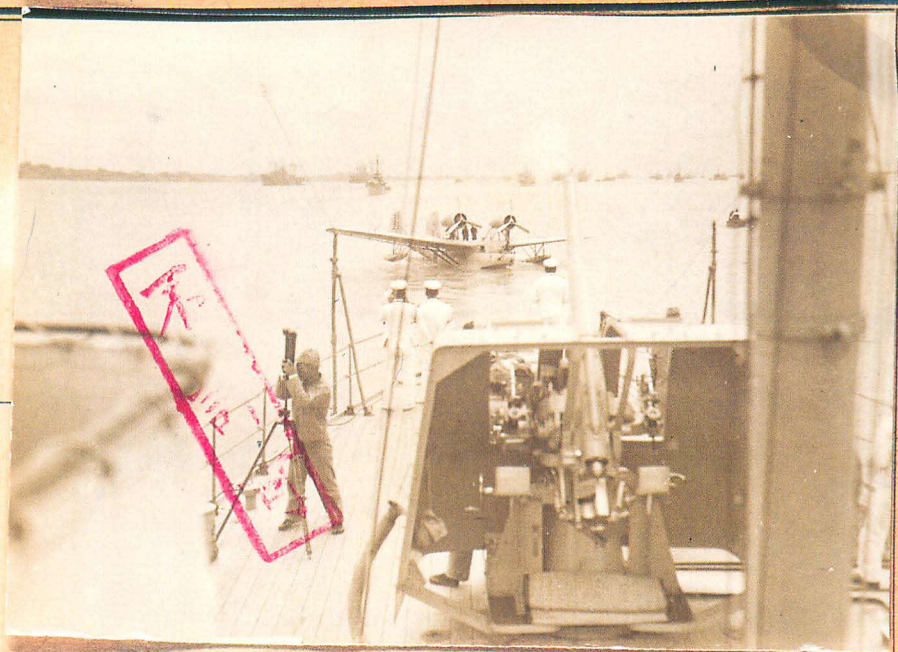
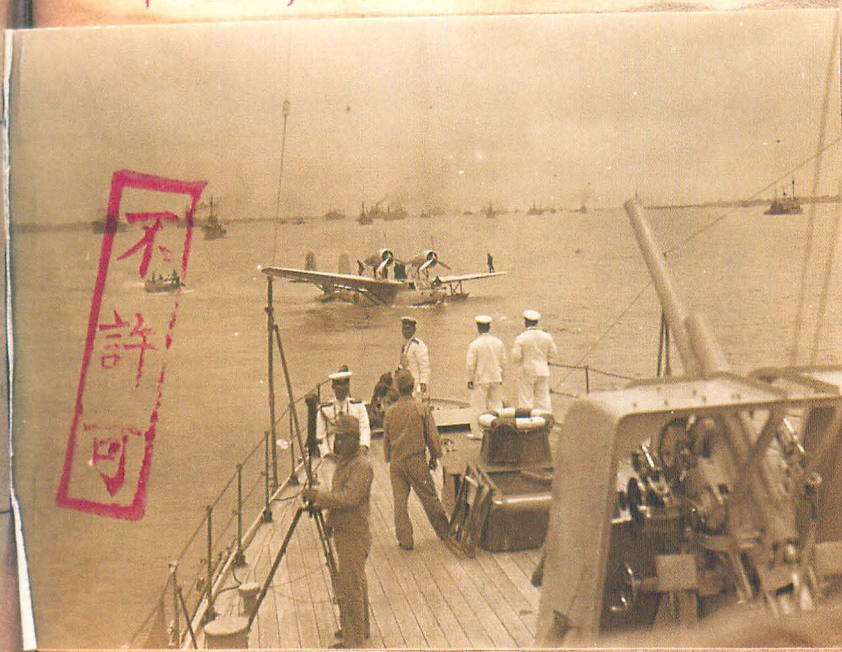
日本軍中支那派遣軍（1938年2月編成）は5月1日、戦闘司令所を蚌埠に移し、徐州作戦の指導に当たった。蚌埠を視察する秩父宮。上の写真の畑最高指揮官は中支那派遣軍司令官。
不許可の上から3段目右には「幕僚との記念撮影は絶対に掲載禁止」とカメラマンも注釈を付けている…1938/5/8

徐州作戦・黄河渡河戦。北支那方面軍第1軍第14師団は5月12日未明、黄河を渡河。黄河を渡る土肥原部隊＝第14師団(上2枚)。
「黄河堤防下の軍艦に訣別する横山部隊(第14師団歩兵第2連隊)の勇士」(下)。上陸艇が写っている写真(中)以外は部隊名を伏せて許可に…1938/5月

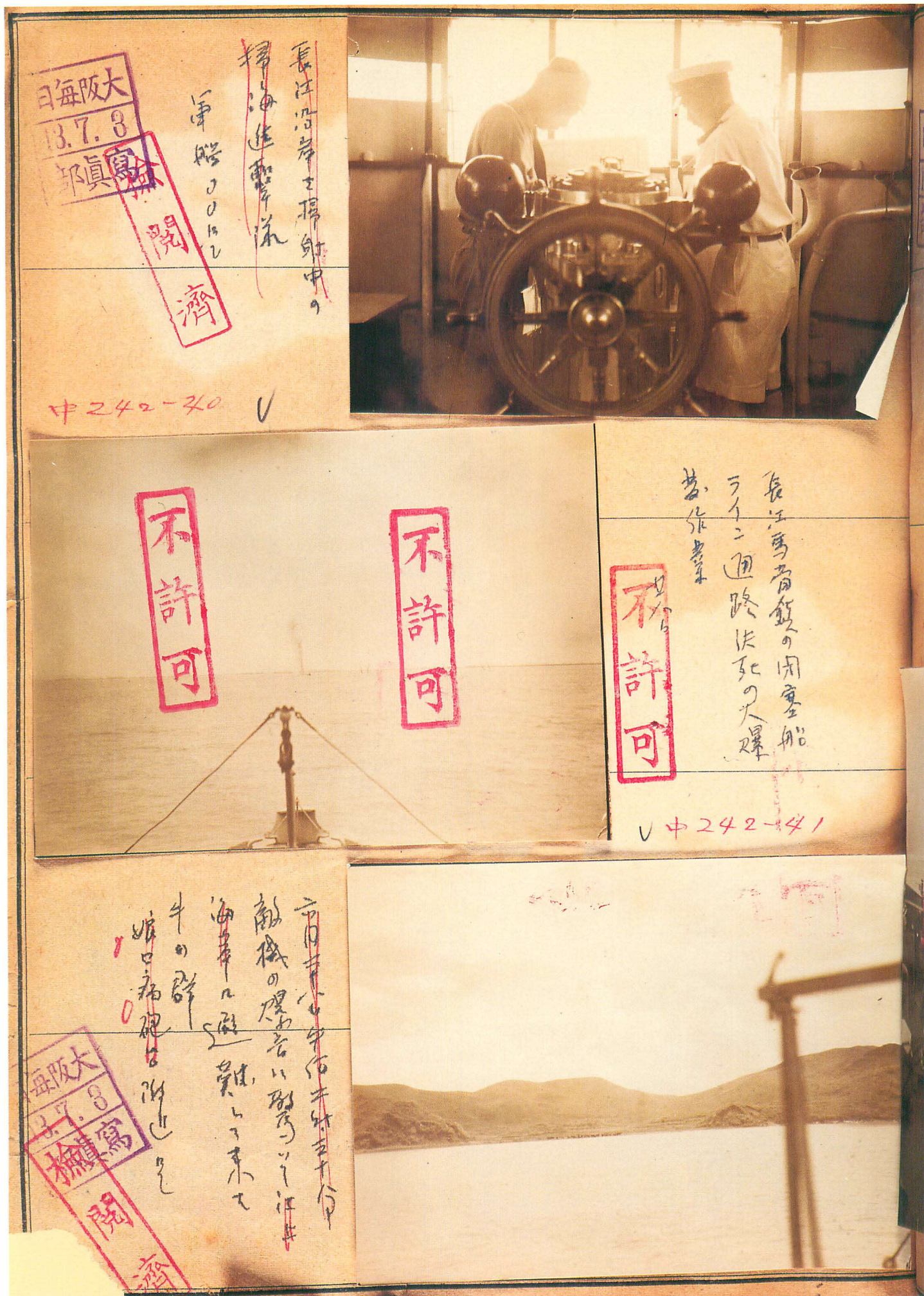
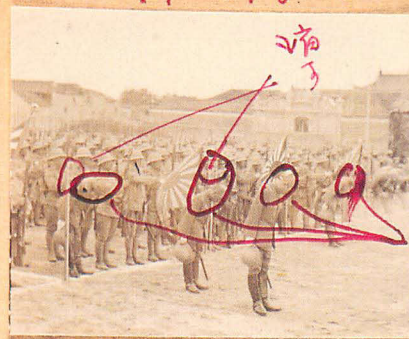
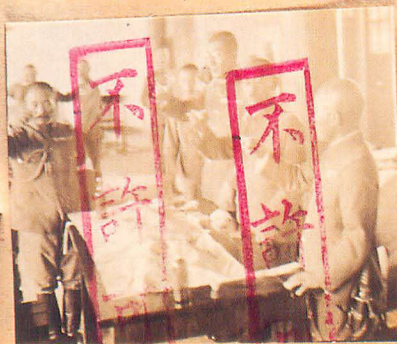
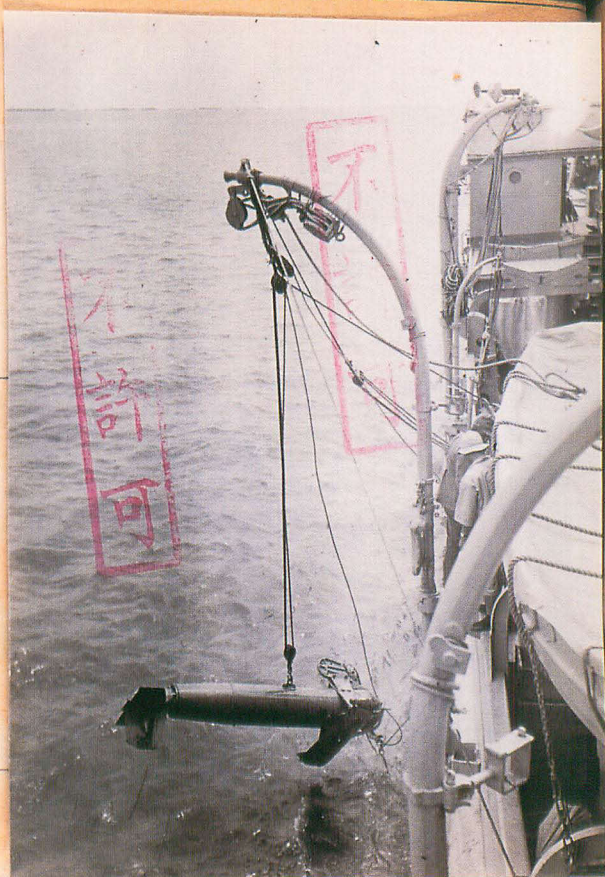
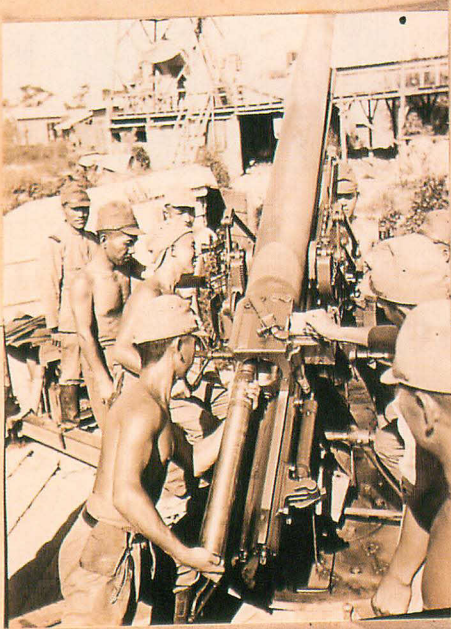
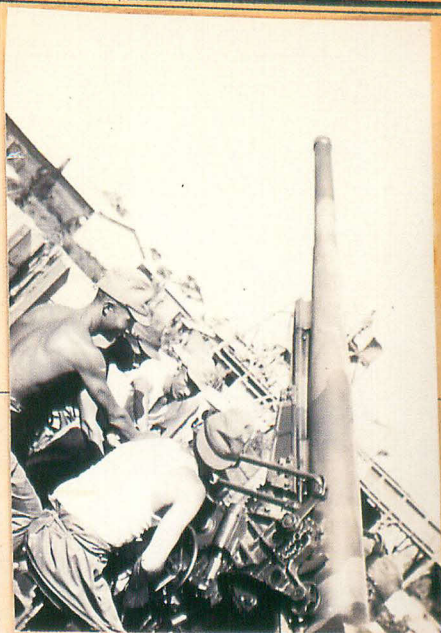
黄河渡河戦。鉄舟が写っている中の写真は不許可。

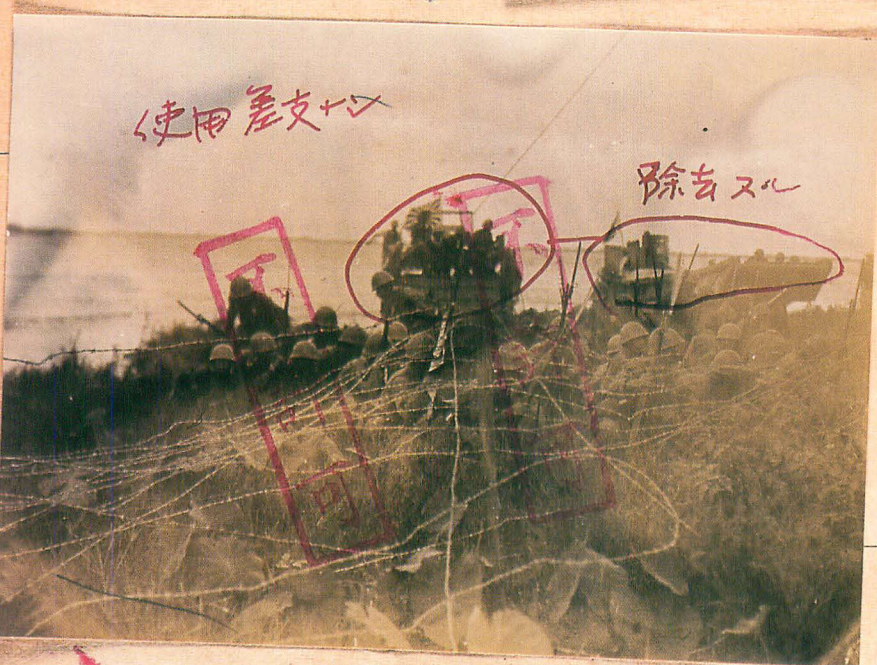
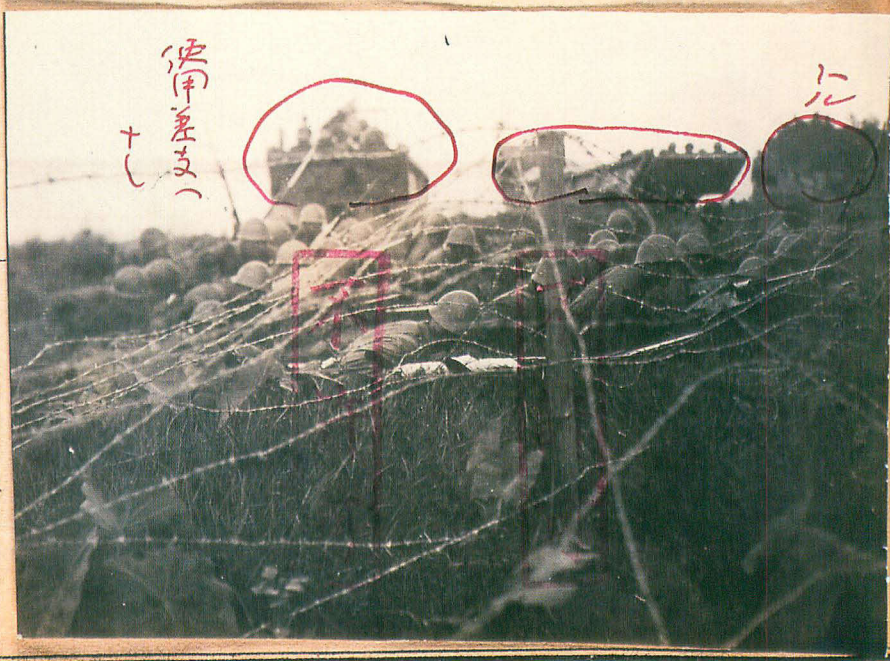
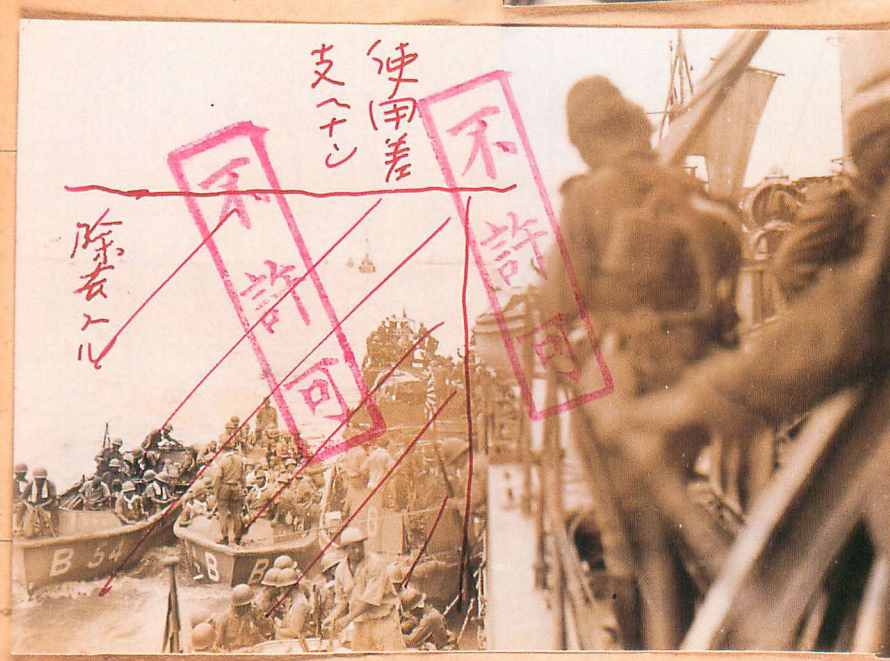
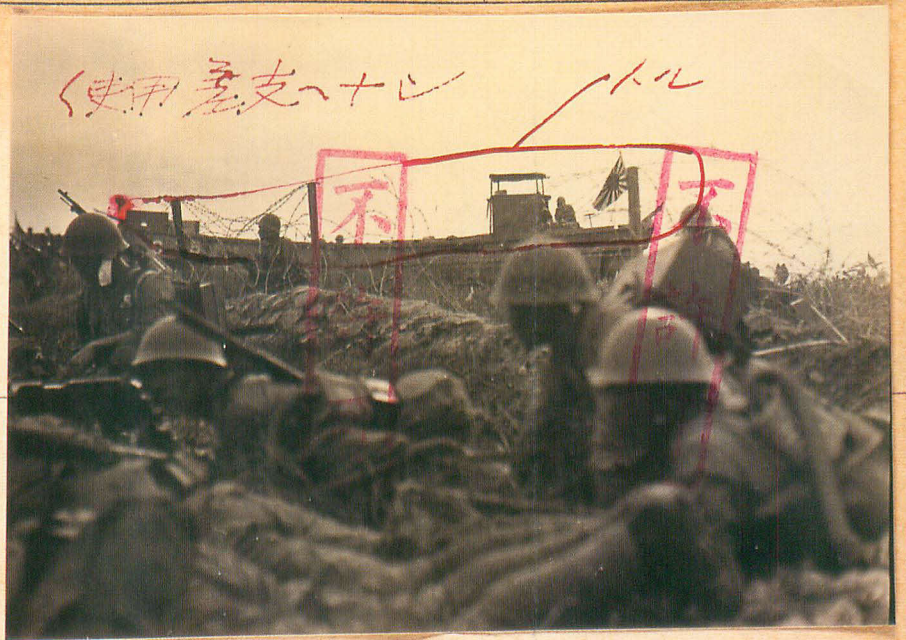
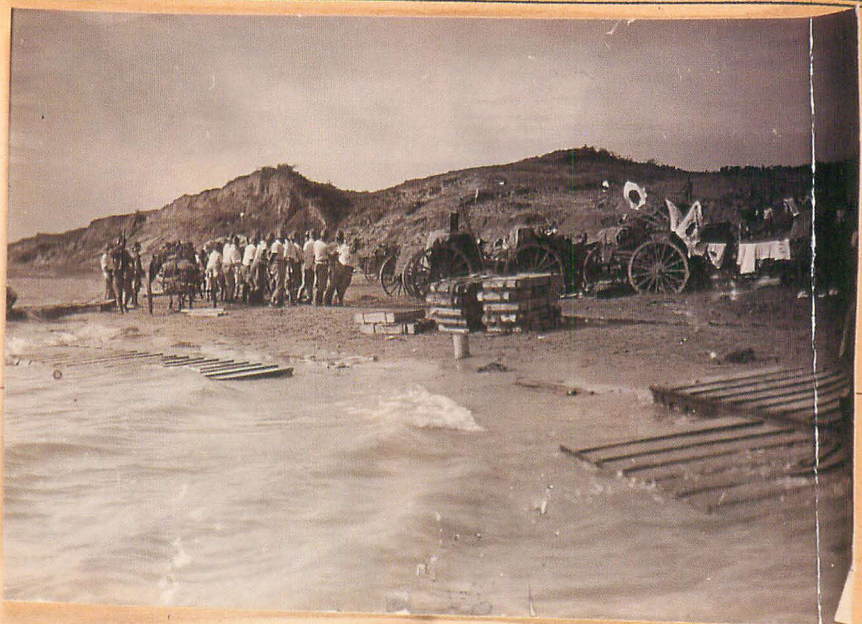
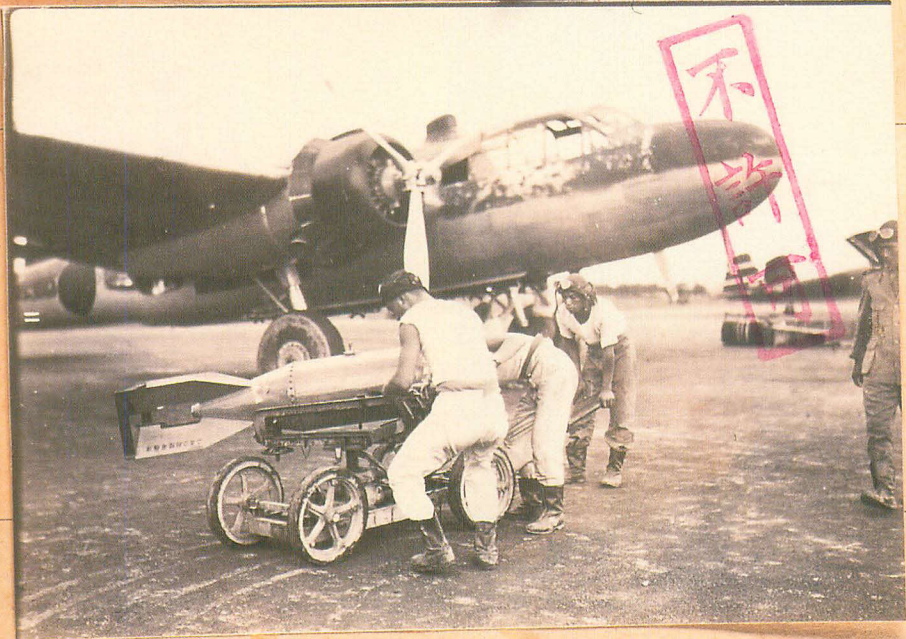
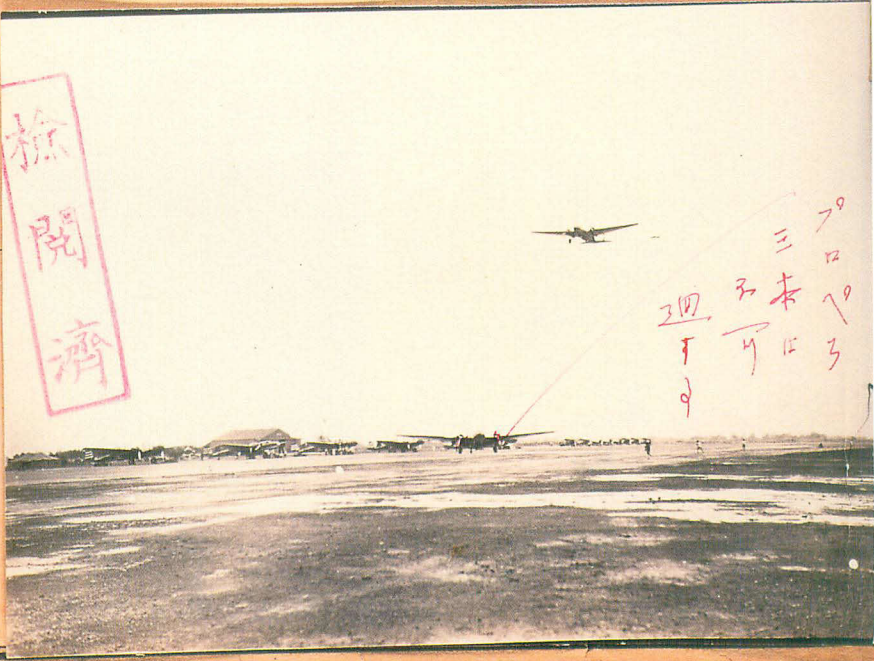
「軍旗を先頭に渡河の命を待つ」という写真説明は削除、「横山部隊(歩兵第2連隊)」は「○○部隊」に修正指示…1938/5/11

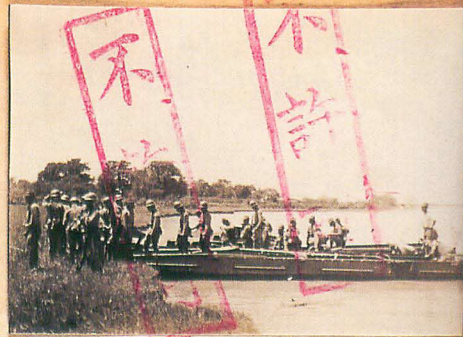
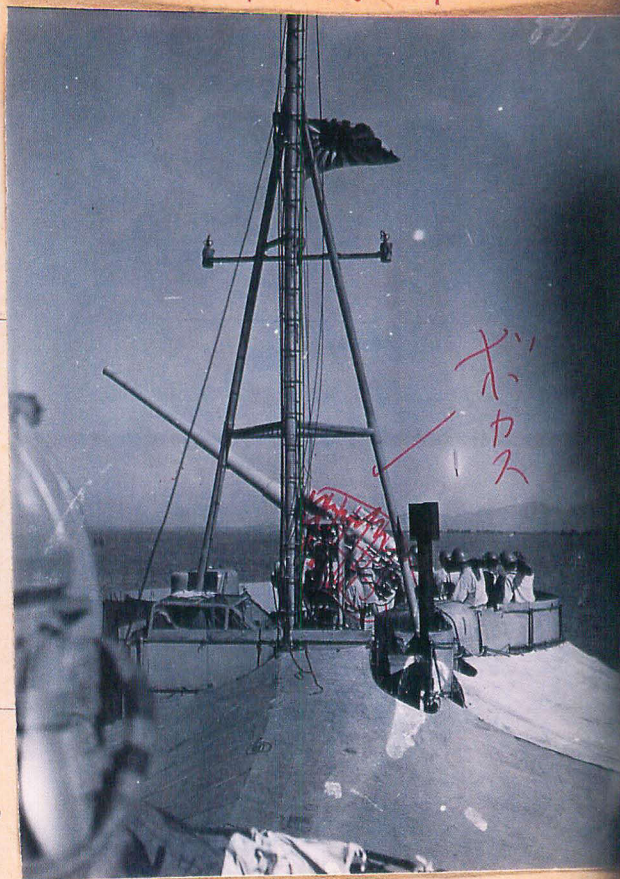
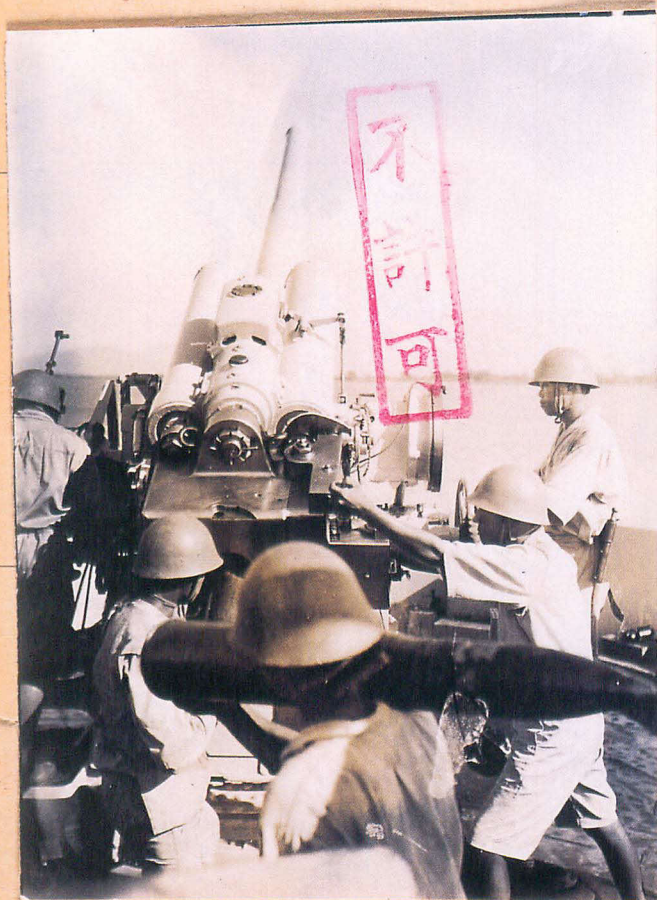
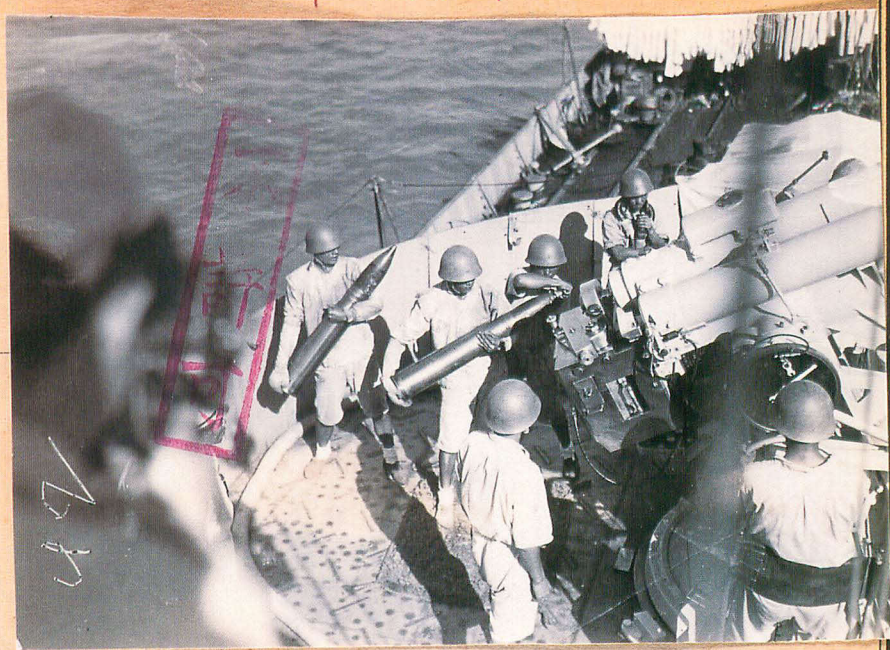
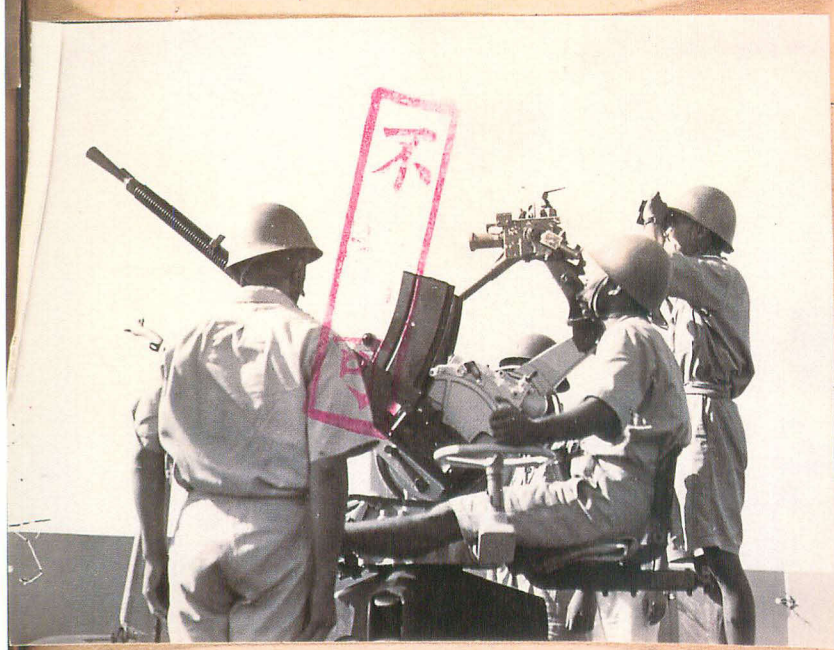
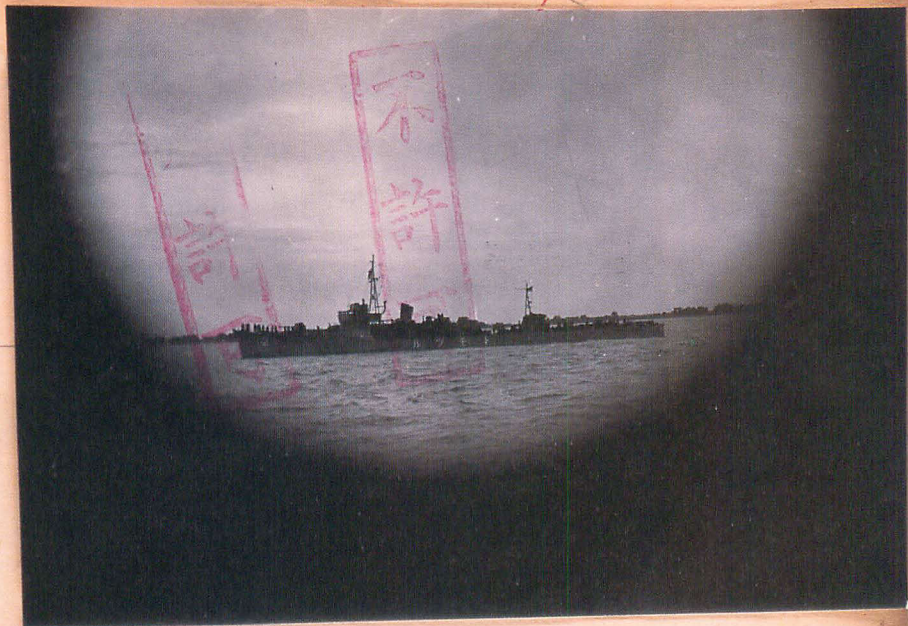
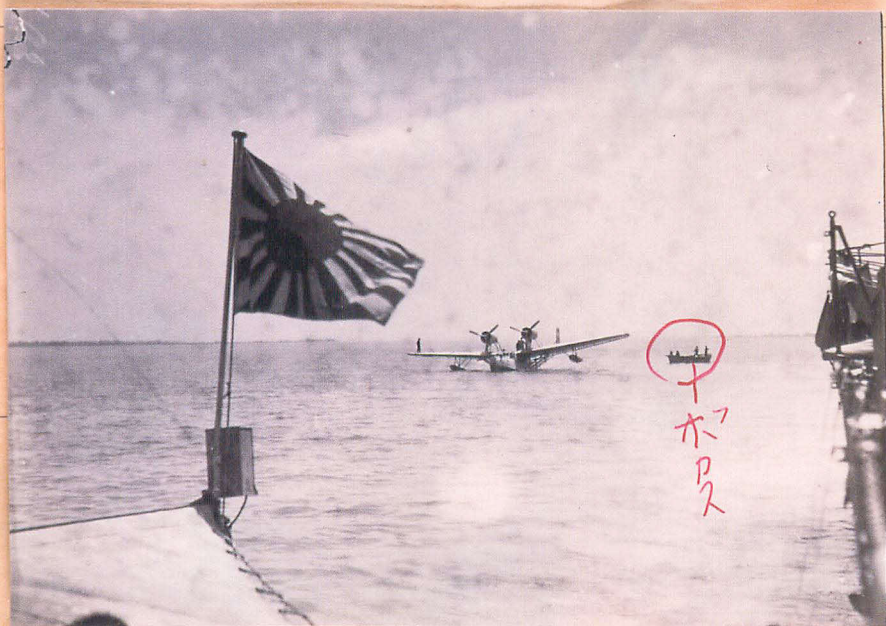
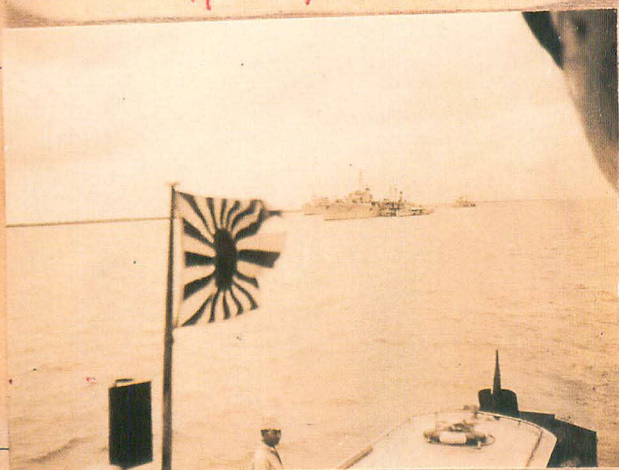
黄河渡河戦。大黄河を渡河する土肥原部隊＝第14師団。
上陸用舟艇の全容が写っている上の写真は不許可となっている…1938/5/12

徐州作戦。戦場における濾過・給水・鑿井装置の写真はすべて禁止。写真上は5月26日黄河畔で水をくみ、その場で清浄水にする急速濾過器を動かす防疫給水班と思われるが、急速濾過器は軍機扱いのため精密写真は不許可となった。下は隴海線蘭封付近の那須部隊＝第14師団歩兵第59連隊…1938/5月下旬

日本軍大本営は、徐州作戦終了後、次の漢口作戦の拠点とするため、5月29日、中支那派遣軍に安慶占領を命じた。また海軍も6月3日、支那方面艦隊に陸軍と協力するよう命じた。「安慶揚子江を圧するわが空陸の威力」と説明のある上2枚は艦砲と水上飛行艇が写っているため不許可…1938/6月

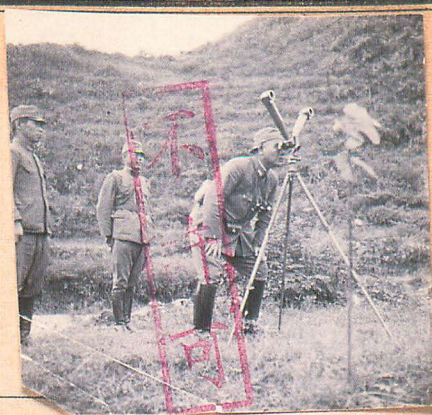
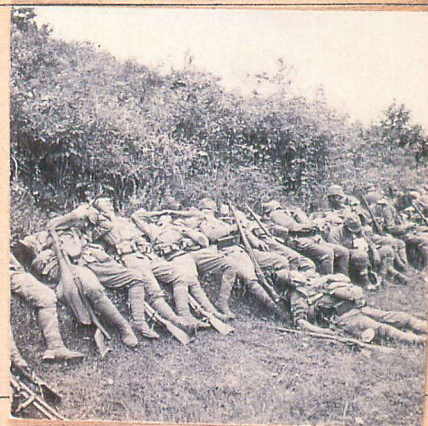
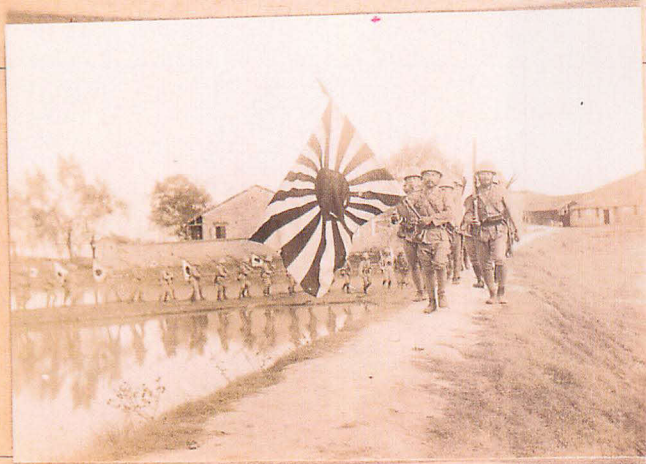
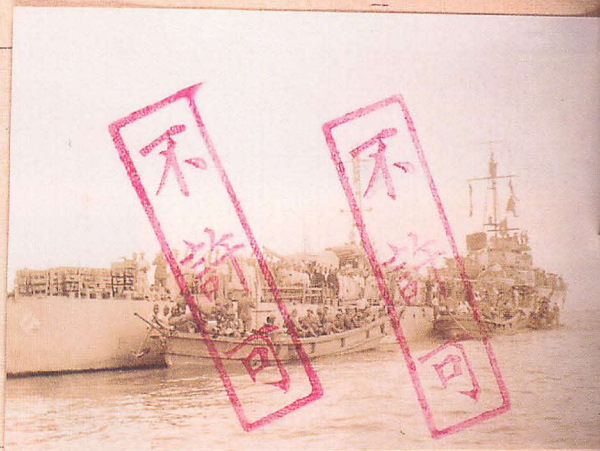
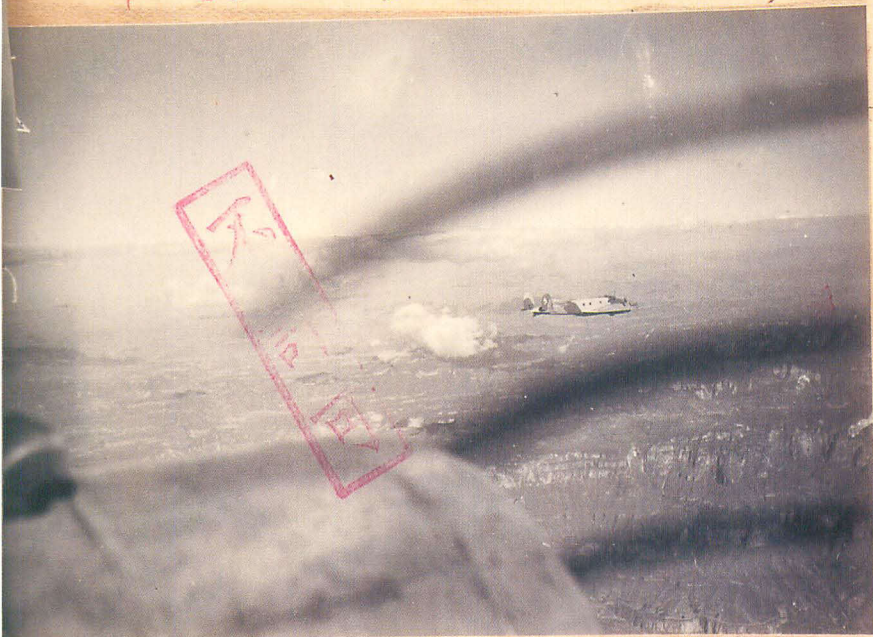
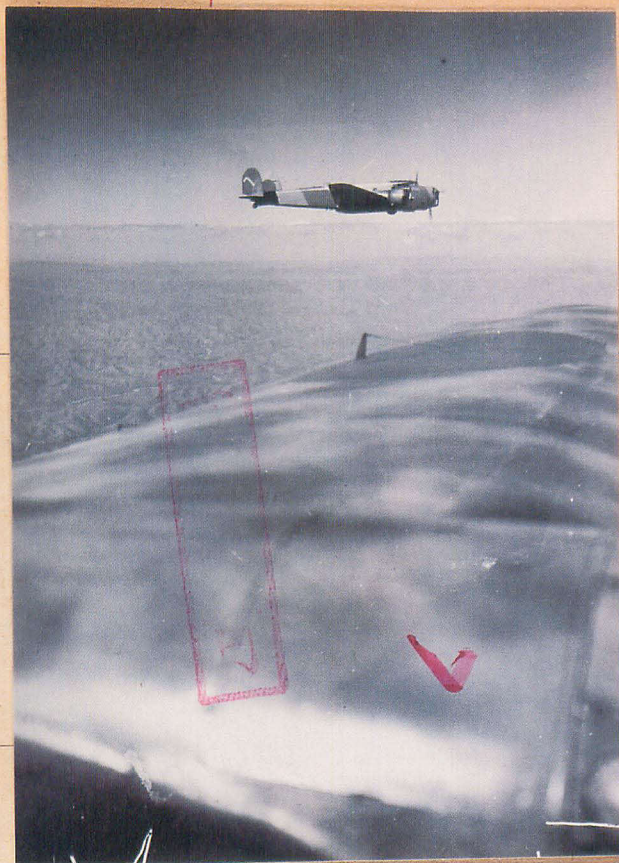
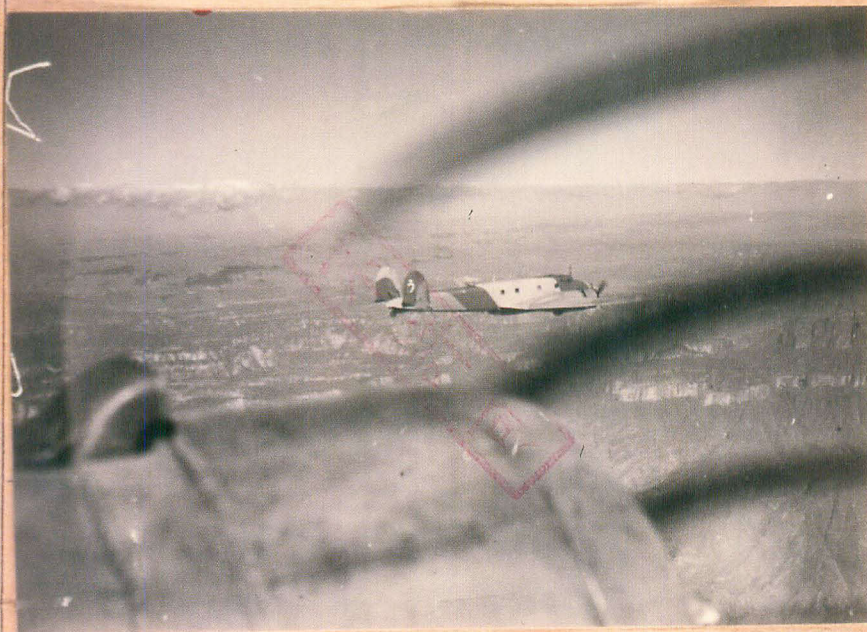
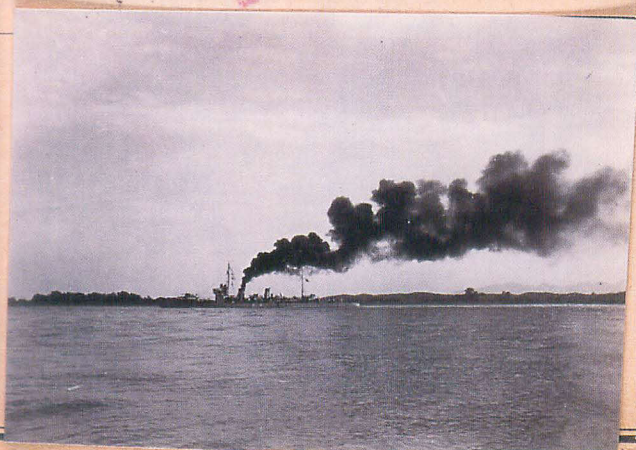
5月19日、日本軍は徐州占領、北支那方面軍は西南方面へ敗走する中国軍を追った。中国軍は6月12日、黄河を決壊させた。そのため北支那方面軍第14師団、第16師団は孤立した。
上は「減水した黄河を渡る酒井○隊長（第16師団歩兵第29旅団長）」。上の写真以外は場所を削除することで許可になっている…1938/6月

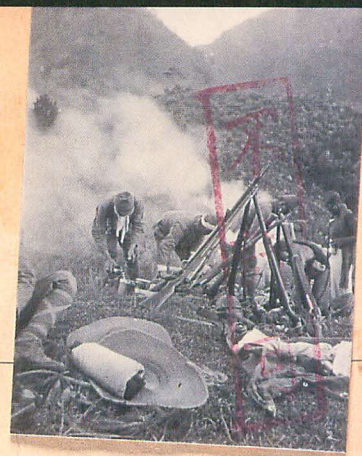
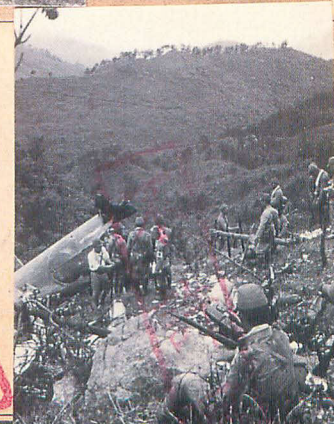
漢口作戦。長江(揚子江)を九江へ向け遡上する日本軍。2枚ともに不許可。特に写真下は「原板海軍省へ没収」と書き込みがある。
最高機密の写っているものは掲載不許可とともにネガ没収の処置がとられたことから、掃海作業用の機材が最高機密に属していたものと思われる…1938/6月

漢口作戦。「長江馬当鎮の閉塞船ライン通路決死の大爆破作業」の写真(中)は不許可。
上の写真説明は「長江沿岸を掃射中の掃海進撃隊」部分を削除、下の写真は日時、場所を削除し、「敵機の爆音に驚いて避難して来た牛の群」とすることで許可になった…1938/6月下旬

「徐州一番飛○○部隊　慰霊祭」の写真(上)は肩章と顔をぼかすことで許可に、感状授与祝賀会の乾杯写真(上から2枚目)は不許可。
下2枚はフランス工部局中央署内の中庭につくられたフランス祭の装飾…1938/7月

漢口作戦。機雷を防ぐため水中に防雷具を投げ込む作業(上)は不許可。
湖口に桟橋を架橋中の陸戦隊の写真は許可になった…1938/7/15

「炎天下、裸で活躍中の○○高射砲隊」、
測高機班の写真（下2枚）は不許可…1938/7月

「○○における○○高射砲隊炎天下の奮戦」。
対空監視哨の写真(下)は不許可…1938年

上海の日除け風景2枚、ガーデンブリッジの歩哨舎と工部局巡捕。
海軍支那方面艦隊の九江攻略作戦、「勇躍上陸に向かう(上海特別)陸戦隊・土師部隊」(下)は上陸用舟艇が写っているため不許可…1938/7月

九江攻略作戦。九江飛行場付近で戦闘中の陸戦隊の写真(上)は許可。
鉄条網に悩まされながら上陸を敢行する海軍特別陸戦隊の写真(下2枚)は上陸用舟艇を除去すれば「使用差支なし」…1938/7月下旬

九江に上陸する特別陸戦隊(中)の写真は斜線の上陸用舟艇を削除すれば使用可。
九江を進撃する陸戦隊(上、下)…九江1938/7月下旬

九江攻略作戦。鉄条網を突破して九江市内へ突入する陸戦隊の写真(上)と九江を目指す高橋部隊の写真(中)は初めは不許可だったが上陸用舟艇を消して許可となった…1938/7月

7月23日盧山を背景に殷家湖庄に上陸、九江へ向け前進する波田部隊＝中支那派遣軍波田支隊(台湾守備隊で編成)。
真ん中の波田支隊の写真は不許可になった。なお波田支隊は7月26日九江を占領した…1938/7月

漢口作戦。「海の荒鷲」爆撃機。基地で出撃準備の写真（上）と爆弾を装備中の写真（中）は不許可になった。
下は漢口を目指し飛び立つ爆撃機。掲載許可となっているが、「プロペラ3本は不可　回すこと」と修整指示されている…1938/8月

漢口作戦。中支那派遣軍第6師団は8月1日、黄梅を占領した。写真上の、実戦を語る4部隊長は「保留、各部隊長が聯隊長以下なれば可なり」とされ、検閲済印が押されている。なお佐野は歩兵第23連隊長、増田は工兵第6連隊長。次の稲葉部隊長＝第6師団長の黄梅入城写真は不許可になった。下は長江（揚子江）北岸の洪水と安徽、湖北の国境を越える長谷川部隊の写真…1938/8月

写真上の太湖沿岸に上陸する部隊は不許可。
下の丹河橋を進軍する遠山部隊と、肩をもみ合う遠山部隊の写真は場所を特定しないよう指示された…1938/8月

漢口作戦。武漢三鎮を目指して進む揚子江海軍部隊。上の写真は砲台をぼかすよう指示された。
下の「南北両岸の敵重砲陣地猛撃」の写真は不許可になった…1938/8月

漢口作戦。上は武漢三鎮へ進む「揚子江海軍部隊南北両岸の敵陣地を猛撃」、下は空中を警戒する写真。
いずれも不許可になった…1938/8月

漢口作戦。写真上の「武漢三鎮猛進撃中の海軍部隊」は不許可になった。中の「長江を圧する海軍旗下に空軍の活躍中」の写真は奥の船をぼかすようにと指示された。
下は「瑞昌一番乗り」の吉松秀孝部隊長とその幹部。中支那派遣軍は8月24日、瑞昌を占領…1938/8月

漢口作戦。上は武穴、嗎頭鎮を砲撃する日本海軍。中右は陸戦隊土師部隊＝呉第5特別陸戦隊の「焼芋戦術」。
下は砲弾がはっきりと写っているため、海軍省軍事普及部へ没収され不許可になった…1938/9月

漢口作戦。中支那派遣軍第6師団は9月6日広済を占領。上は広済で捕獲した中国軍兵器。中2枚は占領後の富金山で喜ぶ倉亦部隊将兵の写真。
下2枚の富金山中で発見された三谷中佐の遺体を焼き、墓碑を建て弔う将兵の写真はいずれも不許可になったが、後に撤回された…1938/9月

漢口作戦。「望大鏡」をのぞく第27師団本間師団長、原田参謀長の写真はいずれも不許可になった。
下は戦い終わり道路でひと休みする将兵(右)と大阪版用の「清水美治君の墓」の写真…1938/9月

漢口作戦。上は音羽陸戦隊長。下3枚は蘄春に上陸、進軍する海軍土師部隊＝呉第5特別陸戦隊。
上陸舟艇の写ったものは不許可になった…1938/10月

漢口作戦。上は京漢線信陽西方南陽城への爆撃。
下2枚の爆撃機と機内が写った原田部隊の爆撃写真は不許可になった…1938/10月

漢口作戦。上の原田部隊「荒鷲」の爆撃機の写真は不許可となった。
下は若山機の爆弾投下…1938/10/19

漢口作戦。原田部隊「荒鷲」爆撃、伏牛山を西へ進む(中)。爆撃機の写っている写真は不許可。
下の原田部隊長の訓示は掲載許可となった…1938/10月

漢口作戦。上の黄石港突入の海軍阿部挺身○○部隊長と中右下の決死爆破隊の集合写真は船上のプロペラを消すように指示された。
下は煙幕を張って進撃する江上艦隊…1938/10月

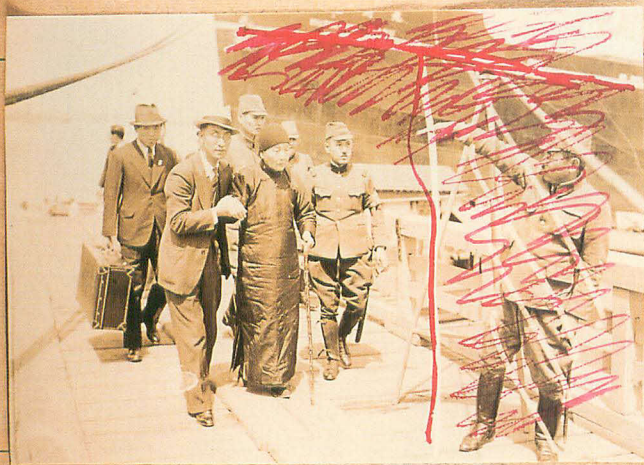
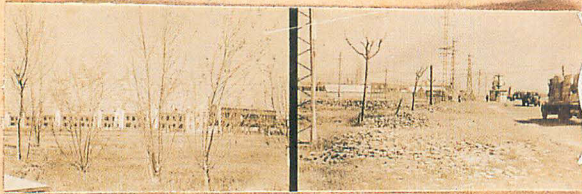
日本軍中支那派遣軍は10月26日、漢口を占領。上は、漢口で慰問隊による演奏会、続木部隊＝呉第4特別陸戦隊(上)と東久邇宮＝中支那派遣軍第2軍司令官記者会見(中)。
下の上海特別陸戦隊凱旋の写真は不許可になった…1938/12月

1939年6月17日、漢口から上海へ向かった海軍軍用連絡機が墜落。陸軍田路少将＝中支那派遣軍第15師団歩兵団長、藤井中佐らが死亡した。
捜索隊が発見した墜落現場。写真はすべて不許可になった…1939/7月

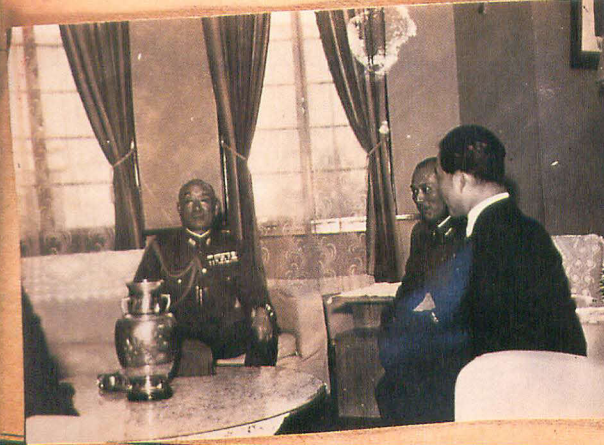
湖南戦線。上2枚は洞庭湖東岸の岳州、火中を進む大橋部隊、安念自動車部隊と稲葉高射砲隊の野球戦での安念自動車隊応援団（13日）。
上から3枚目の上陸艇が写っている「○○地点に上陸する陸戦隊」の写真は不許可になった（12日）。陸海軍共同作戦を練る大橋部隊（海）と山中部隊（陸）。洞庭湖で洗濯する日本兵…1939/9月

鹿角作戦の○○部隊。上左と中右は水中に飛び込み上陸命令を待つ決死隊、上右は上陸した日本兵、この3枚は上陸艇をぼかして使用するよう指示がある。
中左と下右は出動する○○部隊、下左は敵前上陸のために本艦を離れる上陸艇、この3枚は不許可になった…洞庭湖1939/9月

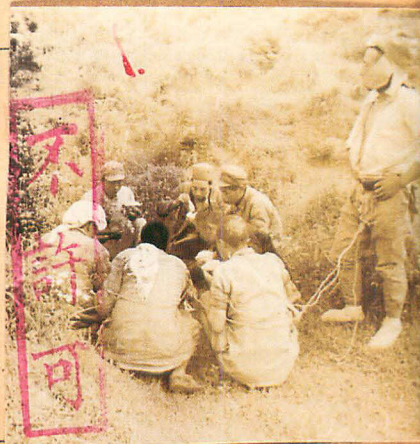
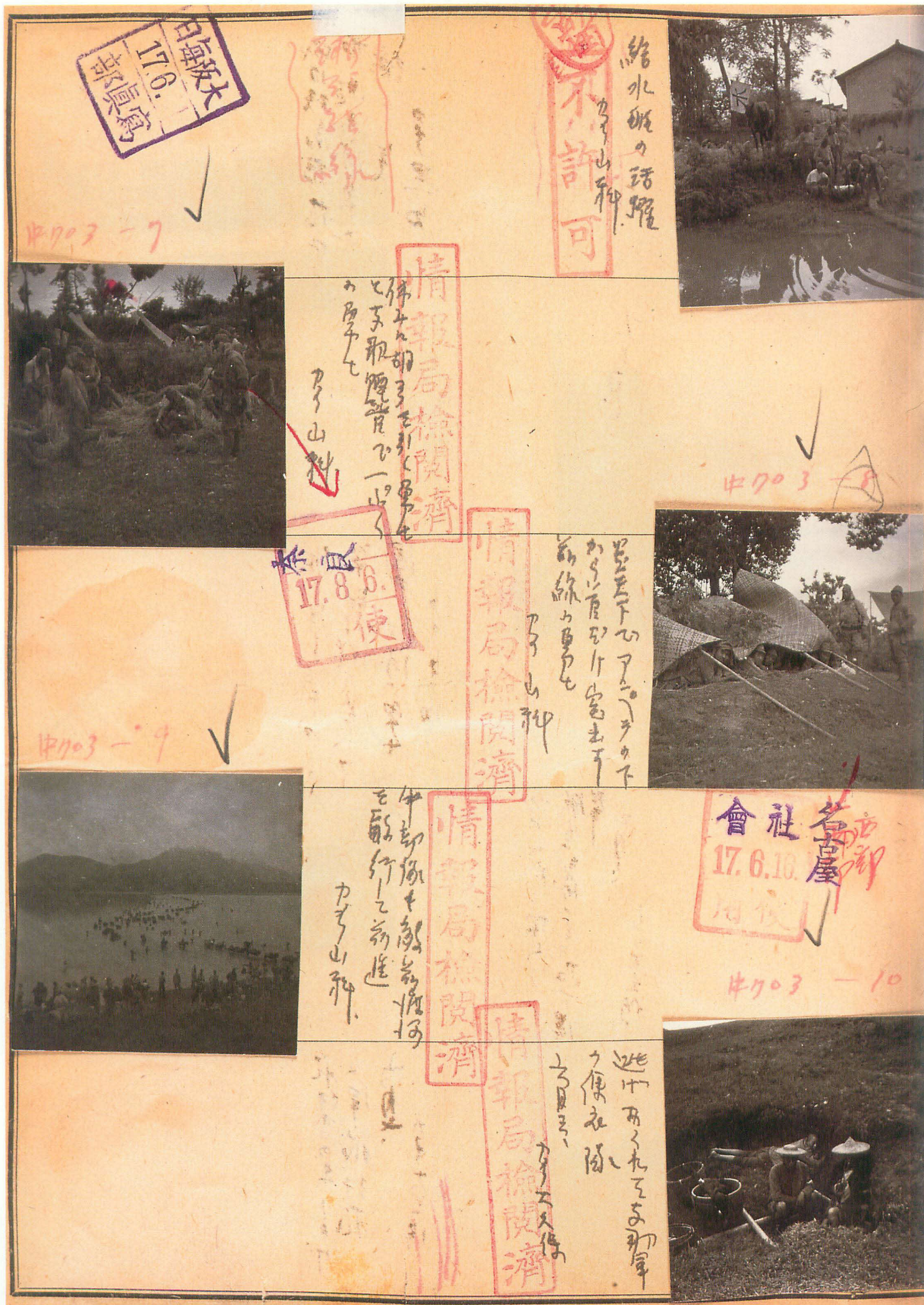
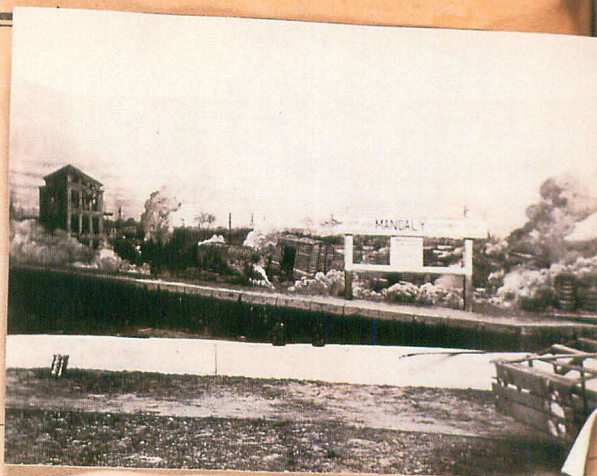
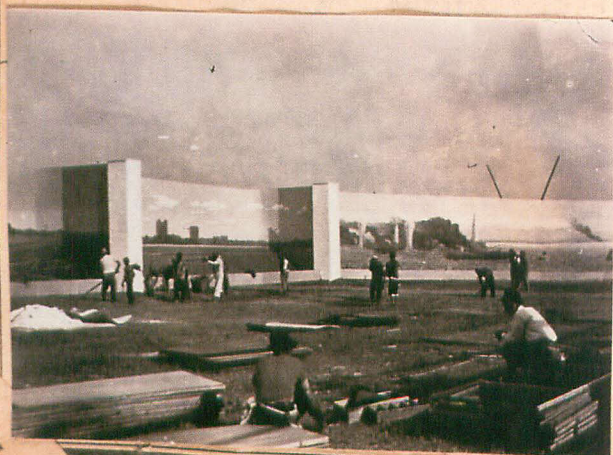
上海へ到着した楝川中将、3枚とも保留になった。

「保留」は日時が経過し機密でなくなったら発表してもよいもの…1939/9/26

南京城の上空。上は四重の城壁が見える水西門。
光華門の写真は遠方に飛行場が写っているので不許可になった…1939/10/31

国民党で蒋介石と対立していた汪兆銘は日本軍の画策にのって、1940年3月に日本軍占領下の南京で「国民政府」を樹立、主席に就任した。汪兆銘に関係する報道は厳しく検閲された。
上から汪之嬰(息子)と会う汪兆銘の姉の汪兆娥。中と下は南京桟橋に着いた汪兆娥、中は右端の軍人を消す、下は背景の船を消す指示がある…1940/4/14

上は閑院宮の載家山視察、「御帰還の日迄紙上掲載禁止」の赤字がある(17日)。
下4枚は上海市政府を中心とした土木建設工事…1940/4月

浙江省西部の富春江を渡河する日本軍。
上陸艇が写っているので1枚を除き不許可になった…1940/10/13

大陸視察に訪れた新任の杉山参謀総長。上2枚は飛行場で西尾支那派遣軍総司令官に迎えられたところ。3枚目は陸軍病院での傷兵慰問。下は汪兆銘南京政府主席を訪れたところ。すべて保留となっている…南京1940/10月

「江西戦線　火焔放射器を発煙して敵陣に迫る」部隊。
不許可理由は火焔放射器が写っているため…1941/4月

最上段「上海に回送されてきたウェーキ（ウェーク）島米俘虜」、191ページ参照。2段目「西洋将棋を楽しむ上海の米俘虜兵」。
3段目右「読書にしたしむ」俘虜など、米俘虜の写真はすべて不許可とされている…上海1942/1月

浙東、浙北戦線。上から順に、「敵陣をめがけて猛射をあびせる」部隊。「弾雨下難路を切り開く工兵隊」。「愛馬に水を与える勇士」。「軍旗を守る歩哨」。
下の「情ある我軍より食事を支給されて大喜びの俘虜」は不許可。下の徳島、島根、鳥取は写真を使用した地方版…1942/5月

上は「給水班の活躍」、戦場での濾過・給水等の写真はすべて不許可だった。以下「休みに胡弓を引く勇士と支那煙管で一ぷくの勇士」。
「炎天下でアンペラ(むしろの称)の下から首だけ突出す前線の勇士」など。名古屋社会は、毎日新聞中部の社会部での写真使用を示す…1942/6月

大東亜博覧会で展示された絵。上から順に、マンダレー戦、真珠湾で撃沈されたアリゾナ、真珠湾攻撃が描かれている。
いちばん下は、展示の模様。すべて（検閲）「手続不用」の印が押されている…南京1942/10月

毎日新聞
18.6.19
大阪寫眞部

中ク21－2

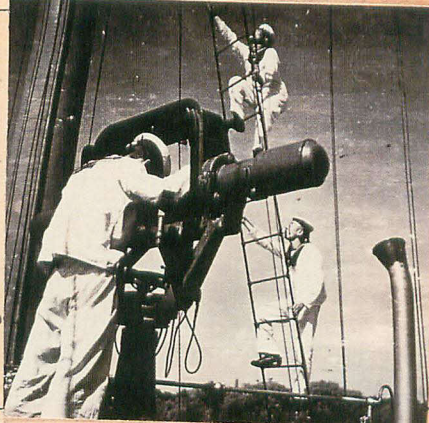
保留

中ク21－3

さくら
19.4.1

中ク21－4

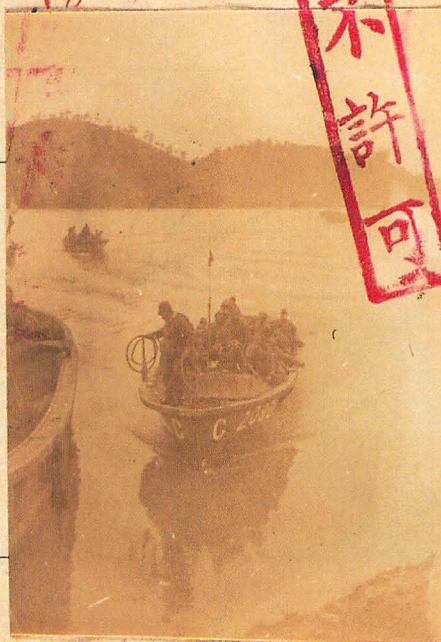
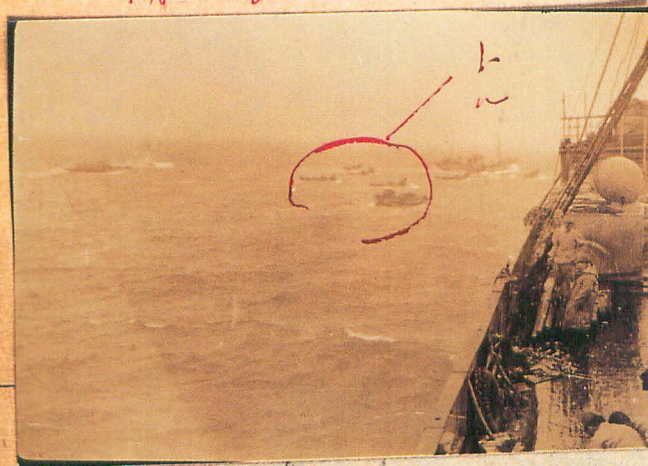
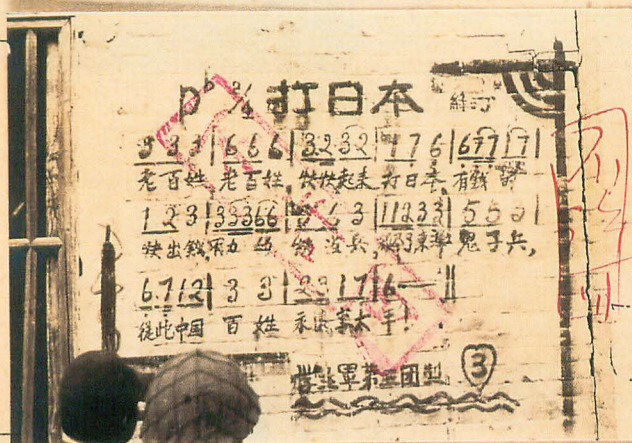
さくら
19.4.1

中ク21－5

すべて「中国海軍」(支那派遣艦隊)の写真。上から、「キーをたたく電信兵」。「長江を護る中国海軍」。「測距儀と取組み猛訓練」。「連絡に活躍する信号兵」。そして「陸戦隊」の写真。左上には「注意発表後使用」のただし書き…1943/6月

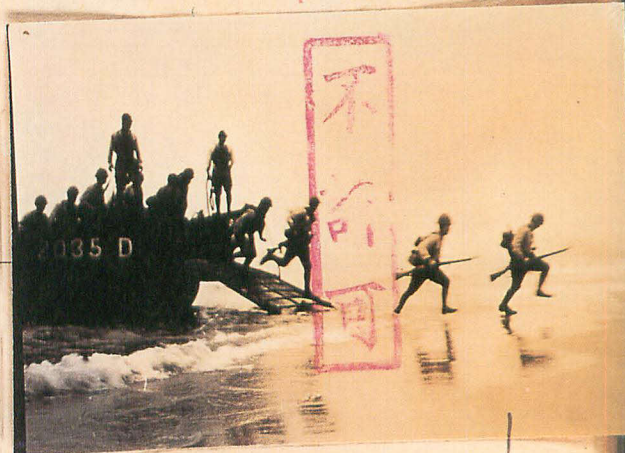
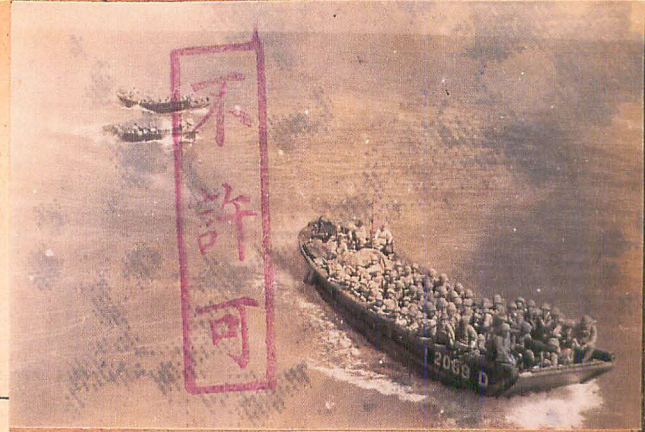
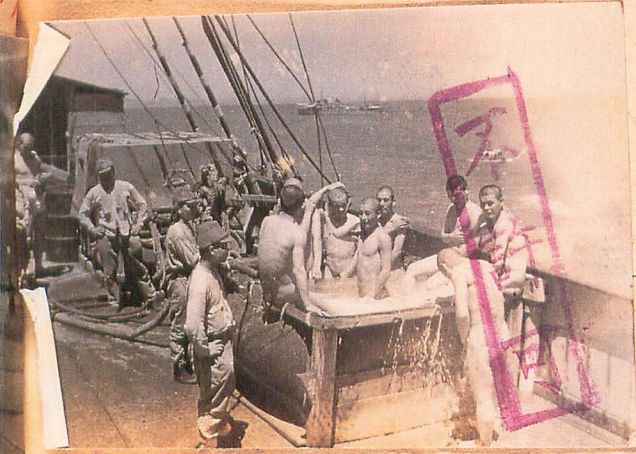
1939年 華南

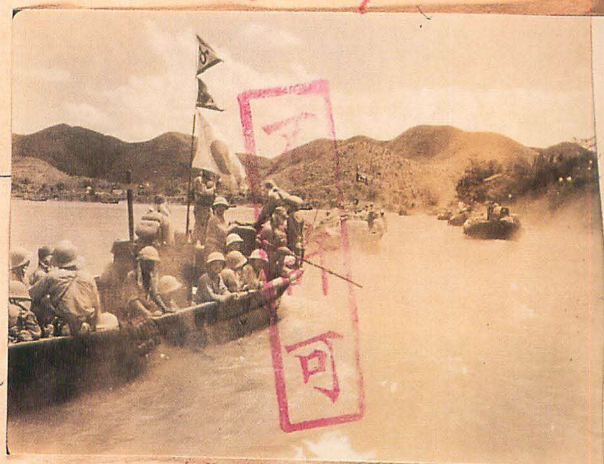
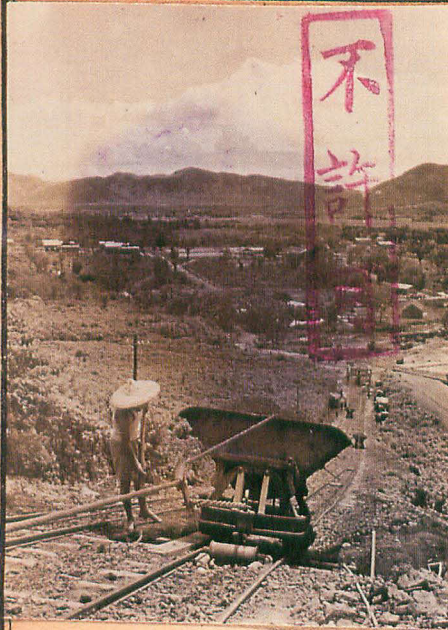
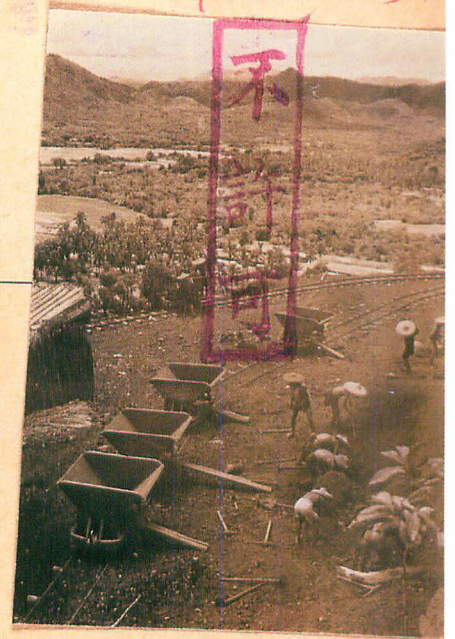
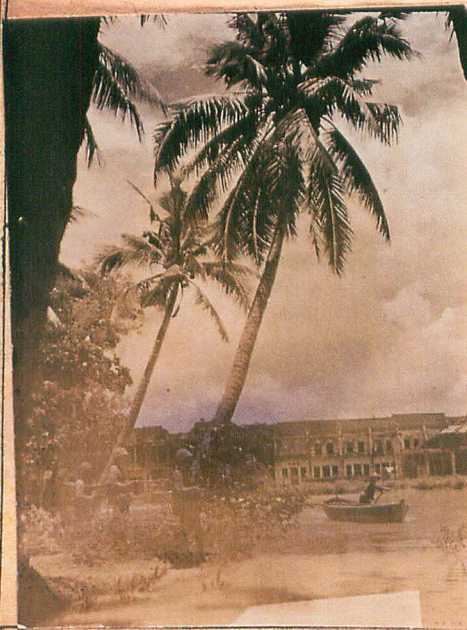
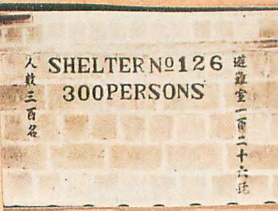
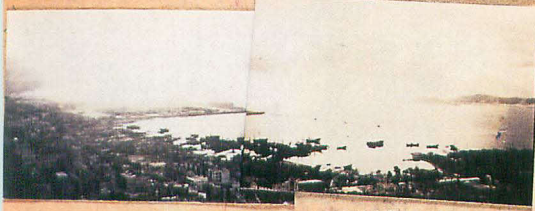
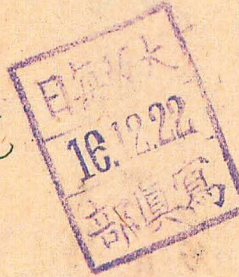
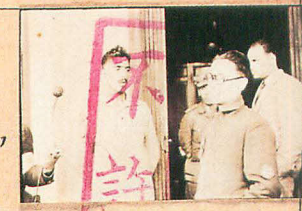
フランス領インドシナ＝仏印から中国への物資補給路「援蒋ルート」遮断のため、1939年10月14日大本営は南寧の攻略作戦の実施を命令した。
上は、南寧に至る欽寧公路の出発点、欽州へ11月17日入城の写真。下3枚は、欽州湾への上陸船団で不許可…1939/11月

欽州湾に上陸する部隊。上陸用舟艇はすべて掲載禁止のため、上2枚は不許可。
下は上陸用舟艇の部分を「トル」よう指示されている…1939/11月

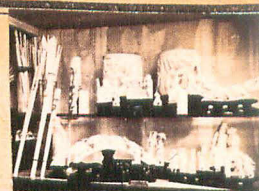
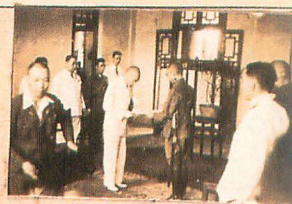
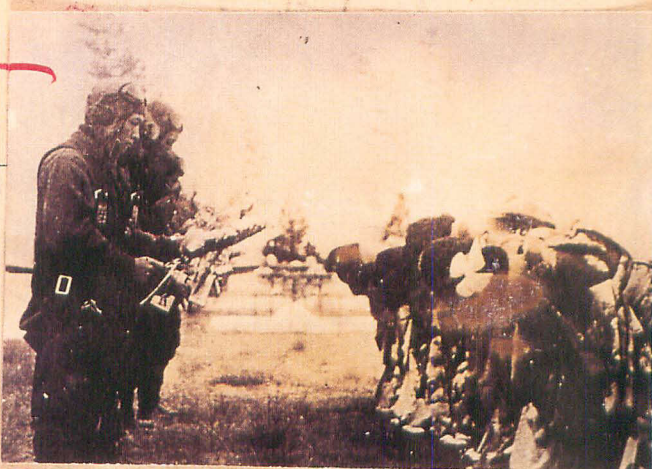
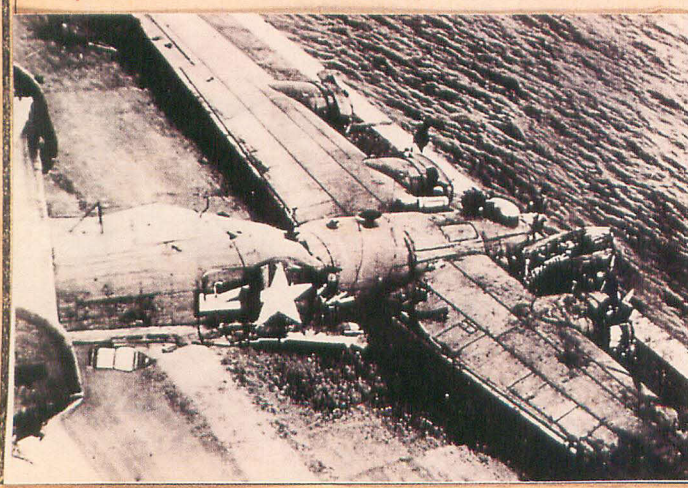
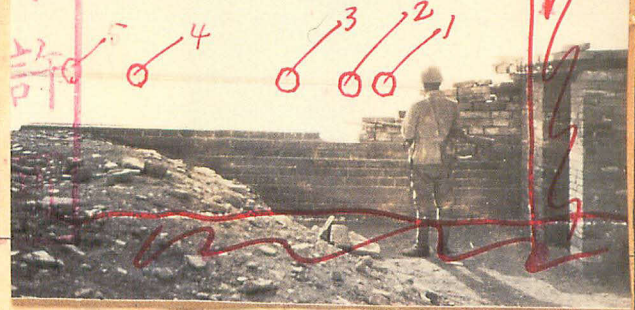
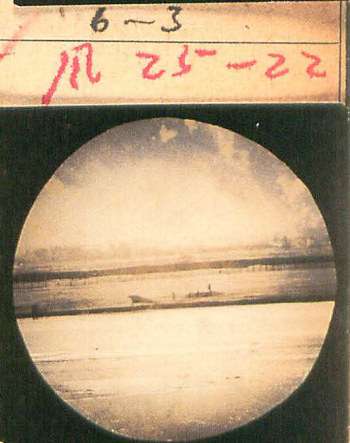
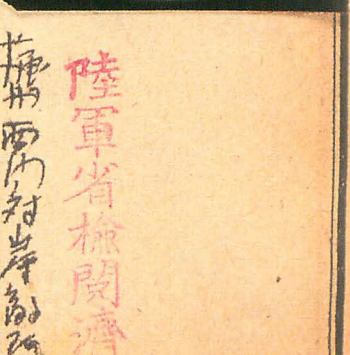
海南島から南寧作戦援護に向かう海軍「九六式陸攻」。
左下には「飛行機　無線　座席　記号　爆弾等　全部消すこと」と注意書きがある。本当に消すとただの雲の写真になるため結局不許可…1939/11月

不許可となっている左2枚は抗日の壁画で、「娘子軍の活躍」(上)と「打倒日本歌」の歌詞・楽譜(下)。右上は中国兵捕虜。以上広西省賓陽での写真。
ほかは広東・広西の華南戦線で撮られたもの…1940年

1941年 華南

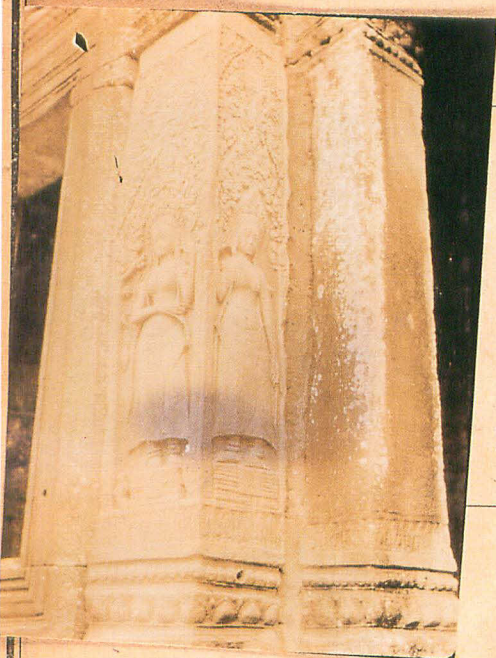
日本軍南支那派遣軍は、華南沿岸から荷揚げされる「援蒋物資」を断つため、主要港・主要都市の攻撃作戦を行った。写真は同作戦で攻撃対象となった広東省海豊。右上「海豊県政府に堂々入城」。上から2・3枚目「海豊に進撃する草木部隊の鉄舟隊」(保留印)。4枚目「占領した海豊県政府」。右下「支那軍の抗日宣伝の絵」…1941/3月

華南の主要港封鎖作戦で攻撃された広東省汕尾。上から3、4枚目「紅海湾奇襲　敵前上陸」は不許可。
上の後宮南支軍司令官＝南支那派遣軍司令官、2枚目の小林部隊長＝近衛師団小林支隊長は、判定要領の改正によりともに○○部隊長に修正のうえ掲載可に…1941/3月

恵州攻略戦。華南沿岸諸都市を占領された中国軍は、恵州で、香港から内陸の韶州に至る香韶路奪回を企図。南支那派遣軍は5月10日、恵州攻略戦を開始した。
上と3枚目は紅海湾に上陸する榊部隊、上は不許可。2枚目「敵前上陸前にデッキで水浴して身を清める」。下の上陸部隊の船団の写真に不許可印…1941/5月

惠州攻略作戦は陸海3方向から展開された。このページは、東江を遡って惠州に上陸した土居部隊の写真。
すべて不許可…1941/5/12

1939年2月、日本軍は海南島を占領。全島にわたる地下資源調査の結果、田独、石碌で鉄鉱山を発見、開発に着手した。
上の不許可となった2枚は田独鉱山の写真で、左上は「鉄鉱石をロープで下へ降す」様子。下は海南島東部の都市「文昌の警備」…海南島1941/6月

12月8日、日本政府は米英に宣戦布告。これより前12月8日未明、香港攻略作戦を開始、25日には全島を占領した。不許可となったのは、右側上から2、3枚目の「軍旗に捧げ銃」と「印度人捕虜記者団と会見」、左側上から4枚目「鉄舟を積んで……」。その他、右4枚目には「紐を消す」、右下には「字を消す」の指示あり…香港1941/12月

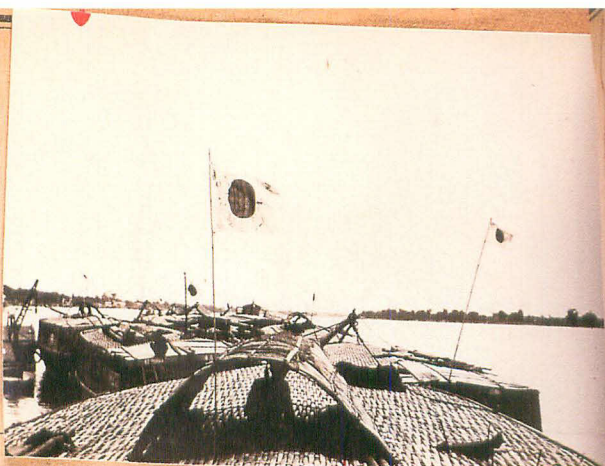
1943年 華南

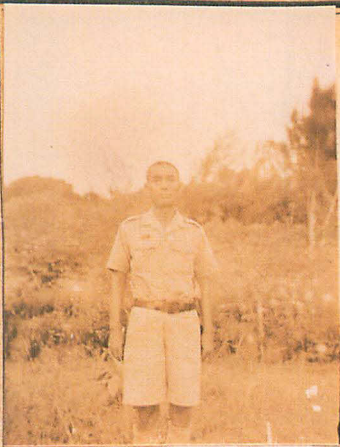
右上は広東居留民団による「年頭健歩会」。左上は中山記念堂前広場で行われた「新年祝賀会」。左2枚目は「広東神社」での初詣で。以上、1943年正月の風景。
その他は前年12月撮影された、「敏存職業学校生徒」の「生花」「弓」「お作法」の授業風景。すべてが手続不用扱い…広東

右上の「手続不用」は、「広東の手工業　見事な象牙製品の陳列場」。
中3枚「新鋭隼号」と「隼号乗組員」の写真には、「要修整」と朱書きがある…1943年

右上は1943年10月に行われた「広東厚生五周年祝賀会」。中2枚は「全南支居留民の陸海軍へ輝く翼の献納式」と「荒鷲に花輪を捧げる乙女達」。
下は香港で撮られた「在支米空軍24型爆撃機の残骸」…1943/10月

1943年 山西省

下5枚の写真はミヤニ式望遠写真機が捕らえた蒲州から見た黄河対岸の中国軍陣地。煙幕を展開演習する中国軍(上から2段目右)、陣地視察する中国軍将校(上から3段目左)などが捕らえられている。いちばん上の写真の洋数字は、ミヤニ式望遠写真機が狙った対岸の目標地点で下の写真に対応しているが、これは不許可となった。
ミヤニ式望遠写真機は1940年、毎日新聞社が京大の宮沢堂教授と西村製作所に依頼、開発した当時日本一の性能の望遠カメラ…山西省蒲州1943年

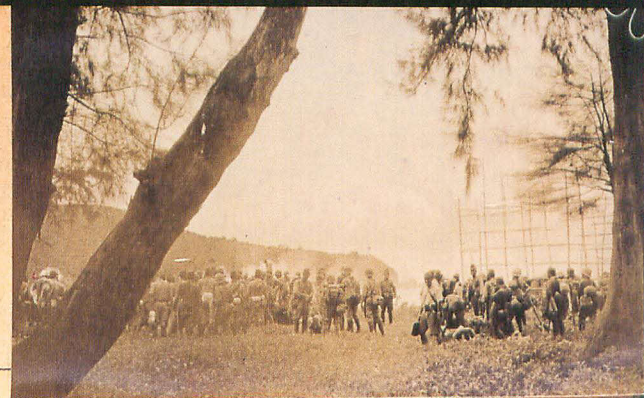
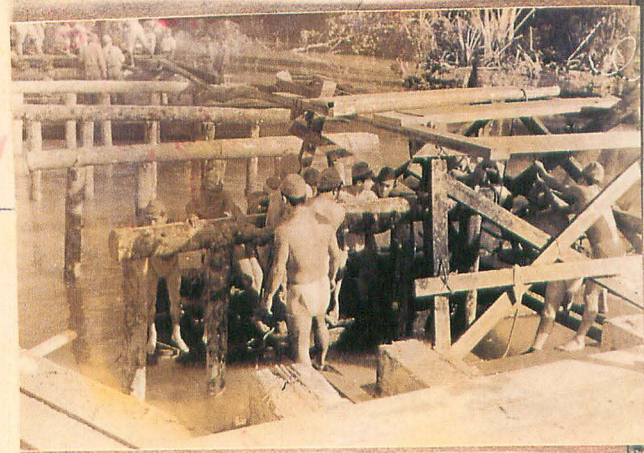
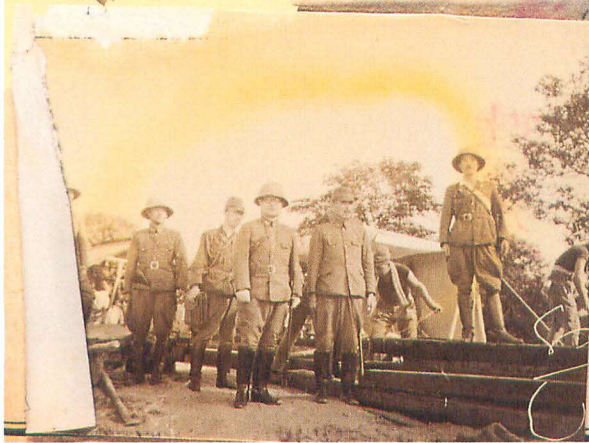
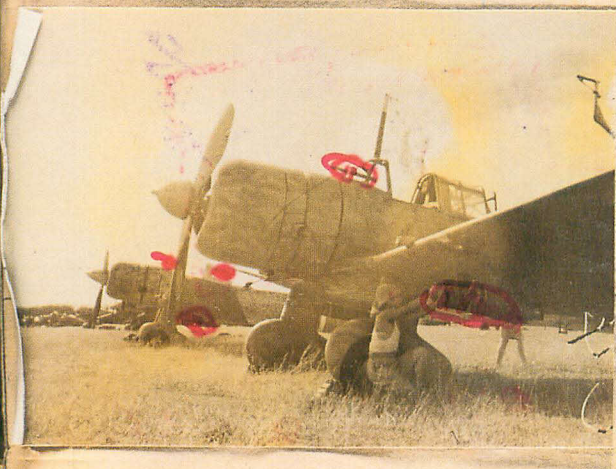
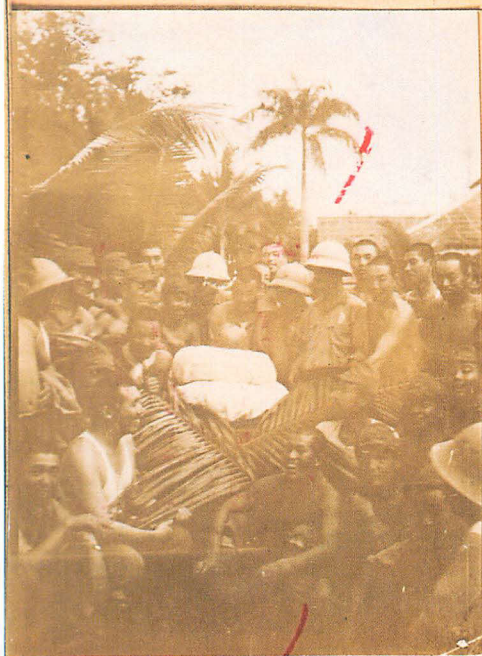
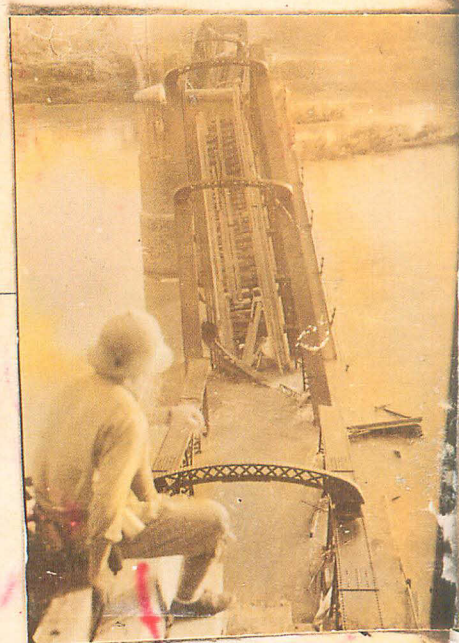
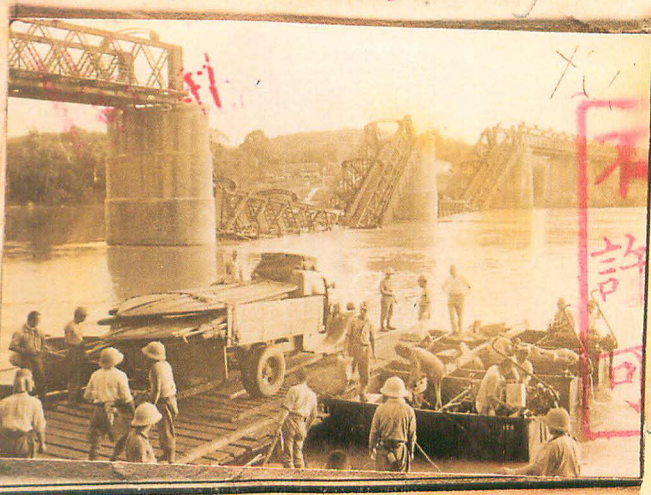
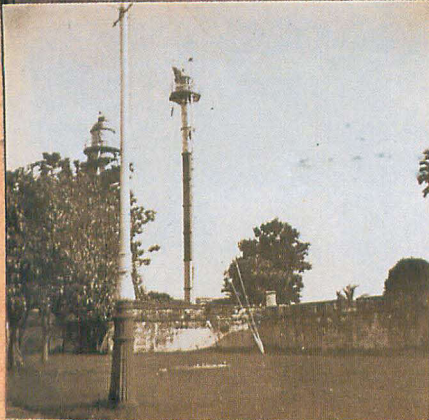
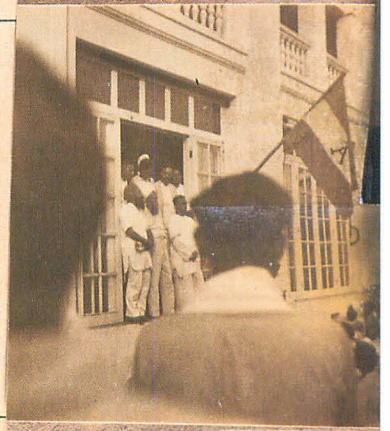
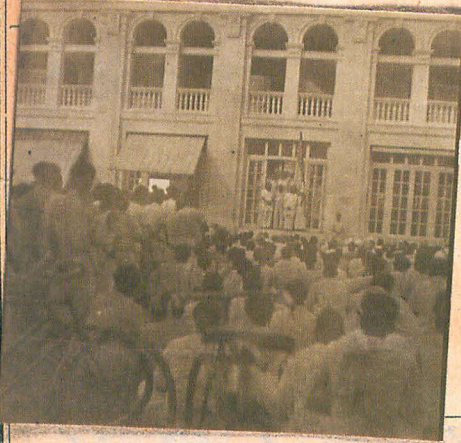
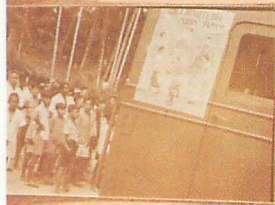
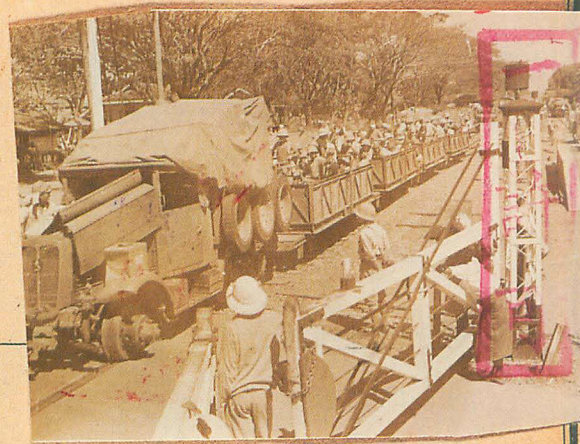
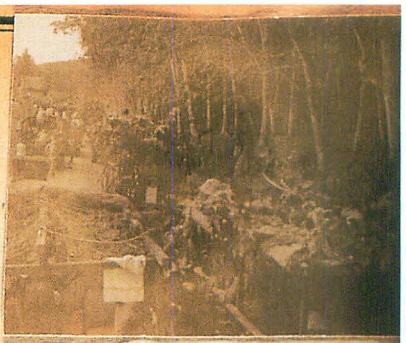
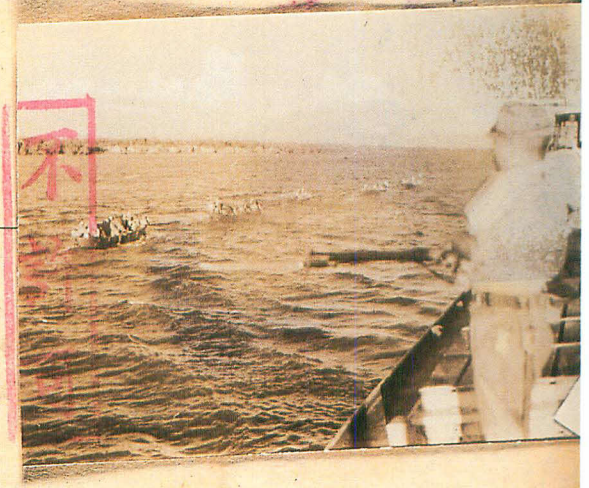
太平洋戦争 仏印＝仏領インドシナ(現ベトナム、ラオス、カンボジア)

アンコールワットの遺跡
…カンボジア1941年

日本軍は1941年7月28日、親独の仏ビシー政府の承認を得て、マレー、フィリピン侵攻の基地として南部仏印＝フランス領インドシナ南部（現ベトナム、カンボジア）に進駐を開始した。
カムラン湾の水上飛行基地。飛行機と山を消すように指示されていてる…カムラン湾1941/8月

左上はサイゴン(現ホーチミン)市内に到着した従軍看護婦たち、右上はタイピストとして働く女性が紹介された。
下の写真6枚は平田南遣艦隊司令長官と澄田機関長の姿で、すべて保留となった…サイゴン1941年

上の3枚は「進駐後の部隊訪問　ホテルにあてられた部隊本部　玄関での永沢部隊」で部隊名と地名は伏せられ、すべて保留とされた。
下は部隊の前を通るチクロ(人力車)…プノンペン1941/8月

上の写真はプノンペンの空にはためく日章旗。中の写真は日本軍の戦闘訓練を見るカンボジア人たち。
下の写真はアンコールワットを見学する竹内部隊の兵士たち…カンボジア1941/8月

フランス領インドシナ。空軍基地で整備する長野部隊の兵士たち。上の写真は機銃を消すよう指示された。
エンジン内部が写っている下の写真は不許可になった…1941/9/2

サイゴンで撮られたこのページの人物写真はすべて不許可になった
…1942年

太平洋戦争 英領マレー(現マレーシア)

1941年12月8日、太平洋戦争開戦とともに、日本陸軍南方軍第25軍は、英のアジア政策の拠点シンガポールの占領をめざし、マレー半島北部に侵攻した。上から2枚目の上陸写真は不許可。下の写真「橋の修理を視察する松井部隊長(第25軍第5師団長)」では名前を伏せ肩章を消すよう指示されている…マレー半島1941/12月

マレー戦線。陸軍第3飛行集団は、陸軍のスンゲイパタニ飛行場占領に伴い、逐次移動し12月22日には集団戦闘司令所を同飛行場に移し、シンガポール爆撃の拠点とした。
中の写真2枚は、戦闘爆撃機の「機銃と弾を消す」よう指示されている…スンゲイパタニ1941/12月

マレー戦線。第25軍は12月26日、マレー随一の大河・ペラク川をクアラカンサルおよびブランジャ付近で渡河した。
渡河の写真(下)は不許可となった。クアラカンサルの敵兵を追う部隊の写真(上)は許可…1941/12月

マレー戦線。日本軍は英国から離反させるため、対インド人工作もした。しかしペナンでのインド民族解放集会(上から3、4枚目の写真)は不許可とした。
一方日本軍が猛爆したペナン目抜き通りの写真(下)は掲載許可。なおペナンは、第25軍が12月19日占領した…ペナン

マレー戦線。第25軍はペラク川渡河後イポーへ向かい、12月29日占領した。駄馬部隊の写真(下)は検閲を通ったが、鉄道部隊(下から2枚目の写真)は不許可となった
…イポー1942/1月

マレー戦線。マラッカ海峡を上陸地に向かって進航する輸送船団の写真(下の2枚)は不許可。
クアラルンプールの北、タンジョンマリム北方を進撃する部隊(上の2枚)は修正指示がない…1942/1月

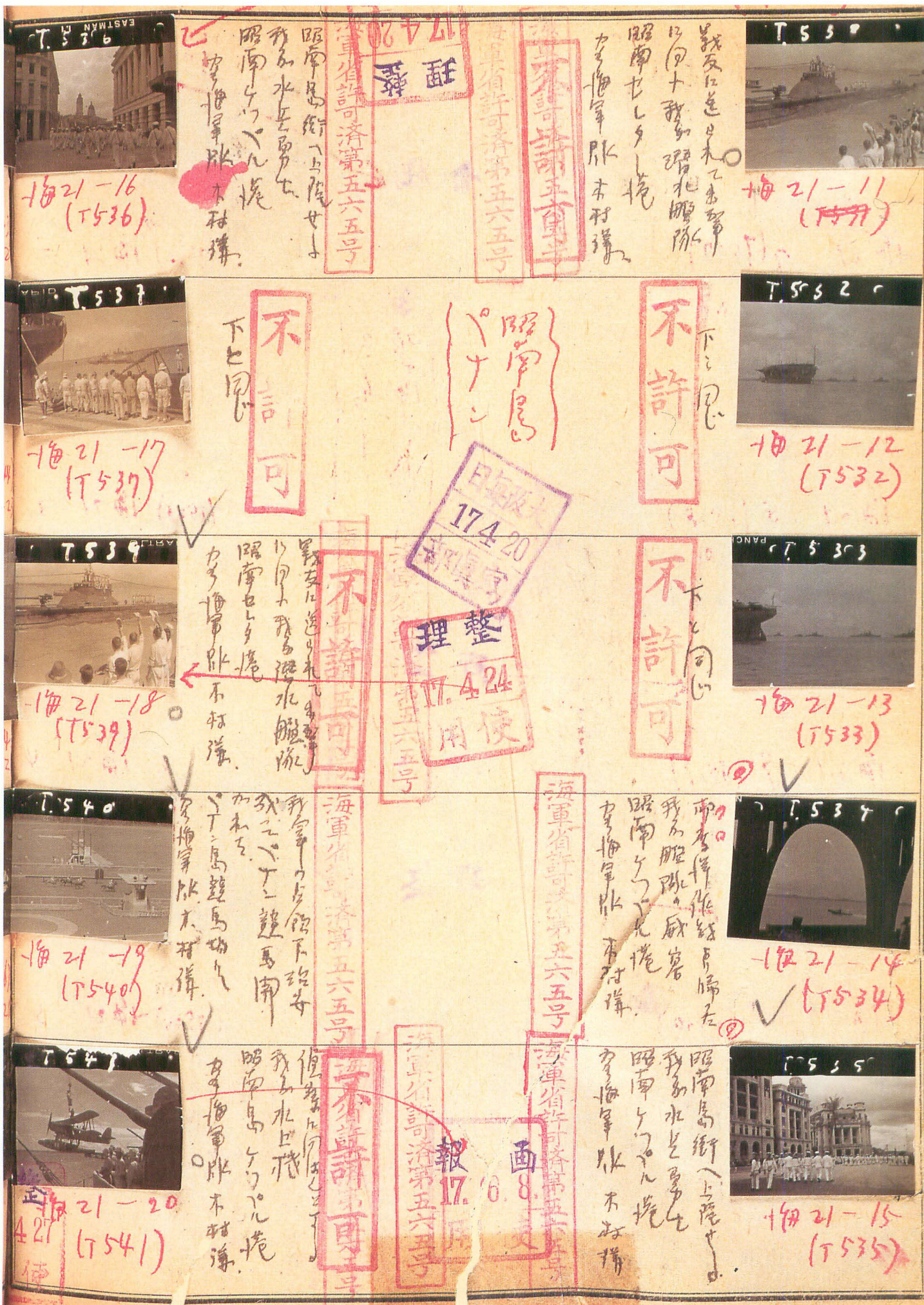
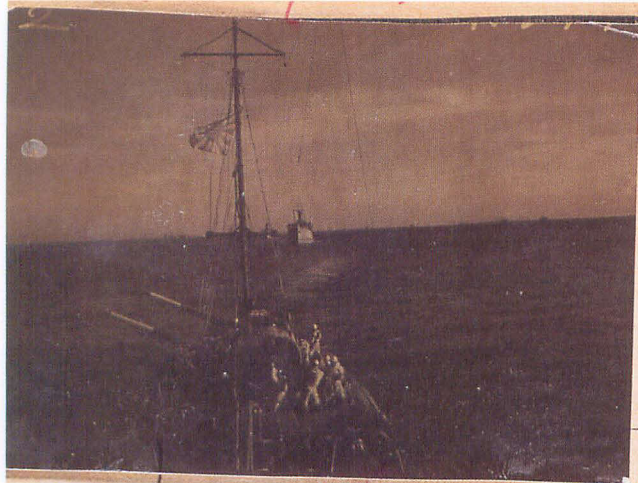
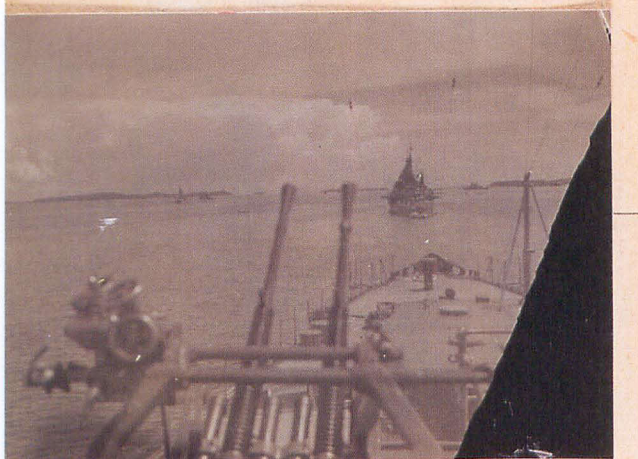
太平洋戦争 シンガポール

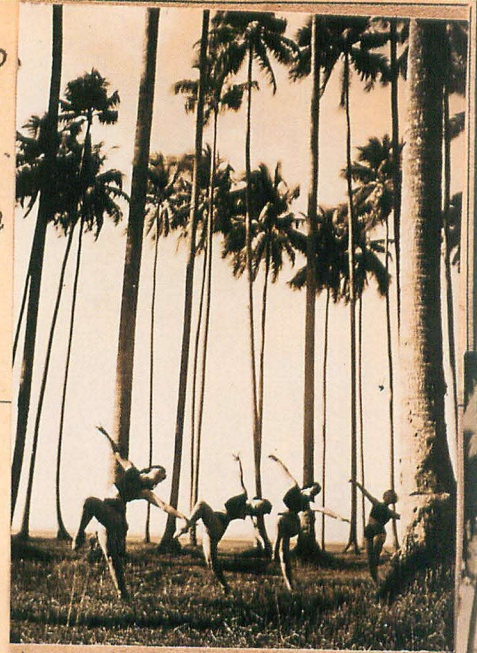
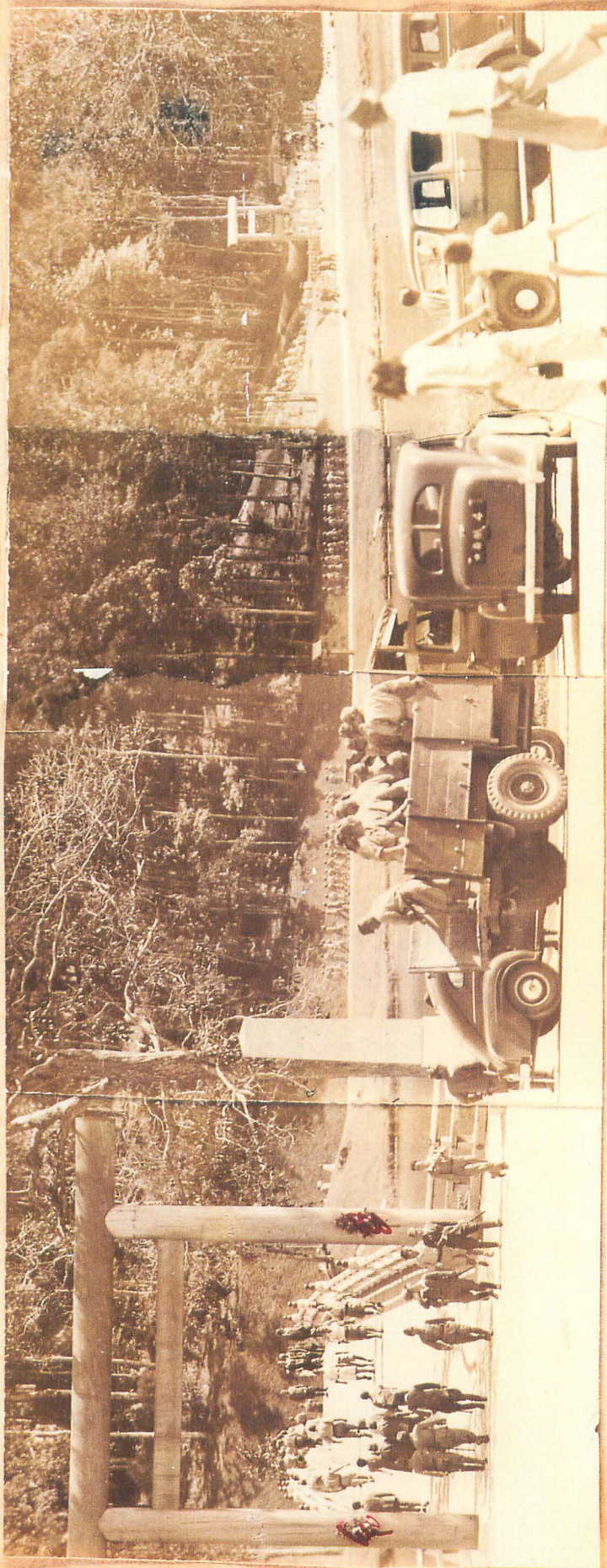
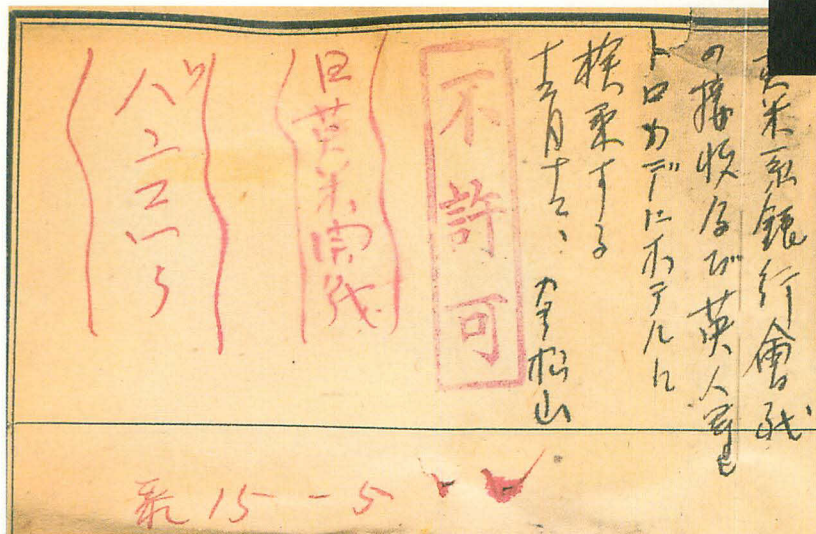
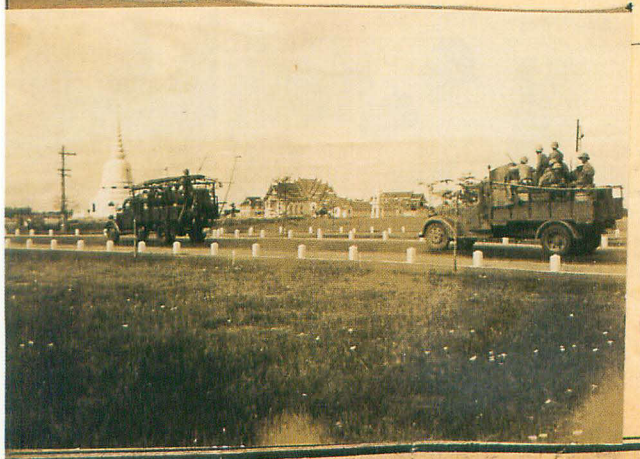
シンガポール攻略戦。日本軍南方軍第25軍は、1942年2月8日、マレー半島とシンガポールを隔てるジョホール水道の渡峡を開始した。
上陸した部隊(上から2枚目)と、上陸後の揚陸作業(下から2枚目)の写真は不許可。シンガポールをめざす兵隊の写真(上、下)は不許可にならなかった…1942/2月

ジョホール水道渡峡。シンガポール島上陸（上）と上陸後の揚陸作業（下から2枚目）の2枚の写真は不許可。
渡峡開始で舟艇に向かう兵隊の写真（上から2枚目）は掲載許可となった…1942/2月

シンガポール攻略戦。「渡峡開始、待ちに待った命令一下勇躍して舟艇に乗り込む」との説明のある写真(上)は不許可だが、「戦車上陸」(上から2、3枚目)と「敵前上陸後の揚陸作業」(下)は「鉄舟を消す」の指示はあるものの掲載は許可…1942/2月

日本軍は、1942年2月15日シンガポールを占領した。「昭南島」と改名し、南方占領行政の拠点とした。写真はサンボ島。
写真説明では、シンガポールの南8kmのガソリン貯蔵庫の島とある。「保留」とされ、発表後使用のことと、注意書きが付いている…1942年

杉山参謀総長のシンガポール視察の写真4枚はすべて「保留」となった。「ジョホールバル軍病院に傷兵を見舞う杉山参謀総長」（上）。2、3枚目は杉山参謀総長を出迎える山下第25軍司令官。ブキテマ高地で杉浦第5師団歩兵第21旅団長から戦況を聞く杉山参謀総長（下）…シンガポール1942/3月

右上3枚と左中2枚はセレター港での日本軍潜水艦隊の出撃。右下と左上はケッペル港から街に上陸する日本海軍の兵士たち。以上シンガポール。
左下から2枚目の写真はマレー・ペナン島の競馬を紹介。初めは不許可、のちに「海軍省許可済」の印で掲載を許可されたものもある…1942/4月

左上はラングーン（現ヤンゴン）、それ以外はシンガポール。右側の写真、ケッペル港での「偵察に向かわんとする我軍水上機」と「無敵艦隊」は不許可になった。
左側は海軍艦隊と輸送船団の写真で、はじめ不許可のちに掲載許可がおりている…1942年

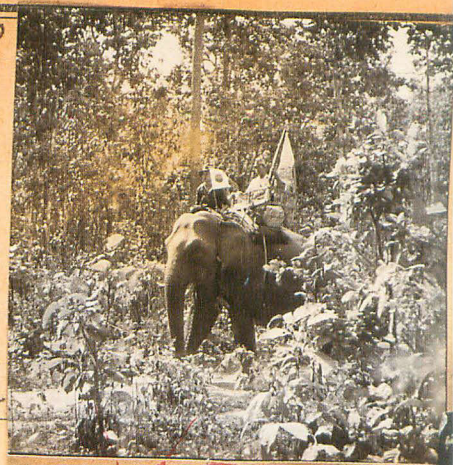
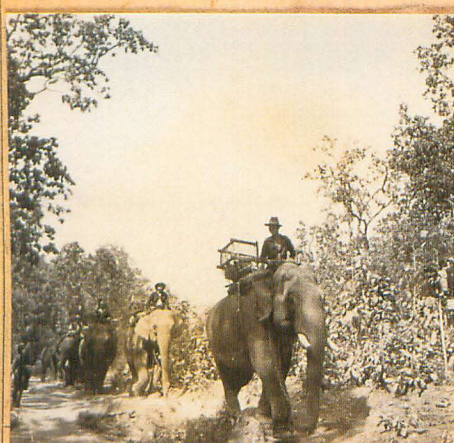
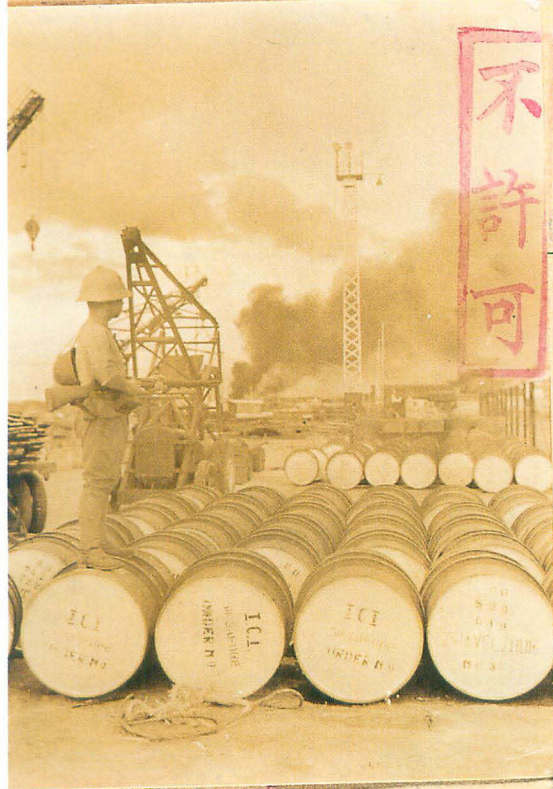
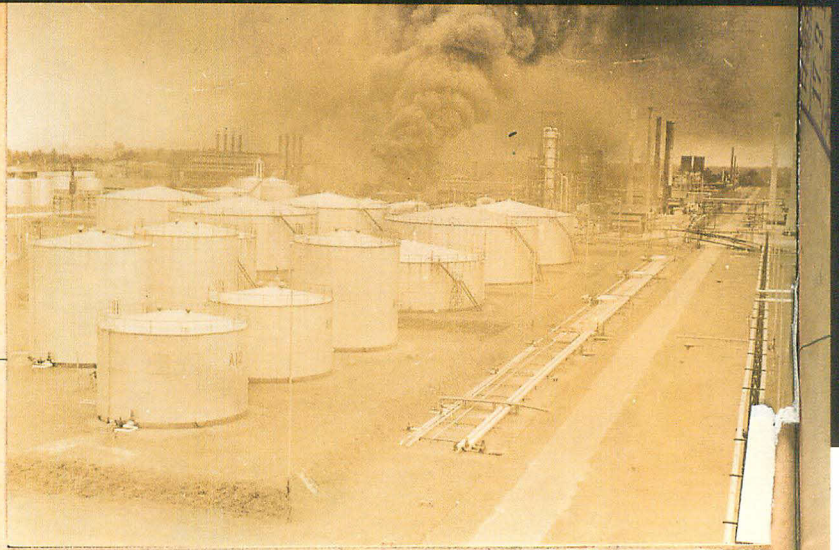
舞踊家の宮操子がシンガポールを訪れ、南方を主題とした創作舞踊を披露したが、1枚を除いて不許可とされた。
理由は“ふともも”があらわにみえるからか。「婦人アジヤ」は当時の雑誌…シンガポール1942/8月

「南方に踊る江口・宮舞踊団」の写真。
写真上は不許可…シンガポール1942/8月

「シンガポール陥落二周年用　昭南神社」との写真説明があるこの写真は「手続不用」。
自由に掲載してよいものとなっているが、鳥居の柱の部分を消すよう指示がある…シンガポール1944/2月

1941年12月8日、太平洋戦争開戦とともに、日本軍はタイ政府の承認のもとにタイに進駐。第15軍近衛師団岩畔(いわくれ)先遣隊は12月9日、バンコク市内に進駐した。ホテルに拘束された英人の写真(上)は不許可。中は英米系の銀行会社接収警備の日本兵士、下は軍用車で移動する岩畔先遣隊が写っている。なお、日本とタイは12月21日攻守同盟に調印…タイ1941/12月

野戦病院。傷病兵を慰問するタイ人看護婦の写真（上と右中）には注意として「着物を着せる」の指示。入院中の戦友に薬を呑ませる兵士の写真（左中）は不許可。
下の2枚は入院の重傷兵に紅茶を呑ませる在タイ日本婦人…バンコク1941/12/15

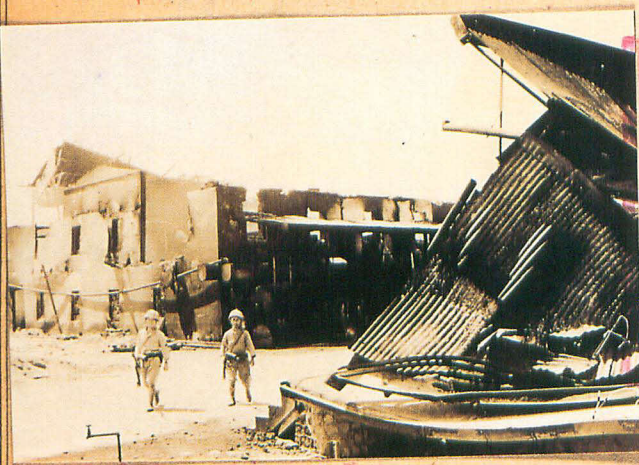
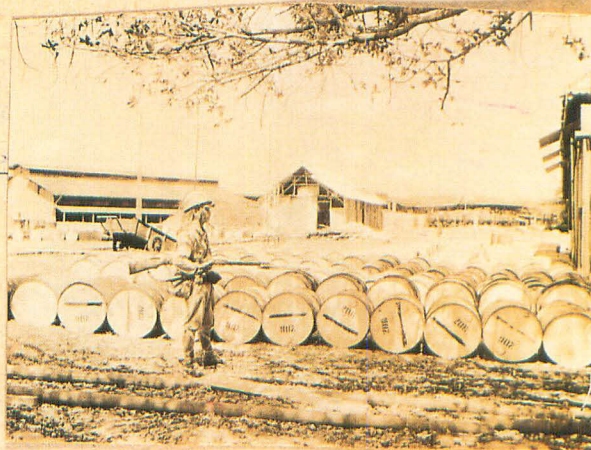
バンコク爆撃。「バンコク停車場支那人街空爆を受け燃えつつある所」の写真説明のある下の写真は不許可。上から2枚目の写真は「空爆されて燃えつつある支那人街」、上から3、4枚目の写真はバンコク市街の爆撃の跡。いちばん上の写真は日本兵を慰問するタイ学生と新年慰問品…バンコク1942/1月

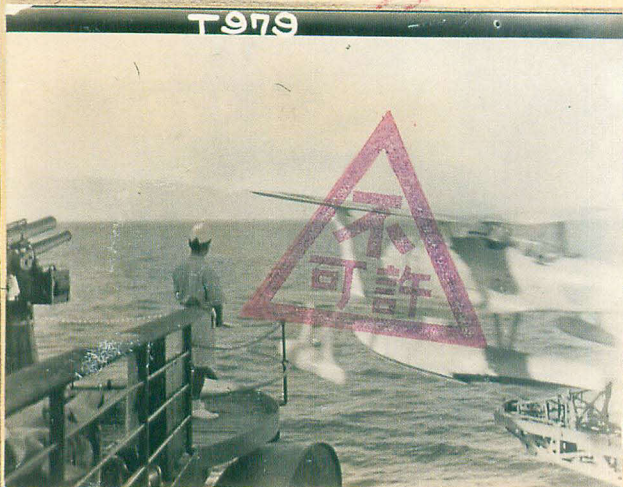
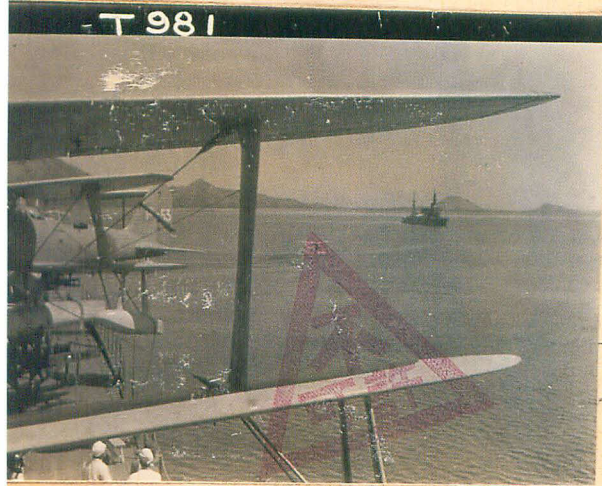
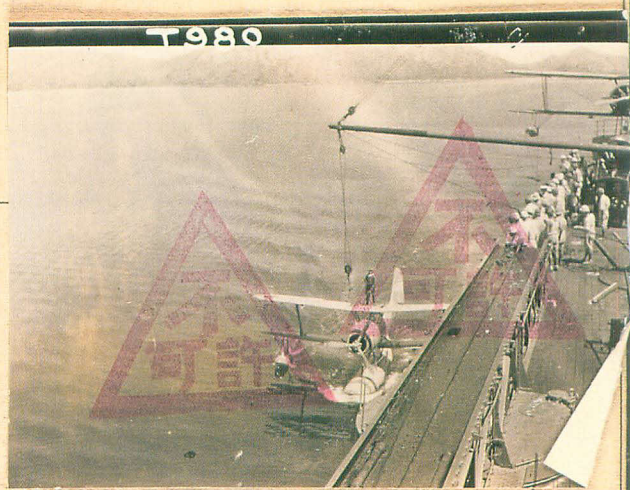
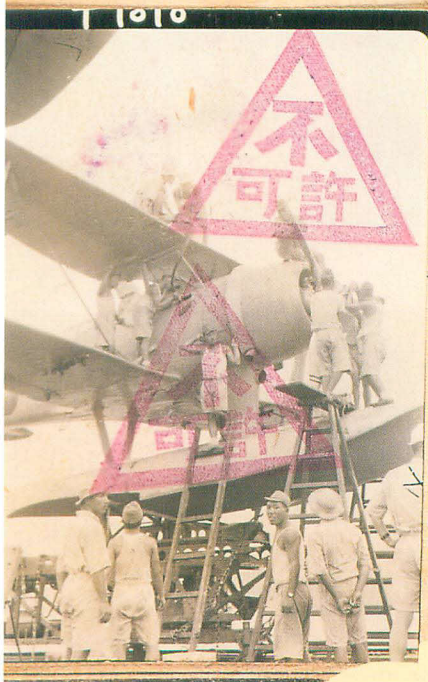
タイの洪水。「山田長政神社に船で参拝する日本人」(上右)、「洪水のため水につかった山田長政神社」(中右)などの写真は不許可となった
…タイ1942年

「船で通行する人々」(上右)などバンコク市の洪水の写真(上3枚)は不許可。
下の5枚は、ガンジー誕生日を祝うバンコクのインド人…バンコク1942/10月

第15軍沖支隊は1月19日、英国支配下のビルマ南部・タボイを占領した。「攻略部隊　沖部隊長と副官」(上から3枚目)と、義勇軍部隊司令部営庭に集まったビルマ独立義勇軍(下)の2枚の写真は不許可。攻略の鹵獲品(上から2枚目)は修正指示はない。ビルマ独立義勇軍は、ビルマの英からの独立を支援するとして日本軍が組織した…タボイ1942/1月

ビルマ戦線。ジャングルを象に乗って進撃する日本軍の写真(上2枚)は許可されたが、「タボイ攻略部隊　タボイ入城式」(上から3枚目)と「ビルマ独立義勇軍に参加したビルマ人のドバマ(万歳)を高唱する義勇軍」(下2枚)は不許可となった…1942/1月

日本軍第15軍は、ビルマの首都ラングーンを3月8日占領した。「給水班の活動　ビルマ人と兵隊さんと一緒に」の写真説明のある写真(上から3枚目)は不許可。
英人商店街を巡視する警兵軍(上から2枚目)や、鉄道隊員(上)、電信隊(下)が修理に活動している写真は不許可にならなかった…ラングーン1942年

太平洋戦争 オランダ領東インド(現インドネシア)

日本軍は、石油を確保するため、オランダ領東インド(現インドネシア)の攻略をめざした。まず南方軍降下部隊が、2月14日スマトラ島南部のパレンバンに降下、飛行場、精油所を攻撃、翌未明には占領した。「B.P.M.の製油所を警備する部隊」(中)は不許可となった。上は「我が軍の占領したB.P.M.製油所」、下は「敵兵舎火災の跡」の写真説明がある…パレンバン1942/3/8

3月1日、日本陸軍南方軍第16軍は蘭印（オランダ領東インド）のジャワ島に上陸。3月9日にはジャワのオランダ軍は降伏した。
上は「架橋作業人夫として賃金引換証を貰う住民」。2枚目以下は破壊された石油工場で、2、4枚目は不許可…スラバヤ1942/3/4

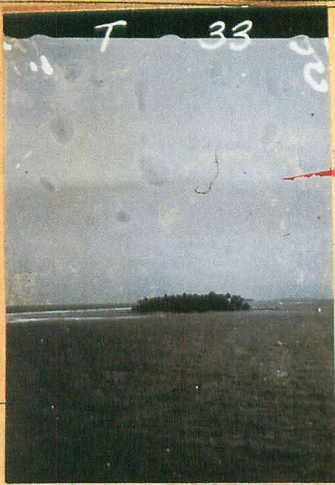
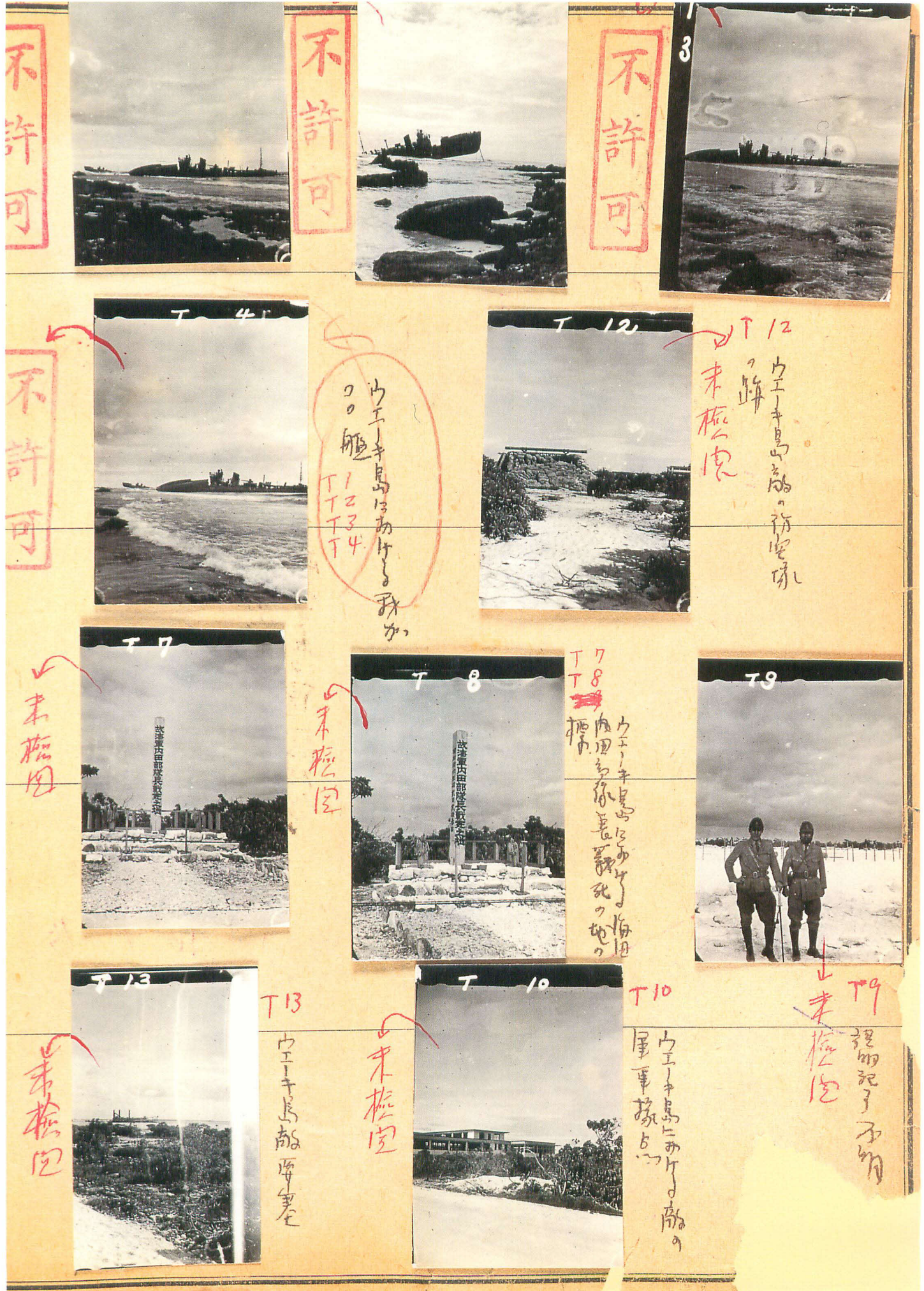
蘭印戦線。上から2枚目「破壊されたチエプト油田工場」を除く、「ドラム缶の山」「破壊された石油工場」が不許可
…スラバヤ1942/3月

蘭印戦線。スンバワ島。日本軍は1942年5月、ジャワ島の東、小スンダ列島のスンバワ島などの各島を占領した。
水上飛行機の艦上でのつり下げ作業から飛行までを写した写真は不許可になった…スンバワ島1942年

蘭印戦線。山陽丸艦上に帰還した水上機とその整備点検の様子を写した写真。
これら4枚すべて不許可になった…スンバワ島1942年

蘭印戦線。ボルネオ島。1942年1月から2月にかけて日本軍が占領。「バリックパパン　中央に精油所」との写真説明のある上の写真は不許可となった。
下の3枚は「ジャングル上空の雲」と「ジャングル地帯」…ボルネオ1942/9月

蘭印戦線。「マカッサルの敵性市民収容所」の写真説明のある上の2枚の写真は不許可となった。マカッサルから30kmほど離れたカンピリに設けられた「連合国一般市民婦女子抑留所」で主としてオランダの軍人と行政官の家族約1500人が、戦争終了まで抑留されていた。下の2枚の写真はマカッサル港の夕陽。マカッサルはセレベス（スラウェシ）島南部の中心都市…セレベス島マカッサル1942/9月

「椰子林に包まれたビジ寺全景」「ビジ寺の珍しい石彫」「バサキ(ベサキ)寺院」「デンパッサル(デンパサール)博物館に並べられた石彫類」などの写真が並ぶ。
うち左側の上3枚と右側4枚目の「石彫」は裸像のためか不許可とされた…バリ島1942/4月

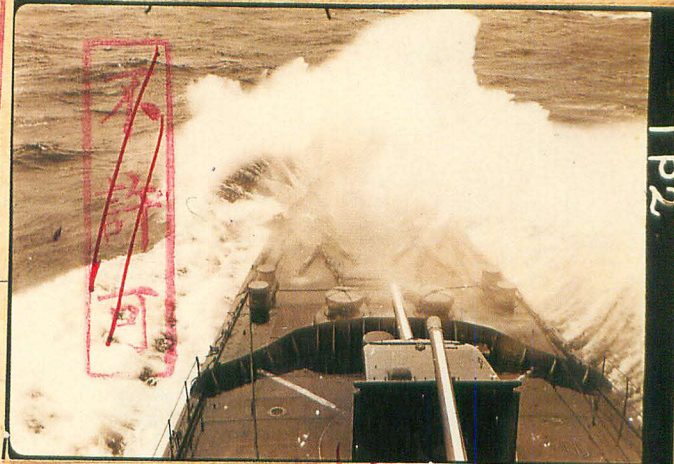
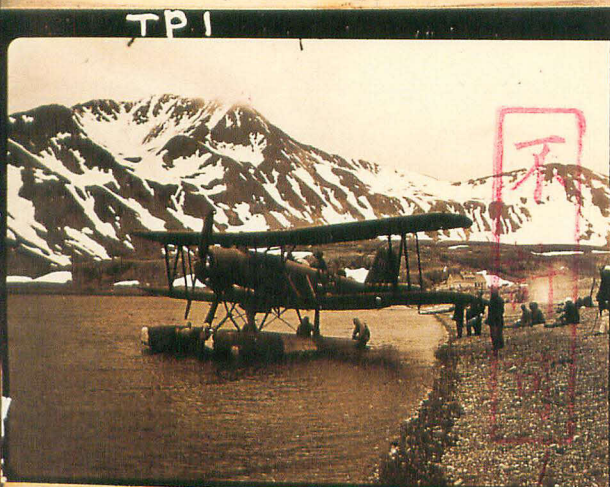
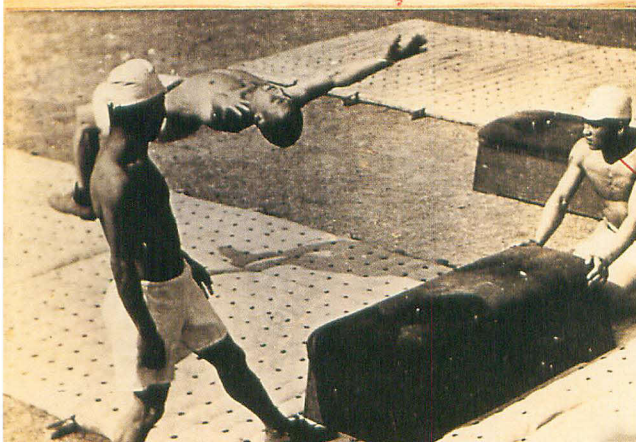
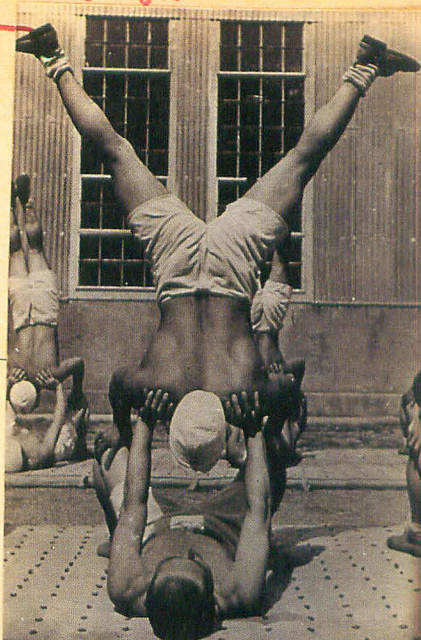
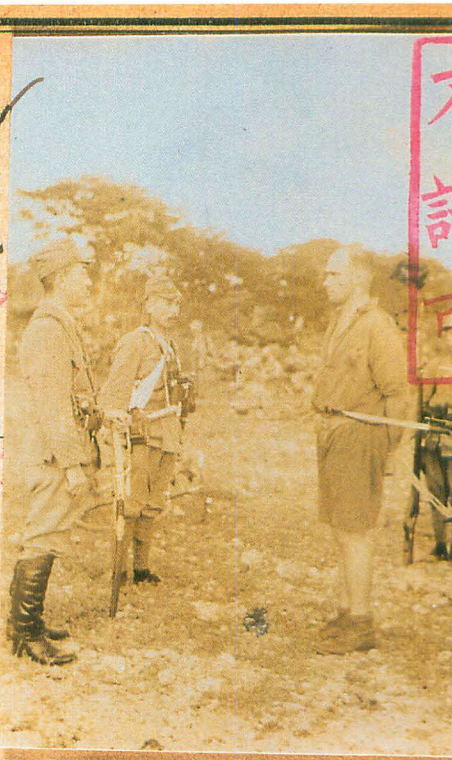
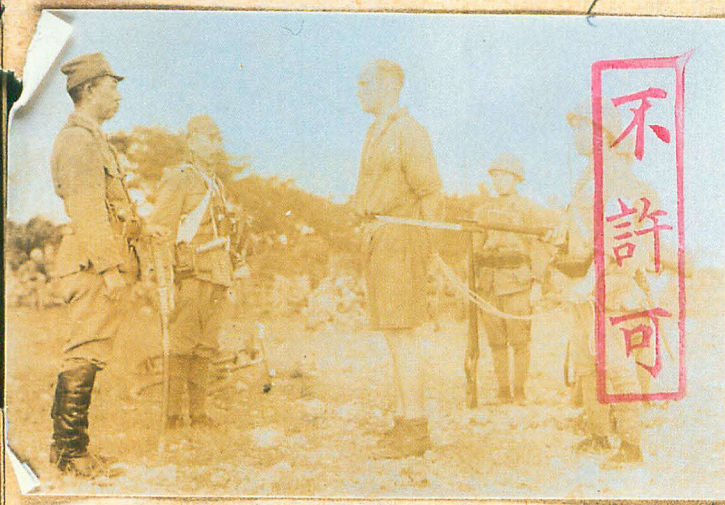
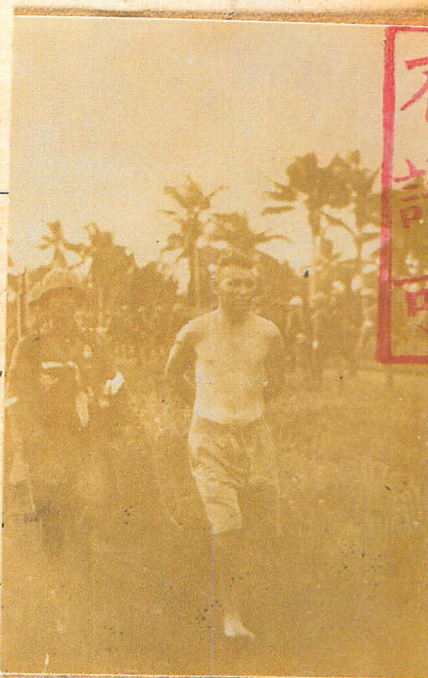
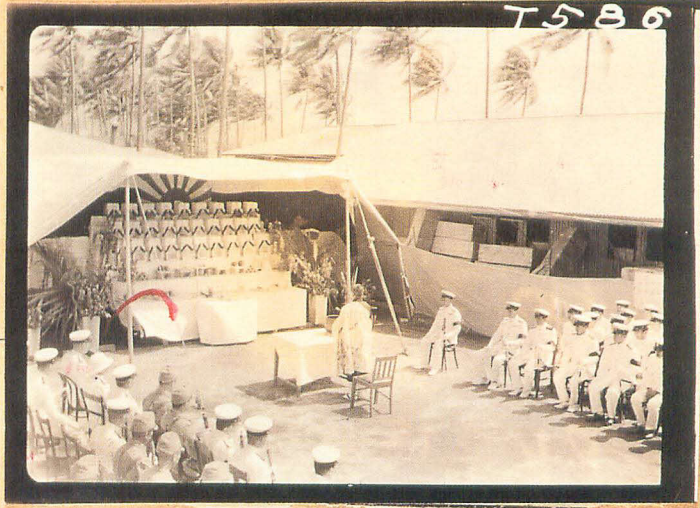
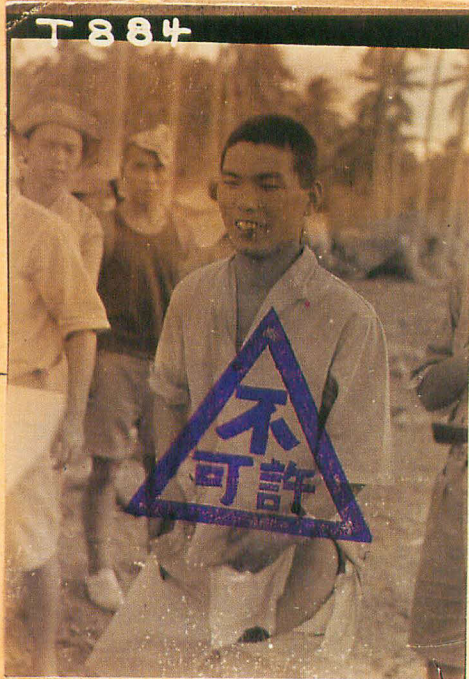
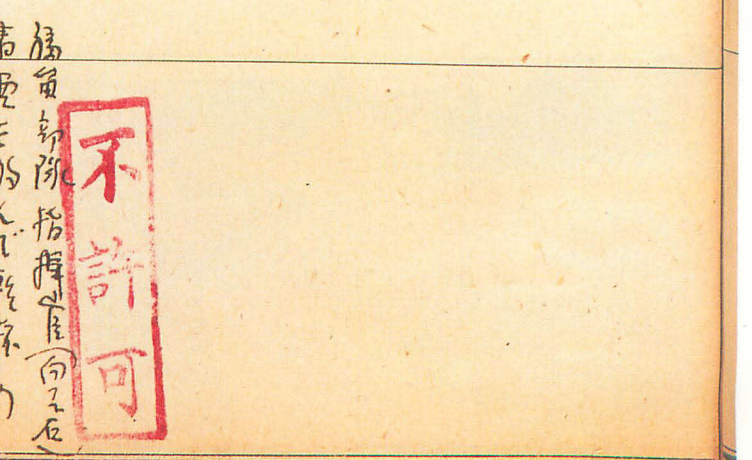
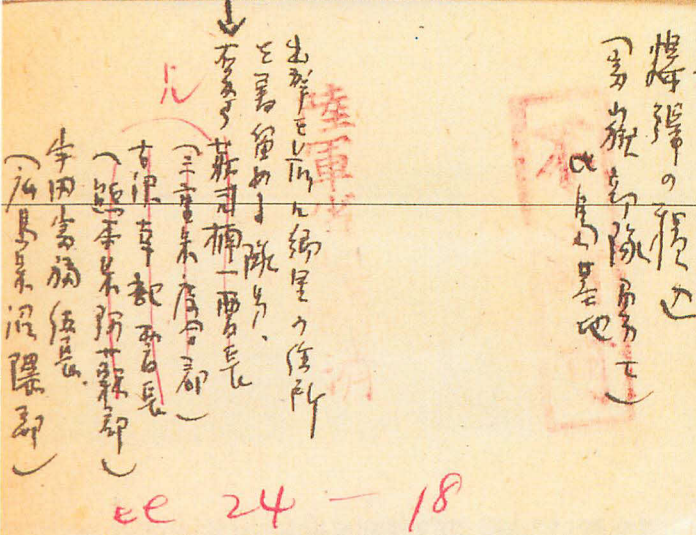
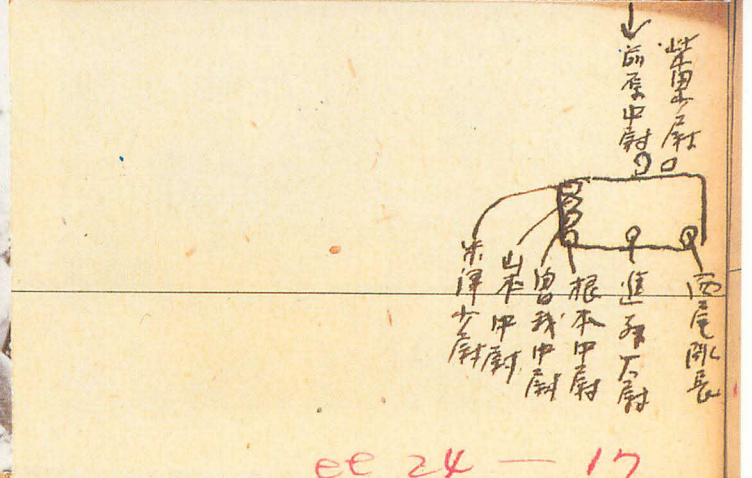
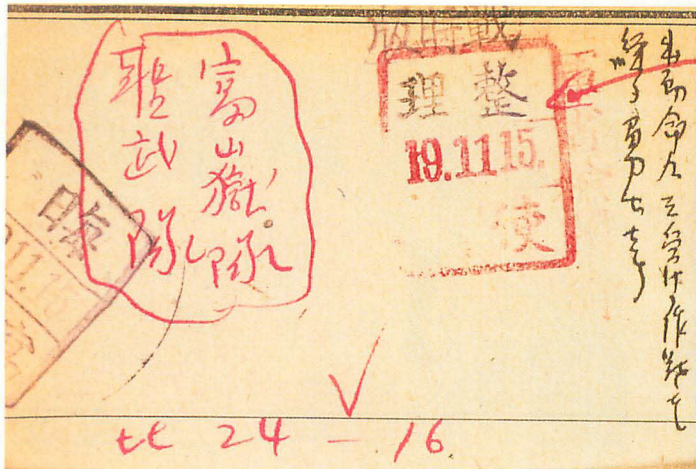
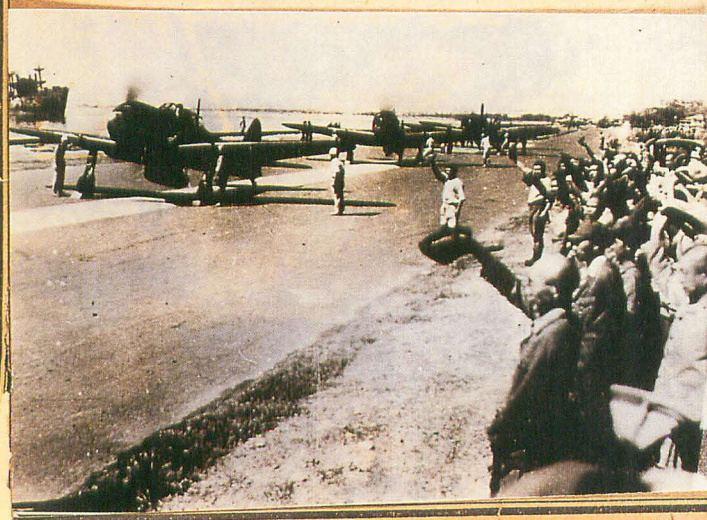
1941年12月8日、太平洋戦争が開戦、この日、日本陸海軍は共同して、フィリピン・ルソン島北部に上陸した。1942年1月2日にはマニラを占領。いちばん上はマニラ駅で撮られた「機関車修理に懸命」。中の左右2枚の本間軍司令官＝南方軍第14軍司令官外幕僚と、左下「宮城遥拝」は不許可。右下「我が輸送船団」には赤で印された部分を消すよう指示がある…フィリピン

フィリピンのミンダナオ島ダバオは、開戦当初の1941年12月20日、日本軍が占領した。
「プロペラの修理に暑さを忘れて働く整備兵」ほか水上機の写真4枚とも不許可になった…ダバオ1942年

日本軍は1941年12月23日、太平洋中部のアメリカ領ウェーク(写真説明ではウエーキとある)島を占領した。右上から2枚目のトラック島全景は不許可。左上のピール島はウェーク島の小島。右下のウェーク島の海岸についた日本軍戦闘機も不許可…ウェーク島1942年

右上の写真は「ウエーキ島作戦　五洲丸船上より太平洋を望む」。
左上の写真はトラック島全景で不許可になった…ウェーク島1942年

戦艦が写っている上の写真4枚は、すべて不許可になった。他は未検閲写真。
戦死した内田部隊長は、上陸部隊主力の舞鶴特別陸戦隊中隊長…ウェーク島1942年

上と下はサイパン港の写真。マリアナ諸島のサイパンは日本の委任統治領であった。
中はウェーク島の海軍航空隊基地。3枚とも不許可になった…1942年

潜水艦イ8号の写真4枚は不許可にされた。

中部太平洋のマーシャル諸島は日本の委任統治領であった…マーシャル諸島クェゼリン島1942年

大本営は1942年5月、北部太平洋の防衛ラインの強化と米機動部隊との決戦をめざして、ミッドウェー・アリューシャン作戦実施を連合艦隊に命令した。
しかし連合艦隊は、6月5日から7日にかけてのミッドウェー海戦で壊滅的な打撃を受け、以後連合軍の反撃が始まった。なお、アリューシャン列島西部のアッツ島は、6月8日に占領した。
上は初め不許可とされたものの、のちに掲載許可された北方に配備の日本軍艦の写真…アリューシャン列島アッツ島1942年

柔軟体操、着地訓練や基本体操などの海軍落下傘兵士の訓練風景。
のちにすべて許可された…1943年

1942年1月23日、日本海軍陸戦隊はビスマーク諸島のニューアイルランド島カビエング(当時オーストラリア委任統治領、現パプアニューギニア)を占領。
海軍陸戦隊の捕虜となった英軍。4枚とも不許可になった…ニューアイルランド島カビエング1942年1月

1月23日、日本陸海軍はビスマーク諸島のニューブリテン島ラバウルを占領。上の写真2枚は、横井部隊の戦死者慰霊祭でともに不許可になった。
下は「椰子の下で銃剣の練習　矢野部隊山田隊」…ラバウル1942年

ニューギニア戦線。左上の写真は、戦闘機と9時間空戦し最後はピストルの弾まで撃ちつくし不時着したふんどし姿の大倉二飛曹。左下は不時着した大倉二飛曹の戦闘機。右上はふんどし姿の整備員に肩車される航空隊員。右下は海岸にふんどし姿の整備士たちが写っている。4枚とも不許可になった…ルイジアード諸島デボイネ島1942年

敗色濃厚となった日本軍は、1944年10月18日、フィリピン方面の「捷1号作戦」を発令した。しかし10月23日から26日のレイテ沖海戦で連合艦隊はほとんど壊滅するなど、失敗した。
「捷1号作戦」に当たり、陸海軍とも艦船への体当たり攻撃戦法を採用、海軍は神風特別攻撃隊、陸軍は航空特別攻撃隊を編成した。上は出動前の陸軍富嶽隊の西尾隊長ら。
3枚目「薄暮出撃の準備　爆弾の積込」と、4枚目、福留海軍第2航空艦隊司令長官が聖武隊を激励する写真が不許可になった…フィリピン1944/11月

フィリピンの特攻隊基地。上3枚は陸軍航空特攻隊の万朶隊、富嶽隊。
下の写真は、神風特攻隊の出撃を見送る大川内（写真説明では大河内とある）南西方面艦隊司令長官、大西第1航空艦隊司令長官らで不許可になった…フィリピン1944年

特攻隊。上の聖武隊の出撃を見送る大川内南西方面艦隊司令長官の写真は後ろ姿のためか、不許可とならなかった。
中と下の写真は不許可…フィリピン1944年

福留司令長官が「清酒を酌んで乾杯の聖武隊勇士を激励」の写真(右上)は不許可となった。中の写真は「必殺の爆弾を抱いて聖武隊の出撃」の写真説明があり、「山を書く事」という指示がある。
下は「神風特攻隊敷島隊の出撃……左端が関隊長、敷島隊は10月25日出撃した…フィリピン1944年

不許可写真論

草森紳一

報国の写真 ――2

「不許可写真」(当時の国民は見ていない)の大半は、今日の目から見れば、一コマもののマンガである。滑稽である。なぜこんなものが不許可なのか、サッパリわからず、理由をきいて吹き出してしまう。写真を笑うのでなく、不許可の「理由」に笑うのである。

たとえば、戦車や飛行機の銃座。すこしでもそれらが見えている写真なら、すべて「不許可」の印が押された。「検閲済」でも、消すことを条件とした。これらの印は、「不許可写真」のネームである。マンガのネームと等しい。

検閲官の神経過剰は、時に滑稽と映る。権力ごしの神経過剰は、笑うわけにもいかぬが、心の中では「笑わせるんじゃない」と思っている。「新型戦車でもあるまいし、敵さんは、こんなもの百も承知だぜ。銃座や砲身のない戦車(タンク)は、もはや戦車といわないや」。新聞記者や報道カメラマンなら、この位の常識はもっているが、お上のお達しとあらば黙らざるをえない。

統制社会は、諷刺と落書をおそれる。その神経過剰を笑うからである。それを許さぬためには、その種の写真を見せぬに限る。抜本的だが、笑いの絶えた社会となる。ましてや古い兵器としか見えない今日の目から見れば、笑うべき権力の神経質さである。ノモンハン事件で、日本の戦車隊は、最新式の機能を備えたソ連の戦車隊に壊滅している。神経質になるのには、それなりの理由ありだが、やはり過剰の滑稽さはある。しかしノモンハン事件など、国民は、だれも知らなかったのだ。

情報判断と情勢判断

戦車にからむ「不許可写真」の中で、妙な一群がある。それは、戦車内部を写している。この時代における検閲の知識を得てしまったものには、どうしてこのような撮影が許されたのか、首をかしげざるをえない。こっそり報道カメラマンが戦車内部に侵入して盗み撮りしたものでないのは、戦車の中に白鉢巻きの兵士がいるのでも、あきらかである。いたとしても盗み撮りは可能だが、この写真には撮るものと撮られるものの「親和」の情がにじみでている。報道カメラマンと仲がよく、物わかりのよくかつ軍部批判もしているような戦車隊長が、危険をかえりみず撮影許可したのではないか、とも想像できる。これは、一つの「情実」であるが、稀にありえる。どうせ、中央ではハネられるに決まっている。こんな古い戦車に機密もクソもありやしない。「不許可になるのを承知で撮りたいなら、お撮り」といった成り行きになったのかもしれない。

さらに考えられるのは、現実に戦争を行っている現地軍と観念的な机上のプランナーである中央軍部との不和である。それが、このような皮肉な写真を生みだし、後世に残したともいえるが、もちろん当時は「不許可」となった。新聞社が、社内で「没」にせず、結果を百も承知であえて「検閲」を乞うたのは、軍部への不毛の抵抗だったともいえる。ただし「検閲」の色眼鏡で見ないものにとっては、ただの戦車の「分解不充分」な内部写真である。

「時」の動きを、「時勢」というが、時が動くのでなく、時の人間が動き、動かすのである。時代の人情の堆積した動き(無意識のエネルギー)のことで、「情勢」ともいう。「時代情勢」ともいう。「国内情勢」「政治情勢」ともいうが、ある時代の一国を支配する感情の動きである。個別性を失って、抗えきれぬまでに大勢化している黒雲のようなものである。情報判断以上に情勢判断はむずかしい。日本が日中戦争の不拡大を方針としながらも、ずるずる拡大していったのは、情勢判断を誤ったからだ。それほどに判断は難しく、後になって「あのご時勢では、しかたなかった」と人は弁解できる。政治家も軍人も新聞記者も民衆も、みな言い訳ができる。

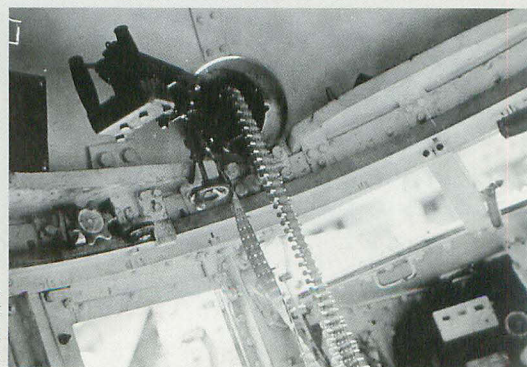
この戦車の内部写真が、マンガに見えてくるためには、かなりの情報がその人の中に積みかさなっていなければならぬ。「戦車の内部」だという注釈(情報)が入らなければ、なにやら狭いところに機械がゴタゴタ入っていたり、人がいたりする写真としか思えない。写真はストレイトに訴える力があるといっても、一方では曖昧の権化である。戦争の時代であり、検閲の時代だという知識(情報)が入って、ようやく「不許可」の理由がわかってくる。時代情勢がわかってきて、はじめて神経をとがらした軍部の検閲に対して、新聞社があえて棹をさした諷刺的(マンガ的)行為だと想像もできる。想像力は感情の子であり、情報判断の武器であるから、かならずしも当たるとはかぎらない。その想像力が不足だったり、逞しすぎたりする。だから、この戦車の内部写真の場合とて私の想像にすぎず、たしかなのは「不許可」になった写真ということのみであり、しかも国民には目隠しされた不発の写真なのである。人間は、不思議なことをする生き物である。

検閲の神経質と機械性

この「検閲」(情報封鎖)の狂的な神経質さと裏腹に、機械性がある。背中合わせといってよい。神経質さは、仕事熱心や小心からも来るが、機械性は、規則ずくめである。仕事熱心というより、なまけもので、小心というより粗雑である。神経質と機械性は官僚主義の二大パターンでともにマンガ的だが、時の権力を背負っているので笑いはこらえねばならぬ。その判断に当たり、神経質な検閲のほうが「情」がからみやすく、機械的なほうが、「情」が薄いだけ、気まぐれに入りこんだ「情」でミスする。

前回の「不許可写真論」で、昭和12年9月の陸軍省報道局検閲係の「新聞掲載事項許否判定要領」を羅列したが、不許可14項目のうち、第11までは、防諜にからむもので、スパイ対策としてであった。

旅団長(少将)以上の写真の発表を禁じているが、「連隊長(大佐)以下の写真」は許可され、ただし「肩章ノ明瞭ナラサルモノニ限ル」とした。それより先の7・28日附で通達された判定要領では、7項目しかなく、禁止は「高級将校(大佐以上)ノ大写シ写真」と位は低くなっていた。この場合も、(但シ肩章ノ明瞭ナラサルモノハ差支ナシ)と注記がある。これは、中国軍の便衣隊(市民のかっこうをした

竹下部隊に捕らえられた中国軍正規兵…上海1937/8/23

日本軍戦車の内部。機関銃と銃弾が写っている珍しい写真…上海1937年

スパイ)によって、しばしば日本の高級将校が暗殺されたからである。検閲を受けた写真群を見ていて、今日の感覚から、この事情がわかってきても、なお滑稽に思えるのは、注記の(肩章ノ明瞭ナラサルモノハ差支ナシ)が、神経質というより機械的に適用されていることに対してである。

肩章のボカシや消しを条件に検閲をパスしている写真が、退屈するほど出てくる。検閲係も退屈したはずで、つい指示が機械的になるのである。「肩章ノ明瞭ナラサルモノハ差支ナシ」といっても、戦場といえ、プロがとっているのであり、めったにボケたりしないが、この許可条項を満たすためには、修正技術によって近づくことができる。いやこれは「明瞭ナラサルモノ」にせよ、という検閲係の命令と解釈すべきである。

なぜ、その指令が滑稽かといえば、いくら肩章をとっても、軍装でどのくらいの階級であるか、たちどころにわかる。威厳をつくろう癖まで消すわけにいかぬから、それだけでも情報洩れしている。高級将校は、ほとんどの場合、手入れのいきとどいたひげを蓄えており、尉官とちがって若くないから、イッパツである。兵法のイロハに、敵将のクビをとれ、というのがある。たとえ肩章がなくとも、暗殺をはかるのに、さして苦労はない。顔さえわかれば、手にいれた資料や写真で人名を照合することだって、たやすい。

検閲は、高級将校の名前や部隊名の消しにこだわるが、一方で不許可としないのは、できれば戦果を伝える宣伝効果として報道機関に使ってほしいという気持ちもあるからで、そのため中途半端な結果になっている。これは、どうしたって笑わぬわけにいくまい。

9月発令の改正された「支那事変」における「許可セス」の判定要領は、14に増えたが、その12番目は、「我軍ニ不利ナル記事写真」、13番目は、「支那兵又ハ支那人逮捕訊問等ノ記事写真中虐待ノ感ヲ与フル虞(おそれ)アルモノ」、ラストの14番目は「惨虐ナル写真但シ支那兵又ハ支那人ノ惨虐性ニ関スル記事ハ差支ナシ」となっている。

このうちの12番目は、「許可セス」の要領のうちの最大のミソである。「我軍ニ不利ナル記事写真」とは、きわめて風通しよく、かつ曖昧な表現で、禁止条項として書き漏らしたものをすべて、ここで補うことができる。ただし検閲官が、もっともその適確な判断能力を要求され、機械的に要領と照らしあわせるわけにいかぬ種類の写真で、へたをすれば主観的な情的判断におちいる。そうなれば上部の叱責を受けかねないし、検閲を仰ぐ新聞社側にとっても、提出の際の「内閲」に当たって、もっとも悩むところのものだろう。

この条項に触れて、不許可の印を押された写真には、どのようなものがあるのだろうか。さしずめ慰安所、慰安婦の写真がその例であろうか。死と隣り合わせで戦う兵士たちにとって厄介なのは、勝手にお腹がすく食欲、ついで勝手に精子が蓄積されていく性欲である。軍隊にとって、これらは志気にかかわる重要問題である。食欲と性欲はわかちがたく相関関係にあり、その頂点に生と死がある。戦争とは、エロチシズムの問題である。世界の戦争の裏面史は、「現地調達」の強姦史である。

従軍慰安婦とビルマ山奥の料亭

日中戦争が勃発してから、早くも翌昭和13年のはじめには、軍直営の慰安所(のちに皇軍の体面にかかわるとして御用商人の経営)が上海で生まれた。従軍慰安婦の大半が、「従軍看護婦、女子挺身隊、女子勤労奉仕隊という名目で狩り出された」(土金富之助『シンガポールへの道』)朝鮮の女性たち(いわゆる素人)で、兵40名に1人の割り当てというから、たいへんな数(8万余)である。彼女たちは性病をもたず、性病であったとしたなら、日本の売春婦からうつされた兵から貰うのである。定期検診は軍医が担当した。性病では戦えないからで、サック着用を義務づけた。いまだこの問題は、「大東亜戦争」のツケとして残り、解決をみていない。

チョビヒゲの高級将校の性欲はどうなるか。彼等がストイックに抑えたわけでない。ビルマの山奥にまで料亭が作られたとも伝えきく。呆れるより、感嘆してしまう。兵士の中に大工がたくさん含まれているはずで、ビルマの山奥に料亭を作るのは、お茶の子サイサイ、さして困難だったと思えないが、高級将校に侍る芸者は内地本国から送られた。中国の苦力の引く人力車で北平(北京)の街を行く芸者の写真がある(一億人の昭和史10『不許可写真史』この項、すべて同書を見て記す)。まげを結った芸者が、片手で口をおさえている。カメラを避けてそうしたのか、偶然そうなったのかわからぬが、その手のしぐさは世界に冠たる「ゲイシャ」文化のエロチシズムである。芸者の「色気」は、しぐさの訓練を受けることによって生まれ、つまりは人工のエロチシズムである。高級将校たちは、外地の戦場でも、料亭文化を享受したわけである。

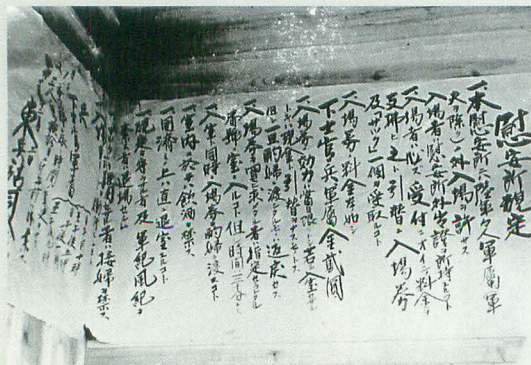
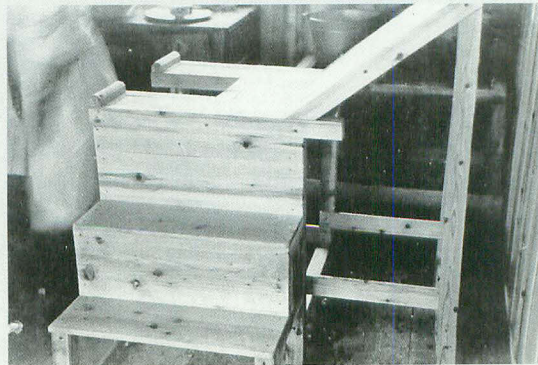
物撮り(ブツドリ)の記録精神

報道カメラマンは、プロである。プロは、使用されるのを前提として撮る。そういうプロが、暗い検閲の時代に入って、まず駄目だと覚悟しつつ、あえて撮っておく写真がある。一応、新聞社に送っておく。新聞社へ送るのもはばかるものは、フイルムごと自分で秘匿して、日本へもちかえるしかない。この慰安所の写真群は、一応新聞社に送ったものであろう。そのような時、戦意昂揚や戦場リアリズム写真の観念から解放されて、対象に向かって「物撮り(ブツドリ)」する記録精神のようなものがでてくる。「物撮り」も、一つの詩的態度である。

こんな「物撮り」写真がある。言葉の補助なしだと、なんの「物(ぶつ)」なのか、ひとつ見当つかぬが、「某軍医が衛生兵に命じ作らせた木製の即席婦人科検診台」とネーム情報があるので、なるほどと思う。軍医は、「こんなものを撮って、なんになる」位は怒鳴りつけたかもしれないが(軍医は戦争に批判的な人が多かったときくが)、報道カメラマンは謙虚な気持ちで(公表の当てがない故に)、拝み撮りできたのではないだろうか。作りたてホヤホヤなのか(背景に器具らしきものも写っている)、すでに従軍慰安婦の検診に使用されていたのか、ひとつさだかならぬ。まだ木目も新しく白いが、茶黒の節目の多い駄木で、それにカンナをかけて衛生兵が念入りに工作したものと思われる。慰安婦がこの台に乗っている写真をひそかに撮るより、検診台の「物撮り」のほうが写真倫理にかなうと考えたのだろうか。ここには、ワイセツ感がない。

ワイセツ感があるといえば、慰安所内の受付の壁にノリづけされた大きな貼り紙の「物撮り」である。女性を買う兵たちに対する「慰安所規定」が黄山谷流の書体で墨痕もなまなましく個条書きされている。上海の兵站司令部が文案を作ったとされる。「一、本慰安所ニハ陸軍々人軍属(軍夫ヲ除ク)ノ外入場ヲ許サス　入場者ハ慰安所外出證ヲ所持スルコト」「一、入場者ハ必ズ受付ニオイテ料金ヲ支拂ヒ之ト引替ニ入場券及『サック』一個ヲ受取ルコト」等、11項目にわたる。下士官、兵、軍属は等しく2円。尉官以上は、出入りを禁じられていたのか。時間は30分の特急である。

「用済ミノ上ハ直ニ退室スルコト」という一項もある。「用済み」とは、言いも言ったりである。兵士の性欲の排泄処理のみを目的として慰安所を設営したことが、よくわかる。排泄だけなら、30分もあれば充分。スピードアップの能率のみがはかられている。「慰安所」の「慰安」には「心」の問題(ケア)をはらんでいるはずだが、それは言葉の綾で、兵站司令部の魂胆は、もっぱら「用済み」にあった。この貼り紙には、「従軍慰安婦」の語はなく、「酌婦」としている。飲酒を禁じたのも、酔って「酌婦」に狼藉したり、時間を守らぬ場合を予想したからで、もっぱら能率をはかるためだろう。『「サック」ヲ使用セサル者ハ接婦ヲ禁ス』という項もあるが、性病を怕れてのことで(兵として役立たずになる)「慰安所」がまさに「軍事」に属するものであったことが、これでわかる。

この「慰安所規定」の「物撮り」写真がワイセツ

慰安所の壁に貼られた「慰安所規定」

木製の即席婦人科検診台

なのは、その貼り紙のみを複写せず、その上下の板壁まで含めて撮影し、臨場感をだしたことの他に、規定の文章が、達意な毛筆で書かれたナマナマしさにある。あまつさえ漢字仮名まじりの文章で、そのカタカナが妙に「わいせつ」感情を誘い、その結果、軍部の「猥褻」な底意に行き当たる。

軍直轄の慰安所は、「小部屋がならぶ長屋式の建物」である。かならず小さな窓はあるが、内部は相当に狭いと察せられる。そういう長屋式建築が向かい合わせになっていて、その真ん中にレンガをしきつめた大きすぎる道がある。兵が順番を待って外で並ぶために、わざわざ広い空間を作ったのだろう。まさに排泄所だが、なにやら簡易営倉にも見える。

従軍カメラマンも、一種の軍属なら、自由に出入りできたはずだが、その建物を即物的に撮った不許可写真がある。建物のドアの前に日本兵が1人立ち、そばに着物の女のうしろ姿が見える(酌婦でなく、兵をさばく女か)。2人はカメラに気づいていない。人物をふくめて「物撮り」されていて、妙に印象に残る。

もう1点、迫力のある写真がある。ネームの情報を受けなくとも、独立した写真言語をもっている。女たちが、ぞろぞろと建物の脇を歩いている。前をいく7人の女の背中は重苦しい。なにか心が凝固している感じで、それが背中や頭のかたちにあらわれている。朝鮮の民俗衣装を着ている女性もいる。もちろんカメラに気づいていない。が、気づいた女性が2人いる。前の7人にすこし遅れて後方を歩いている女性たちである。

写真の中央に棒杭のようなものがヌーッと1本立ち、一群の行進を二つ(7人と2人)に分けている。棒杭をはさんで右には、カメラに気づいた後方の2人がいる。そのうちの先を行く女性は、なに!という風に睨みつけている。敵意がある。最後尾のもう1人は、あら、いやだわと袖で口を隠しているが、目は嬉しそうに笑っている。潜在する女の媚び(美人意識)が、自分たちを狙っているカメラマンを発見するや、憂鬱な気持ちをほうりだして機械的につい出してしまったのかもしれない。憤然としている女性は、彼女の嬌声に思わず振りかえったのにすぎないかもしれないが、対照的構図となっている。しかし真の対照は、声がきこえたにちがいないのに振り返りもしなかった死の行進のような足どりの7人と、カメラに気づいて血が動き出し、喜怒の差こそあれ、正気に返ったような2人の足どりである。棒杭が、二つのグループにわける象徴的な役割をしている。

『一億人の昭和史』には、「写真は検診にむかう到着直後の朝鮮女性」というネーム情報がある。これだけでも、写真は一皮むけて、奥の層を見せはじめる。彼女たちはわけも知らずに上海まで連れてこられ、現地でようやく日本兵の性欲を一時的に解消するのが役目と知る。がく然としている間もなく、性病の有無を調べる検診所へ強制的に向かわされている時の写真だとわかってくる。

これらの写真が検閲を受けたとしたなら、「我軍ニ不利ナル記事写真」に該当するものとして「不許可」となるのだろう。新聞社は、それを承知で、皇軍の恥部たるべき写真の判断を仰いだのだろうか。とすれば、はかない攻撃であり、やらないよりはましの抵抗である。

しかし、なんら従軍慰安婦が、中国人女性への強姦予防にならなかったことは、あきらかである。「南京大虐殺」の中国側の提供写真の中で、ボケボケなのだが、今も記憶に残っているものがある。それは、強姦した相手の女性を裸(下半身)にして立たせ、自分は軍服のままその横に座り、記念撮影したものである。日本兵はカメラのほうを見ている。ボケボケの中にも美人とわかるスタイルのよい中国人女性は、レンズのほうを見つめず、白い太腿をむきだしにしたまま直立し、その日本兵を斜めに見下している。無機的な視線にも見えるが、人によっては哀れんでいるとも、軽蔑しているとも感じられるだろう。写真は、不安定なる「情形」を生産する。

この強姦記念写真は、報道写真ではない。秘匿写真である。だれが撮影したのだろうか。現地の写真館のオヤジであろうか。そのオヤジは、日本人か中国人か。日本人経営の写真館が南京にあった可能性もある。兵の要求に答えるため、写真館のオヤジが従軍していた可能性もある。それにしても、中国側はよく手にいれたと思うが、日本人の命令で中国人が撮影したとするなら、フイルムが残るので、焼き増しも可能である。それにしてもボケボケなので、日本兵の死体のポケットから発見したともいえる。だとすれば、強姦記念に撮影してもらった日本兵は、のちに戦死したことになる。中国側の宣伝合成写真の可能性もすこしはある。

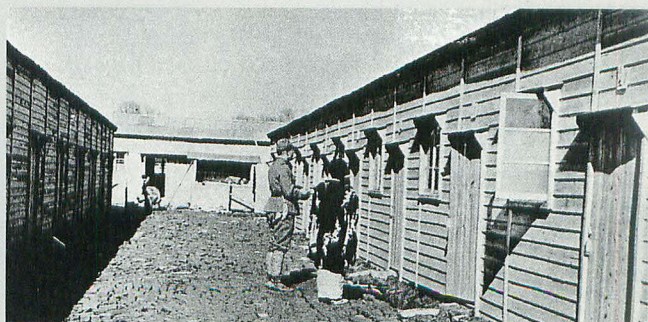
戦争体験談としてのビンタと強姦

私は、日中戦争のはじまった翌昭和13年に生まれ、国民学校2年生の時に「大東亜戦争」(のちにアメリカ製の太平洋戦争とか、統括的に第2次世界大戦というようになった)は終わっている。不器用だったので、ろくにゲートルも巻けず叱られて泣きベソをかいたものだが、気持ちのほうはいっぱしの軍国少年だった戦時中は、このような話をまったく知らない。私は幼かったが、銃後の国民とて、みなそうだった。そのかわり戦後になって、中国や南方から運よく死なずに復員してきた大人たちの口から、かかる彼等の体験談を洪水の如くきかされることになる。

東京オリンピックが開かれたのは、私が25、6歳のころに当たる。これを境になぜかあまり耳にしなくなったが、中学生のころより、大人たちから戦争体験談をさかんにきかされた。たいていは、上官にビンタを張られた話である。つづいて多いのは慰安所の話(1里も列を作って兵たちはズボンの上からチンポコを抑えながら順を待って並ぶんだと一般論めかしていうのがパターン)、つぎは強姦の話(中国の女性は貞操が高く、膝をなかなか開くことができなかったそうだと間接的にいうのがパターンである)をずっときかされつづけたような気もする。戦いの話を彼等があまりしなかった。負け戦の話はあまりしたくあるまい。しかしまだ中学生で、セックスがらみの話は、妖しい気持ちにすこしなるだけだが、一つ坊主を驚かしてやれといわんばかりに、大人は面白がっていうのである。シャクにさわるので、中途半端な戦争体験を補うため、さかんに戦記ものをあさって読んだ(昭和25～27年、講和条約締結後、GHQの検閲から解放されたのか、やたらと戦記ものが世に出た)。内外を問わず、戦争映画も好んで見た。

上官に殴られる話は戦争小説などにあちこちと出てくる。戦争映画にあってこの理不尽な殴打シーンは「売り」である。俺は不器用だから、よく殴られただろうなと思い、戦争が終わって、つくづくよかったと胸を撫でおろした。慰安所の話はすこし出てくるが(兵の相手をする女性の大半が日本の植民地であった朝鮮の女性だったとほとんど書かれていない)、日本兵の強姦の話などまったく出てこない(ただ満州を引き揚げてくる途中、報復として日本女性が強姦された話は出てくる)。とすると、大人たちの話は、みな嘘だったのかとも思ったりもしたが、まあ、身内の恥は語らぬということなのだろう。大日本帝国のマスメディア統制やGHQのマスコミ統制から脱却した後でも、表向きには、その実態が語られることはなかった。それでも惨虐行為の告発ものは出たが、セックスがらみの話は、あくまでアンダーグラウンドのものだったのだろう。しかし、世間では、あまりおおっぴらに言えぬがと前置きしながら、堂々と内緒話として、さかんに語られまくり、子供であった私の耳にさえもその情報は届いていたのである(ずいぶん最近まで、「情報」というのは、セックスがらみの秘密の話と思い込んでいたほどだ)。

このようなヒソヒソ話には、誇張がつきものだが、今ふりかえりながら気づくのは、情報提供者たちが、自分がやったといわず、「……だそうだ」と間接的に語ったり、一般論にそらして語っていたことである。いわば、お伽話の話法を使っている。自分がやっていようが、やっていまいが、この話法の森の中へ隠れこむことができる。半分真実がふくまれるとすれば、噂話やお伽話にも、「情理」があるわけで、分析するに足るものなのである。

検診にむかう慰安所到着直後の女性たち

1938年1月上海楊家宅に作られた日本軍直営の慰安所第1号。兵隊たちは小部屋がならぶ長屋式の玄関口の前で順番を待った。後に民営に移管された。女性は120人いた

内閣情報局と国策としての統制

昭和15年12月6日(内閣)情報局が設置された。それに先立って国家総動員法の成立がある。かつて国家総動員法案委員会(昭和13年3月)で、質疑に立った藤本(捨助)委員は、ドイツのカイゼルが、第1次世界大戦の敗北は新聞に負けたからだと述べたことを引き、「戦時ニ於キマシテ特ニ情報、或ハ諜報或ハ又宣伝ガ如何ニ重要デアルカ」を語る枕とした。そして「内閣ニ情報部ガアリマス、或ハ外務省ニ情報部ガアル、或ハ陸軍ノ新聞班、或ハ海軍省ノ軍事普及部、或ハ警察情報、色々アリマシテ、之ヲ眺メタダケデ既ニ犬牙錯綜、是デハ到底国策トシテノ統制ノアル情報、或ハ宣伝ハ難カシイト思フノデアリマス」と日本の現状を述べた。暗に官僚主義の弊、各省縄張り争いによる決定の遅延を批判し、このたび出された「国家総動員法」は、今日の戦争が総力戦(武力戦、経済戦、政治戦、思想戦)であるところから出された法案であるとするならば、

「国家ハ強力ナ統制ノアル所ノ宣伝省ヲ設置スベキデアラウト、私ハ確信致スノデアリマス」

とし、その「御意図アリヤ否ヤ」を近衛(文麿)内閣総理大臣に訊ねている(『現代史資料41マスメディア統制〈二〉』)。藤本委員は、ナチスの宣伝省を頭に描いて述べているにちがいないが、近衛文麿はこう答えている。

強化、拡大は必要だが、

「ソレガ為ニ一省ヲ設ケルコトガ宜イカドウカト云フコトニ付キマシテハ、今日マダ研究致シテ居リマセヌ」

この法案委員会における論争の焦点は、おもに第20条をめぐってである。これは、「新聞紙其ノ他ノ出版物ノ掲載ニ付制限又ハ禁止ヲ為スコトヲ得」というもので、違反したる際は、「発売及頒布禁止シ之ヲ差押フルコト得」というものであった。すでに新聞紙法がある。国家の安寧秩序を乱してはならぬ、風俗を害してはならぬとある。今さら厳しく統制する必要はあるか、というのが、質問する議員の大方の意見である。たとえば羽田(武嗣郎)委員は、こう杉山陸軍大臣に詰めよっている。

「新聞人ハ今迄ノ自分ノ感激ト云フモノハスッカリ失ッテシマヒマス、随ヒマシテ今後戦争ガ起ッタ場合ニ第一線ニ特派サレテモ、兵士ト共ニ弾雨ノ中ニ飛込ンデ、其実情ヲ銃後ノ国民ニ伝ヘルト云フヤウナ感激ヲモ失ッテシマウノデアリマス、新聞記者カラ此感激ヲ去勢スルト云フコトハ、決シテ日本ノ為ニナルモノデハナイト私ハ思フノデアリマス」

ありふれているといえば、いえるような意見である。記者の感激や情熱を藤本、羽田委員などが強調するのは、その情念が国民の愛国心、義勇心、敵愾心を喚起するのに役立つと思いこんでいるからだ。これが、杉山陸軍大臣に通ずるはずもない。その情念によるサービス(報道)が困りものだと考えている。さらに羽田委員は言う。

「結局去勢サレタル所ノ新聞記者ハ後方ニ在ッテ、安全地帯ニ居ッテ、若干ノ情報ヲ集メテ、美文麗句ヲ以テ或ハ後方ニ送ルカモ知レマセヌガ、此美文麗句ダケデ、現実ニ戦争ヲ見、現実ニ体験ヲシタ所ノ此モノガナカッタナラバ、其美文麗句ノ中ニハ魂ガ入ッテ居ラヌノデアリマス」

国民の精神を総動員する(これには反対していない)のに、言論統制は日本のためにならぬとしたが、陸軍大臣杉山元は、国策の遂行上、困るの一辺倒である。記者を自由にすれば、かえって流言蜚語が出なくなるのではないかという反論に対し、かえって流言蜚語が出るとにべもなく答えている。

去勢された新聞記者として語られている部分は、もちろん従軍カメラマンにもそっくり言える。羽田委員は、魂の入らぬ美文麗句と非難している。情熱(感激)的精神で携われば、美文麗句にも魂が入るとのん気に考えている。軍部として必要なのは、魂などなまじ入らぬ空疎なる美文麗句である。情熱の身ぶりだけでよい。感激性などを排した客観的文章に慣れている今日の目からすれば、戦争していたころの新聞の文章は、美文麗句をもって綴られているのに一驚するだろう。見出しを見ても「銘せよ、この気魄　銃後一丸　英霊に応へよ」「アッツの死闘こそ天意の指揮刀だ」「沸る滅敵の血潮　きょう出陣学徒壮行大会」。一見、今日のスポーツ新聞なみだが、記事は空疎。

写真の「美文麗句」

これは、文章の例だが、写真にも「美文麗句」があると考えるべきである。軍の規定に従えば、記者の文章は、何時、何処で、誰が、何故の記述を封殺されている。大本営発表以外はすべて曖昧にしなければならぬ。美文麗句がなければ、かっこがつかない。写真も、文章ほどでないが、何時、何処で、誰が、何故がひとりでに出ている。その疑いのあるものをすべて削除したり、ボカしたりしなければならない。

国家総動員法案は、陸軍省の「許否判定要領」の「我軍ニ不利ナル記事写真」の風通しのよさと似ている。いや「国家総動員」の名のもとに(極端には天皇制のもとに)、なんでもだめというに等しき大統制が加えられたのである。

さて、藤本委員は、宣伝省の必要を説いたが、それに準ずるものとして出来たのが、昭和15年の内閣情報局である。かたちとしては内閣情報部の昇格でなく、内務省警保局や「外務省情報部、陸軍省情報部、海軍軍事普及部等各庁の報道機関が情報局に一元的に統合された」(『マスメディア統制〈二〉』〈情報局の組織と機能〉)。

「検閲」は、内閣情報局の第4部に属す。「第4部長」の他に、第1課長がおり、その下に情報官2名、その属官として11名いる。すべて内務省からの派遣である。実際は、一元化などできるはずはなく、新聞社は、内容に応じて、各省の情報部に検閲を仰いだのである。同じ陸軍でも、大本営陸軍報道部と陸軍省情報部はまた別なのである。新聞社内でも検閲課(のち部)が生まれた。自己チェック、内閲の機関である。

大阪毎日新聞社保存の検閲スクラップにも、「検閲済」「不許可」「保留」以外の「情報局検閲済」「陸軍省検閲済」「海軍省検閲済」などの印が押されるようになるのは、この情報局成立以後である。

女の「太腿」問題

ここで、「情報局検閲済」の印のある写真の一群を眺めて見たい。もちろん「不許可」もまじる。それらは昭和17年8月のもので、「大東亜戦争」は、すでに始まっている。昭南市(シンガポール)における撮影なので、シンガポール陥落後である。その許否の判定は、実に女性の「太腿」の問題である。私は、宮操子という舞踊家についての知識を欠く。本格的に調べだすと、面白い話がでてきそうだが、とりあえずここでは、憶測(これも情報だ)をまじえながら書いていく。

問題の写真は、この宮操子が、椰子の木をバックに踊っている写真である。なかなかの美貌である。椰子の木は、背高ノッポで、あの特長のある葉や実はその上部に集まっており、ひょろっとした長い幹がよく目立つ。それがすこしずつ間隔をあけて植えられていると、おあつらいの縦の線状のデザインをなし、舞踊家はそれらと交錯する自分の両手両脚の動きを計算にいれて乱舞する。宮操子のソロもあるが、団員と群舞しているらしい写真もある。それらを合わせて一つの主題、一つのストーリーをなしているのかもしれないが、写真の説明を読むと、どうやら宮の舞踊団だけでなく江口(隆哉)舞踊団との合同ダンスのようでもある(あとで宮と江口は夫婦で、「江口・宮舞踊団」と呼んでいたと知った)。

比較の目を導入してみて、すぐ気づくことがある。宮操子が太腿を出して踊っているものは、みな「不許可」である。モダン・ダンスのきまりのスタイルなのだから、踊り手は水着の女性と同じく太腿を出しているという気さえないもので、文句をつけてもしかたがないというのは、あくまでも

デンパッサル(テンパサール)の博物館に陳列された石彫刻。掲載不許可となっている…バリ島1942/4月

「南方に踊る宮操子　昭南(現シンガポール)にて」不許可となった写真…シンガポール1942年

「南方に踊る江口、宮舞踊団　昭南にて」これも不許可…シンガポール1942年

分別にすぎない。意識するのは、人の勝手で、太腿にはちがいないのだ。女子バレーの選手や体操の女子選手のぴちぴち動く太腿や脚部を、色っぽいなと知らずに眺めていることが、男なら誰でもないわけでない。これは、検閲係と同じ眼差しである。

映画は、大正時代から検閲の対象となっていて、女性の肉体の露出は、日本の良俗に反し、ワイセツ感をそそるものとして禁止されてきた。写真は映画にくらべて影響力の点で、見くびられていた。写真は出版法の中に入る。「安寧・風俗に関する出版物検閲標準」(昭和9年〜10年当時の資料)を見ると、宮操子の太腿を出して踊る写真は、おそらくその中の「風俗壊乱」にあたる。その「猥褻なる事項」のうち(二)の「陰部を露出せざるも醜悪、挑発的に表現せられたる裸体写真、絵画・絵葉書」に準ずると見なされたのだろう。醜悪とは思えないが、人によっては挑発的に感じるかもしれない。伝染病の如く「かもしれぬ」場合を「神経過剰」に怖れるのが、検閲の基本姿勢である。

私などは、足首まで衣裳で隠したダンス写真のほうに、かえってワイセツを感じるが、検閲官は「検閲標準」に「裸体写真」とあるからには、ワイセツなるものと「機械的」側面を以て認定せざるをえないのでもある。内閣情報局の検閲係は、内務省から出張してきている警保局の役人である。カメラマンの意識は、わからぬが、酷暑の南方の地で一服の涼水をえたるが如く、いきいきと撮影している。心臓の高鳴りがきこえてくる。

しかし曖昧さは残る。太腿を出している群舞の写真で、「情報局検閲済」の許可印のあるものもあるからだ。たしかに小さく写っているが、八ツ切りに拡大すれば、はっきりと太腿の見える写真だが、許可である。あまりよい写真でないが、新聞社のほうでも、自社発行の雑誌に採用している。

ここで考えられるのは、情報局内の確執と妥協である。それより先にどうして、シンガポールで、宮・江口の舞踊団が新作を発表できたかということである。二つ考えられる。一つは、兵士慰問である。もう一つは「大東亜新秩序建設」のための宣撫工作としてである。私は後者と見ている。情報局の機構に照らすならば、おそらく第5部(文化)に舞踊団は属す。それも第2課(映画演劇)である。もちろん演劇に属し、そのうちの演芸関係である。演芸の中に浪曲などと並んで「舞踊」がある。舞踊にもいろいろあるが、モダンダンスもこの中に繰り込まれた可能性があり、役人のプランか宮操子と江口隆哉自身のプランか、わからぬが、国策の啓発宣伝に資すという名目のもとに、シンガポール新作公演が決定されたのではないだろうか。第5部の役人は内閣情報部からきている。写真を検閲するのは、内務省警保局から派遣された役人である。太腿が出ている写真をみな「不許可」としたなら、同じ情報局内部で角が立つわけで、比較的不鮮明な写真を許可したのではないか(さらにわかったことがある。江口・宮夫妻は、ドイツ帰りだということだ。火野葦平の「麦と兵隊」を舞踊化した実績もある〈昭和13年〉。彼等の師は、表現主義派だが、ドイツ=ナチスと受けとめられ、「太股」もしぶしぶ許可されたのかもしれない。ナチは、表現主義派を弾圧したが、彼等の推奨するリアリズム絵画のヌード、陰毛はオールパスだった)。

日本が南方へ進出した写真群を見ていて、気づくことがある。田園風景や民族芸能や文化遺跡の写真は、ほとんどが「手続不用」の印がある。従軍カメラマンも文化遺跡の撮影には、拘束の多い戦争と違って、まるで砂漠のオアシスを発見した如く、目を輝かして撮影している感じがよく伝わってくる。バリ島やアンコールワットの写真は、今や貴重なものだろう。日本人への啓発宣伝になるからと、オールパスである。検閲を受ける必要はない。例外は、文化遺跡の乳房を出した裸像(ジャバ)である。やはり不許可としないわけにいかぬ。芸術OKと寛大なところを見せると、急に顔をしかめねばならぬ「物」に出会ったというわけだ。男女性交のレリーフなど、東南アジアに珍しくないのである。

捕虜虐待の感を与えぬコト

ここで話を最初のほうに戻す。昭和12年の陸軍省報道局検閲係の許可の判定要領である。13番目の「支那兵又ハ支那人逮捕訊問等ノ記事写真中虐待ノ感ヲ与フル虞(おそれ)アルモノ」は「不許可」である。ここに捕虜の語はない。戦争中、敵国人で逮捕されたものは、みな捕虜だろう。この要領は「大東亜戦争」(日中戦争はこの中で継承される)が勃発し、南進が開始されてからの欧州人捕虜の写真にも適用されたものであろう。これは、多分、うるさい国際法がからむので、「虐待ノ感ヲ与フル虞アルモノ」かどうか、なまじ比較考慮せず、ことごとく不許可にしてしまう安全策をとっている。

「虐待ノ感ヲ与フル虞アルモノ」

というのは、語るに落ちた言葉である。逮捕の際は、かならず手荒くなる。投降してきた場合は別として、逮捕の際には、当然相手は抵抗する。それを抑えるため、機械的に手荒くなる。下手をすれば自分もやられるから、機械的に暴力的防衛動作になる。警官が犯人逮捕の時、棍棒で容赦なく叩きのめすシーンをドキュメントテレビなどでよく見るが、あれも、容赦なき非情の暴力というより、防衛本能なのだろう。陸軍の判定要領では、捕虜への訊問写真も不許可となっているが、素直に相手が白状するわけでもないから、どうしても手荒くなる。拷問も辞さないのは、そのためだ。私は1点しか見ていないが、後ろ手に縛られたまま訊問を受けている捕虜は、みじめで哀しい表情をしている。「虐待ノ感ヲ与フル」写真といってよい。

第一次上海事変(昭和7年)の写真で、今にショッキングな印象を私に残しているものがある。日本の官憲(私服の憲兵か)でないとすれば、上海日本人居留民団に逮捕された抗日会(抗日公然組織の一つ)の中国人が、後ろ手に縛られ、目隠しをされて立っている。まだ若い。その開いた唇の端に血がこびりつき、衣服の胸のあたりにも血走りの痕がある。彼の両脇を2人のソフト帽をかぶった日本人が控え、1人は腕を抑え、もう1人はそばにうすら笑いを浮かべて立っている。いや中国青年の後ろ、首のあたりに、もう1人のソフトの日本人がいる。目をつむっている男の顔が覗いている。どうやら上海市民の群衆が、このまわりをとり囲んでいるようだ。騒いでいるのか、上陸したばかりの日本海軍の陸戦隊が銃剣をもって抑えこんでいる。

見せしめ写真の意図

上海事変が勃発(1月28日)して、まもなくの真夜中の逮捕劇らしい。私は、この写真を眺めているうち、いつものことながら、知らず知らず、意味をあれこれさぐりはじめている。造形本位の芸術写真は、余計な意味さぐりをしないほうがよい。報道写真はそうはいかぬ。なぜ、この写真が、ショックだったかを考えはじめたりする。抗日運動に挺身して、逮捕されても堂々たる中国青年の姿が、ショックだったわけでない。おそらく青年の左脇に立っている日本人の顔の表情なのだと気がつく。

見方によって彼は、ソフトのよく似合うダンディな男だともいえる。他の2人の日本人のようにカメラに向かって目を伏せたりしていない。目を伏せているが、できたら顔を写されたくないという感じで、カメラを避けている。それに対しひょうひょう堂々とし、レインコートのポケットに片手をさしいれ、微笑まで浮かべている。しかし微笑といっても、その唇はしゃくれ気味で、皮肉っぽく、その長いあごも薄情そうである。大きな耳は、手塚治虫のマンガの登場人物のようにピーンと左右に張っている。目はすこしさがり気味で、大きくはないが冷徹そうに見える。顔は生まれつきなのだから、ほっといてくれといわれれば、おしまいだが、自分を殺さねばできぬ職業顔だともいえる。とすれば特高刑事(派遣されていた可能性もある)か、私服の憲兵か。とうてい抗日運動に対して立ちあがった居留民団の1人とは思えない。

1932年1月28日
上海事変勃発直後、
日本人殺害をはかったと
逮捕された抗日会中国人。
即日射殺された

解放民族戦線の容疑者を射殺する
グエン・ゴク・ロアン国家警察長官
…サイゴン1968/2/1
AP/WWP

なぜか私は、ヴェトナム戦争で、解放戦線の捕虜を一発で撃ち殺し、機械的にホルスターに拳銃をおさめる南ヴェトナムの軍人の非情なフィルムを思い浮かべた。スチールで私は見たが、のちに映画フィルムだと知った。あとでスチール撮りしたのである。あの世界中をかけめぐった映像の出所はどこか、よく知らぬが、政治宣伝的意図をもったもので、提供者の意図通りの結果をもたらしたかどうかわからぬが、戦争がもついい知れぬ不快さを思いしらせるだけの効果はあった。

ここでようやく気がつくのは、この第一次上海事変の写真が、意図的に撮影されたものだということである。この現場での指示者は、カメラに向かってうっすらと微笑を浮かべている男であろう。それなりの地位をもった男であろう。見せしめの撮影許可にちがいない。『一億人の昭和史』によれば、「苦力(肉体労働者)に5ドルずつあたえ、日本人殺害をはかったと逮捕された抗日会中国人(姓名経歴一切不明)」とある。逮捕された男に焦点をあてたネームである。「30日の海軍第1遣外艦隊司令官塩沢幸一少将布告〈便衣隊は射殺する。便衣隊の行動を幇助したものは便衣隊と同罪〉により即日射殺された」とある。このネーム資料(情報)により、そうか、待てよと思う。上海事変勃発とほぼ同時に逮捕されたにしても、この写真は、30日のものかもしれぬ。彼を犯人と断定し(唇の傷は逮捕時ではなく、拷問のものとも想定できる)、海軍の布告により、「即日射殺」と決定、刑の執行にあたり、上海市民への見せしめとして(日本人居留民を安堵させるため)撮影を許可したのだなと思う。中国の「愛国青年」の胸には白い名札がぶらさがり、目隠しされている。処刑のための目隠しだと考えられる。青年は、死を覚悟して堂々と胸を張っているように思われる。写真はいやだなと目を伏せながら青年の右腕を押さえこんでいる日本人は、セーターの上から妙なかたちの毛糸のチョッキを重ね着している。おそらく防弾チョッキか。左腕に腕章がある。「百田」としか読めない。

上海には外国の報道カメラマンもたくさんいた。在留日本人を殺害してはばからぬ抗日運動の中国人の「惨虐」を世界に拡めようという宣伝意図もあって、わざと処刑前の撮影を許可したと思える。

しかし、自国内においては、「不許可」となった。世界に対しては、逆効果になったことを思い知り、「虐待ノ感ヲ与フル虞アルモノ」という基準に照らし合わせ、あわてて国内では禁じたのだろう。手遅れである。たしかに中国青年の唇の傷は、「虐待ノ感」をすこしあたえる。だが堂々と胸を張っていることにより、「虐待ノ感」を薄めている。にもかかわらず「虐待ノ感」を深めていると、日本軍部の検閲係が断定したとすれば、青年の右脇に立っている男の平然とした顔つきを根拠にしたからではないだろうか。

昭和12年の日中戦争からは、便衣隊逮捕の写真や、生け捕り投降を問わず、捕虜の写真は、ことごとく「不許可」となった。海外の悪宣伝を怖れるのみならず、銃後国民がかならずしも喝采せず、虐待の印象をあたえては危険と見なしたのだろう。

■検閲官は予測不能の想像力を怖れる

テロ集団の便衣隊は、国際法上、正規の捕虜と見なされるのかどうか知らぬ。広い手拭いで目隠しばかりか猿ぐつわの用までさせ、両手を後ろ手に縛り、足首も縛り、さらに天津駅の鉄柱へ紐でつないだ写真は、「不許可」である。どうしてこんなことをしたのか、よくわからぬ。逮捕した者が、用事ができて、臨時にこうしたのか、連行する途中で、列車が到着する間、こうしておいたのか。この目隠しは、処刑の慈悲としてでなく、中国人に向かって救いを求めたりするのを防ぐためだろう。鉄柱に縛りつけて転がすのは、捕虜だって人間だ、犬扱いして可哀想にと本土の人間が思う可能性だってある。自分の身うちが、もし中国の捕虜になった時、やはりこのように虐待されるのだろうかとけっして想わぬというわけにいかない。人間の想像力は、いい加減にして、かつ逞しい。ここから無数の「情報」が発生する。検閲係が怖れるのは、その予想もつかぬ想像力である。

なにかに捕虜を逃げださぬようにくくりつけるというのは、のん気そうにも見えるが、案外と日本文化の中にある加虐被虐の精神(縛りの美学)とどこかでつながっているのかもしれない。昭和17年3月ビルマのラングーンを占領したが、この時インド人による掠奪(逃げだした支配者の建物や金持ちの家を襲う)が横行した。彼らを逮捕した野戦憲兵は、あまりに大量すぎて収容する場所がなかったのか、街の樹木を利用することを思いついている。一人一人を後ろ手に縛ったあと、大樹のそばに立たせ、それをぐるりと大縄で縛りあげている。裏表15、6人はいそうだ。そばに鎖につながれていない野良犬が見張り番よろしく寝転がっている。なにか、のどかな風景にも思えるが、熱帯地方の天日にさらすのであり(いや、木陰だから、かえって涼しいか)、残酷ともいえなくない。日本軍は、インド独立義勇軍を編成しようとしていた。「不許可」は、インド人の反感をはばかってのことだという。

「不許可」となった捕虜の写真群を見ていて、つくづく思うのは、確信犯(愛国心の持ち主)とそうならざるものとの差である。そうならざる者の表情には、重い不安感が漂っており、それだけでも「虐待」の印象をあたえかねない。愛国心とか

軍人の誇りがあるものは、後ろ手に縛られていても、背筋が伸びている。これは、敵ながら天晴れという感じを人にあたえる。愛国心は、おたがい様だということを銃後に知らしめる結果にもなりかねぬ。捕虜と日本兵が仲良く遊んでいる写真も不許可になった。銃後の日本人の敵愾心を殺ぐと狭量に考えたか、海外にはやらせの偽装工作写真と見られかねないと判断したからであろう。

とりわけ、英軍捕虜は、背が高いこともあって、どうしても日本人を見下している感じになるが(例・ニューアイルランド島の英軍捕虜)、プライドが高いからでもある。日本の軍人が威厳を見せて対しても、なにやら虚勢を張っているように見える。ほとんど不許可である。

■辻政信の誤解

戦後、国会議員ともなり、謎の失踪を遂げた辻政信(参謀)の『シンガポール—運命の転機—』を読むと、シンガポールへ入城した時のつぎのくだりがある。

「不思議な事に、誰の顔にも敵意は見られなかった。激しいスポーツの後のやうな、諦め切った顔つきだ。古ぼけた写真機を取出して、この初めての人海(10万の俘虜)をカメラに収めた。忽ち方々から車に殺到する白兵、黒兵が口々に叫ぶ声と声、通訳の話によると、〈皆、写真を取ってくれ〉といっているらしい」

どうやら辻政信は、カメラをあやつったようだが、「写真を撮ってくれ」の意味がわからなかったので、通訳に問い糾させた。

「その写真は、すぐに日本の、世界の新聞に出るだらう。そうすると、故郷に残した妻が、夫の顔を見出して生き残った事を喜ぶからさ」

という答えが戻ってきたとある。

「彼等は今、給料に相当する請負仕事を終って、やれ一息と安心し切った姿である」と辻流に解釈している。日本には、検閲制度があって捕虜の写真を新聞に掲載しないことを知らぬので、彼等はこう叫ぶ。また英人は捕虜となるのを日本人のように不名誉と思っていない。敗北とわかれば、投降する。むだに命を落とさない。ただし収容所にいれられてからも、スキあらば、脱走を企てる。

『日本軍捕虜収容所の日々—オーストラリア兵士たちの証言—』(リック・タナカ訳)を読むと、日本軍は捕虜たちに脱走しないという署名を要求したようだ。「私、下記に署名したるもの、名誉にかけ、どんな状況であれ、決して脱走を企てぬことを誓います」といった意味の同意書へのサインである。つまり、しばしば脱走事件があったということだ。同書の中にシンガポールの捕虜収容所にいたアーニールというオーストラリア兵の回想がある。

天津駅附近で捕まり、
駅構内の柱に縛られた便衣隊の中国兵。
不許可…天津1937年

ニューアイルランド島カビエング
(当時オーストラリア委任統治領、
現パプアニューギニア)で海軍陸戦隊の
捕虜となった英国兵…1942/1月

「すべての捕虜にとって脱走は任務だったから、日本兵と捕虜の間の対立は避けられなかった」

脱走して捆まったものは、死刑である。捕虜たちを刑場に集めて見せしめとしたが、銃殺部隊はインド人だったという。

「日本は、1929年のジューネーヴ協定には署名したものの、批准していなかった。この協定によると、それぞれの国は戦争捕虜を労働に駆り出す権利を認められていた。しかし士官は強制的な労働を免れていた。捕虜の仕事は直接戦争のない作業に限られ、危険な過剰労働はやらせないことになっていた」

日本軍が違反したのは、なぜか。署名したが、批准していないという事実を逆手にとったのか。検閲において徹底して不許可としたのは、やはり署名はしているので、世界の世論をおそれたのか。

捕虜の食料

「日本軍が連合軍捕虜を巨大な労働力として搾取することは、開戦直後から始まった。捕虜たちは自分たちの待遇がジュネーヴ協定の約束からかけ離れたものであることにすぐに気づく。作業の内容、きつさ、そして、看守の態度は運任せだった」

と同書にある。

捕虜収容所は、準牢獄である。捕虜となったものは国家のためという大義名分があり、犯罪意識はないが、まごうことなく、殺し合いをしている。捕虜を収容する側では仲間が殺されたという憎しみもある。国家という抽象性で、誇りや犠牲心などを維持できても、死ぬことの具体性をなかなか差し引きできない。それが待遇にもかかわってくる。

人間は、物を食べる。いかに大勝利をえても、シンガポールの捕虜10万の食事の用意は、容易でない。潤沢でない味方の食料を奪いとる。その代価として、国際法で認められた労働力を提供させる。しかし刑務所の囚人以上の過酷な労働が課せられ、それに応じられなければ、死んでほしいとさえ期待されている。ジュネーヴ協定があろうとも、理想的な捕虜収容所など、この世にひとつとしてありえない。西洋の脱走思想や、日本の虜囚の辱を受くるな(自殺せよ)、という物の考えかたは、ともに一理だけならある。

日中戦争では、しばしば捕虜の殺戮が命じられた。南京虐殺も、その例である。死に物狂いで戦った兵たちにとっては憎しみの対象だが、軍の上層部にとっては、足手まといである。兵糧は現地調達主義の綱渡りだったのだから、捕虜をかかえると軍隊組織の壊滅であり、時にはわざと逃がしてやる場合もあった。

私は、ここで急に思いだしたことがある。学生時代の下宿のオヤジからきいた話である。若いころ日中戦争に一兵卒として駆りだされたのだが、その時、中国兵の捕虜を相手に銃剣術の練習をさせられたというつらい思い出をきかされた。場所は、どこか言わなかったが、ひきだされた捕虜は目隠しされて1本の柱にその胴体をくくられる。手は自由である。これから敵と戦うため、新兵への特訓として銃剣をもって捕虜を刺突させるのである。普通はわら人形だが(戦争末期は、本土決戦にそなえ、銃後の婦人も竹槍で突く練習をさせられた。子供の私もした)、ここでは人間(生き人形)そのものである。わら人形は、突き刺しても血はでない。生き人形は人間を人形に見立てただけの話なので、血を流すだけでなく死ぬ。

そう思えば、赤紙一枚で引っ張りだされた新米兵士が、わら人形と思って刺せといわれても、中国の捕虜だと分かっているわけで、刺せるはずもない。足が動かない。上官の叱声で、目をつむって、闇雲に突進する。相手の腹に剣先が喰いこむ。その時のいやな鈍い感覚は、今でも忘れられないという。剣を抜こうとするが抜けない。目を開くと、うめく捕虜は両手で銃剣の刃をにぎりしめている。向こうこそが抜こうとしている。その指がボロボロと落ちる。

晩酌につきあわされた時、下宿のオヤジが、なにを思いたったのか、急にいいだしたのである。時々、まだ夢に見るといっていた。4年間、世話になったが、オヤジが戦争体験を語ったのは、これ1回きりであった。これは、一種の捕虜の処刑だろう。

捕虜の写真で、「不許可」とならず、「検閲済」となったものも、稀にある。それは、敵の高級将校を捕虜にした場合である。大阪毎日新聞社のスクラップブックを見ると、「敵の旅団長を生捕りにして取調べる堂脇少佐軍参謀　捕虜の旅長　八七師二六一旅長　陸軍少将　劉啓雄(三六)」という写真部メモがある。条件つき「検閲済」の例で、写真では劉啓雄(少将)と堂脇軍参謀(少佐)とが一緒に並んで立っている。部屋の様子からして、どうやら第10軍の取調室のようだ。取り調べに当たった堂脇参謀を「消す」というのが条件である。「敵の旅団長を生捕りにして取調べる堂脇少佐軍参謀」までの前半部のコピーを消せともある。

そこで差し引き残ったものは、なにか。捕虜となった陸軍少将劉啓雄が、ぼっと立っている肖像のみとなる。日本の参謀の名を消すのは、敵に寝首をかかれる暗殺を怖れてのことである。写真で面が割れたら、敵意を煽り、それこそ「生け捕り」にされるかもしれない。暗殺よりも「生け捕り」のほうが難しい。参謀肩章や下げ緒だけでなく、存在そのものの抹消を指示している。おそらく堂脇少佐は、勝ち誇った気持ちで、捕虜となった敵将と並ぶ記念写真を従軍カメラマンに許したはずなのに、自分の姿は消滅した。内地と外地のズレが、この処置となった。

おそらく新聞社は使用しなかったと思われる(新聞社の自主を重んずという仮面をかぶった検閲部への最大の抵抗である)。検閲側としては、なんとか生かしてほしいと思った写真だろう。「生け捕り」の語はなまなましすぎると抹消したが、検閲係の気持ちとしては、一兵卒でなく、敵の旅団長を捕虜としたのであり、内外の志気にあたえる影響は、大きいのであるから、掲載してほしいといったところかもしれない。

将軍たるもの、敵に「生け捕り」されることほど、情けのない話はない。劉啓雄は、捕虜となった時点で、武器はもちろん、階級章のすべてを剥ぎとられる。そういう姿で、敵の参謀との記念撮影などというものは、屈辱以外のなにものでもない。新聞社に使用されなかったとすれば、せめての幸せともいえる。

捕虜にも意志的な投降と、はからずも就縛される場合とがある。「生け捕り」にも、いろいろある。はじめから殺さぬようにと狙って成功した場合の他に、捕らえてみれば、なんと将軍だったというのがある。この場合は、後者であろうか。偶然であっても、「戦略生け捕り」と騒ぐのが常である。

南京攻防戦

劉啓雄は、南京城、正面の城門(中華門)を守備していた中国軍の第71軍第87師の旅長(旅団長)である。師長は、沈発藻。12月9日、南京城を包囲した「大日本陸軍総司令官松井石根」は、「南京防衛軍司令長官唐生智」に対し、投降を呼びかけている。唐生智は応じず、死守を命じた。夜の戦いは砲火交錯、不夜城の如くだったというが、4万を数える中国軍の抵抗は予想外に激しく、死闘が続いた。劉啓雄の指揮する中華門城壁(南壁)は、日本軍の繰り返される突撃をそのたびにはねかえし、容易に陥落しなかった。唐生智は、日本軍の後続部隊が南京北東に進出してきたという情報をえて、ついに退却命令を出す。退路を断たれると考え、ついに首都放棄したのである。包囲されているわけだから、敵中突破である。第87師は、退却かなわず、南京の揚子江に面した下関のあたりで、必敗を覚悟で戦うしかなかったようだ。捕虜刺殺命令は出ていたが、気がたっている日本兵は手をあげている投降兵を殺したという。南京入城式は12月17日(児島襄『日中戦争』)。

「情」の解釈によって異なる写真情報

中国軍は、日本の将官を「生け捕り」にした場合、「1万元」の賞金を与えるといった布令を出してい

ラングーン(現ヤンゴン)占領後、市内に横行した略奪犯は日本軍憲兵に捕らえられ街路樹に縛りつけられた…1942/3月

捕虜となった中国軍旅団長と、彼を取り調べる第10軍参謀・堂ノ脇(写真部メモでは堂脇)少佐。参謀の部分は削るよう指示されている…1937/12月

た。日本軍も、中国の将官の生け捕りに賞金を出していたというが、これに対し児島襄は、虚説だと否定している。真否はともかく、これらの情報を通じて「生け捕り」の発想が日中戦争にあったことは、たしかめられる。

南京城を死守せんとした旅団長の劉啓雄は、どのような過程で、日本軍の「生け捕り」になったのか、よくわからない。写真を見るかぎり重傷を負った様子もないが、退却中捕らえられたのか、それとも投降兵の先頭に自ら立ったのか。投降兵の中に変装して紛れこみ、ついに発見されたのか、いろいろな場合が考えられるが、わからない。その後、逃げそこなって、捕虜となった部下たちと共に処刑されたのか。国際法では将校以上の優遇が決められているので、特別に収容所へ送られたのか、よくわからない。取り調べを受けている劉啓雄の外套(戦闘は冬)姿は、襟章や徽章は剥奪されているので(逃亡中、あるいは投降の時に階級を隠すため自らそうしたともいえる)、ひげの生えたタダのオッサンにも見える。「少将」であるという先入観が入れば、そのような顔つきかなとも思ったりする。情報とは、まったく心もとない。写真は、読みによって、どうにでも揺れ動く不確実な情報でもある。この世の風景は、すべからく風情である。人間がいなければ存在しないのが、風景であり、情景である。偏頗な「情」の解釈なしに「報」は成立しない。一方的な解釈を押しつけたあとでも、どうひっくりかえるか、安心できない。

捕虜の写真と厳密にいえぬが、無条件降伏したパーシバル英軍司令官が山下将軍と会見した有名な写真がある。これは「陸軍省検閲済」となった。大阪毎日のスクラップブックを見ると、いろいろなメディアで「使用」した印が押されている。七つもある。大いに発表はケッコウの許可写真であった。山下将軍以下参謀が写っているが、襟章や勲章も消されていない。威厳の必要からだが、ひんぱんに使用された1枚は、用心深く参謀の「飾緒」のみは消されている。このへんが姑息なところだろう。

「惨虐ナル写真但シ支那兵又ハ支那人ノ惨虐性ニ関スル記事ハ差支ナシ」

これは、不許可事項の14番目に当たる。兵士の「死骸」が転がっている写真は、日本兵敵兵問わず、百パーセント不許可であるが、これは「惨虐ナル写真」のうちに入れてのことか。戦争は、所詮、殺戮合戦である。兵器は殺人のためにあり、惨虐は大前提である。死体写真は論外の「不許可」となるのは、綺麗な戦争というものはないからである。にもかかわらず、「不許可」にして、あくまで死者なきが如く綺麗事に見せるのが、戦争宣伝である。戦場における日常光景ともいえる死者の姿を撮った写真は、戦意喪失、厭戦反戦気分を煽るものとして「不許可」となった。

人は、かならず死ぬ。これはだれにでもわかっている。平和時にあっては、葬儀という装飾的な儀式によって、もはや物を食べることもない物体と化した死者に化粧を施し、腐敗する前に火葬し、みごと処理していく。死体遺棄は、犯罪である。

しかし、戦争ともなれば、大量の死者を始末している暇などない。戦闘終結まで、敵味方の死体は遺棄される。兵士は屍をのりこえて戦う。死臭きつければ、鼻をつまみ、タオルをまいて屍体のそばを通って前進する。焼け焦げの死体は、棒のように硬直している。

戦闘員でない従軍カメラマンは、自軍の兵士の死体をほとんど撮っていないが、敵兵の写真は、不許可を覚悟で、かなり撮影している。これは、矛盾した行為で、手足が吹っ飛び、首と胴体のみといった敵兵の写真は、自軍の「惨虐」を示すものにほかならぬ。自軍の兵士の屍骸は、敵の「惨虐」を示すものなのに撮影したりしない。人情としては、わかる。「但シ支那兵又ハ支那人ノ惨虐性ニ関スル記事ハ差支ナシ」の条項にあてはまるから、よさそうなものだが、けっして「検閲済」とならぬ。人情として偲びないだけでなく、銃後にあたえる影響をはばかる(この条項が当てはまるのは、たとえば上海の市内は日本と中国によって無差別爆撃がなされたが、中国軍の場合のみ、許可している)。戦争が終わり、検閲のない世となっても、時代の空気がかわらなければ(反戦思想やエログロナンセンスの流行する時代)、陽の目を見ることはない。時代の空気とは、怖しいもので、死骸の写真を見てもむごいというより、戦争はいやだと思うより、なにやらこの世の桎梏から解放され、安らかな眠りについているように思えたりする。今日は、一体どのような時代なのか。

戦死屍体の写真

敗戦濃厚な戦争末期はいざ知らず、緒戦のころは、陥落するごとに慰霊祭を行い慰霊塔を作った。僧侶、神官も従軍し、その儀式をとりおこなった。これらの写真は、白い布に包まれた戦友の遺骨の箱を抱く兵士と同じく、ほとんど許可である。兵士や銃後の心を宣撫するものと見なすからである。ただし、儀式に参加する将官の肩章、襟章は消しである。墓標に部隊名がはいっていたりすると、やはり「消し」である。なんとも妙なもので、文字なしの白木に向かって参拝、合掌している写真になる。戦死者の遺族にとっては、部隊名が入っていたほうが、心は慰むといえるが、敵に機密が漏れる怖れを優先させている。たとえば昭和13年9月3日、巡洋艦「夕張」は、東沙島を攻略したが、その時の戦死者の碑が同島に建てられた。検閲官は、「夕張戦死者之碑」の「夕張」の消しを命じ、さらに「9月3日占領」の記録を消した。陸戦隊の将官は深々と「戦死者之碑」にお辞儀していて、間が抜けたものになっている。

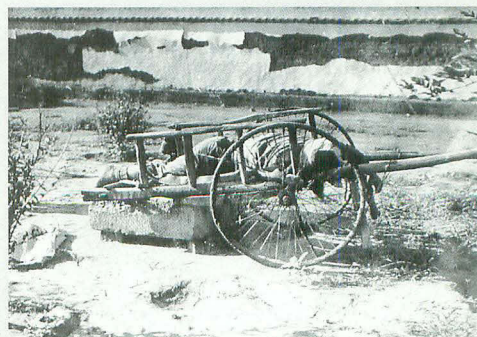
アメリカの従軍カメラマンは、敵味方なく戦死体を撮影する。発表の実態は不明だが、味方の戦死者の屍体も、適切に使用されるなら、時に戦意昂揚に役立つと考えるのがアメリカである。それとてむごい話だが、戦争の屍体写真の「価値」を認めている。日本の従軍カメラマンは、味方の屍体を撮らない。国民性ともいえるが、なべて国民性とは、病理である。今日とて、タブーである。変死体(三島由紀夫の首はマスコミのタブー破り)は官憲によって撮影されるが、公開はされない。近衛文麿の自殺写真は、GHQの作意の発表だろう。

もちろん、例外はある。それは、同胞兵士の死体写真でなく、他社の記者(従軍カメラマンかどうかわからぬ)の写真である。「大朝　岡部君の死骸」とメモにある。リヤカーの上にその死体は横たえられている。顔がうつぶせの頭部には、タオルをかぶせてあり、また車輪の陰にもなって、よく死体は見えない。同じ仲間の死を悼む気持ちがよく伝わってくるような角度から撮った写真である。リヤカーのそばの土面は、サンサンと陽が当たっている。白く光って明るい。メモがなければ、リヤカーの上で、だれかが昼寝しているような詩趣に富む写真である。もちろん、検閲は「不許可」とした。大阪毎日の記者は、大朝(大阪朝日)の記者の遺族へこの写真を送っただろうか。やはりためらったであろうか。

死体写真の「ど真ん中」の倫理

死体写真は、カメラを握るものが、その倫理を問われるものである。社会倫理であって、人間倫理でない。死体を撮影するものは、検閲はもちろん、世のタブーと渡りあわねばならず、一切の批判を引き受けるだけの覚悟が必要である。発表は考えず、秘匿するにしても、同じである。

たとえば、河の水面にポッカリ浮かんだ裸の死体。兵士であるのか、巻きぞえを喰った市民なのか、よくわからない。この世の所属(男女の性別や身分)は抹消され、まるで木で作った人形の如く、両手を開いて仰向けに浮かんでいる。両脚は切断され、腹部や陰部が異常にふくらんでいるが、それが全く気にならない。そのかわり荘厳なる凛としたものを感じ、息を呑む。気にならないのは、私の特殊感覚のせいというより、カメラマンが、河中の屍体を構図の「ど真ん中」にもってきて、ピントを合わせたからのように思える。「ど真ん中」に置くことは、カメラマンの敬虔なる気持ちをあらわしている。なまじの情や観念をいれて写真を撮ったなら、たちまち酸鼻を帯ぶ。

昭南島(現シンガポール)における英軍無条件降伏の会見。マレー方面第25軍司令官・山下中将(左端手前)と署名する英軍司令官・パーシバル中将。当時この写真は紙面に何度も使われた…1942/2/15

リヤカーに乗せられた大阪朝日新聞社現地特派員の遺体。不許可…1937年

この不許可写真は抽象的にして具体的な詩美の結晶をなし、死者への憐愍や戦争の惨酷をこえ、悲愁に富んだ叙事詩の一コマをなしている。手札よりすこし大きい写真で見ているが、なまじの拡大写真による新情報を見たくない。

死体の山の荘厳

荘厳の叙事詩を感じるものとして、大阪毎日のスクラップブックにないもので、次のような写真がある。日本軍の爆撃を逃れんものと重慶の市民(子供と女が多い)が地下壕に向かうが、内部に入れず、階段の上に折りかさなって倒れた死体が山をなしている。これも息を呑む。なぜか裸の写真もまじる。日本の爆撃で死んだのか、地下壕は満杯なので、もはや入れぬと味方の銃で撃たれたのか、パニック状態のため、こうなったのか、よくわからぬが、なぜかをさぐる気さえおこらない。戦争が引きおこした写真ではあるが、その荘厳、戦争をこえている。戦争の叙事詩は、すべからく戦争をこえていなければならない。このカメラマンは、絶句したまま、情を排し意味を排し、心のど真ん中(からっぽ)で撮っている。死体のかさなり具合は、完璧なまでに「美しい」。グロテスクとは、美の頂点になりうる(平塚柾緒編著『日中戦争　日・米・中報道カメラマンの記録』)。

検閲する側の問題

まだまだ述べたいことは、多々あるが、ひとまず置き、これまで語ってきた「不許可」となった写真を判定した張本人たる「検閲係」の内側にすこし入っておきたい。手もとに元大本営報道部員・陸軍中佐平櫛孝の『大本営報道部』がある。「言論統制に加担して、功をきそっていたのだから、国を誤った者の一人といわれてもしかたがない」としながらの回想録である。振り返って勤務上の過ちがすくなかったのは、厳しさ、慎重のせいだが、それはそのまま「そつのない官僚の集団であった」せいだともしている。彼は主に月刊誌・週刊誌・単行本の担当であったようだが、「大本営報道部と陸軍省報道部は同じもので、報道部員は大本営(参謀本部)報道部員と陸軍省報道部員の二つの肩書をもっていた」と語っている。彼は、新聞担当でなかったが、新聞の「検閲関係」についても、つぎのようにいう。

「検閲には、決った担当者がいたわけではなかった。新聞社の前線特派員からの電報または写真は、いつ本社へ入ると決っているわけではない。その中には明日の朝刊にすぐにも組込みたい原稿がある。報道部の検閲は、午後5時までというわけにはいかぬ。少くも朝刊の締切時刻まではつきあうため、若い者が順番でこれに当った。昼間は報道部の部屋で、午後5時以降は報道部員の更衣室の片隅に机を運びこんで、検閲にあたった」

報道部員は、私服を許されていたらしいが、「決った担当者がいたわけではなかった」とは知らなかった。

「新聞社に着いた写真フィルムは、ただちに現像され、印画紙の乾くのも待ち切れずに、オートバイで大本営報道部の検閲係に持ち込まれてくる。検閲はまず写真説明を読み、まだ発表していけない兵器(例えば戦車砲、大型発動艇の舳先の部分)が写っていないかをみて、何もなければ〈検閲済〉の判を、修正をすれば使ってよいものには、砲身の口径をぼかすとか、この部分を削るとか、指示をして、〈検閲済〉の判を捺して、〈ご苦労さん〉とつけ加えてかえす。このご苦労さんには、使いのオートバイの人と、この原稿を送ってきた前線特派員に対する感謝の意味をふくめているつもりであった」

だいたい想像した通りのことを彼は書いている。ただし、毎日新聞の場合、特殊事情があって、すこしルートが違う。たとえば、報道カメラマンが南京にいたとするなら、撮影が終わるとそのフィルムを連絡員に渡し、彼はオートバイで上海へ運ぶ。ここで現像し、急不急の内容に応じて船なら長崎へ、飛行機なら福岡へと送られる。さらにそれらはいったん門司(支社)へ送られる。未現像のものは現像し、大阪(本社)、東京(支社)、名古屋(支社)へ電送。現像フィルムそのものは、すべて大阪本社へ。写真部は検閲を必要としそうなものを選び、1カットにつき八ツ切り5〜7枚をつくる。これらは、すぐ列車便にのせられて、東京の写真部へ。かくて写真部の命を受けたオートバイのお使いさんが、内容に合わせて陸軍省海軍省(大本営検閲部)や内閣情報局へと持参する。その検閲を受けた生プリントは、また列車便で大阪本社へ返送される。不許可の写真は編集部に渡さなかったという。この時の八ツ切りプリントは紛失し(始末したか)、ネガとスクラップブックのみが、奇蹟的にも今に残ったのである。こう書けば、戦場写真は気の遠くなるような長い旅をしているようだが、短い日数の中で迅速にリレーされた。まさに平櫛中佐のいう如く、この機械的になされる検閲への旅は「ご苦労さん」なのである。平櫛はいう。

「やむをえず保留不許可の判をおすのは、未発表の新作戦の前線よりのもので、担当者個人だけでは判断できない。新しい作戦や兵器の専門家の出勤を待ってから決定にいたるまでの〈保留〉だった」

「保留」の写真は、機械的に片づけられずに、上司の判断を仰ぎ、場合によっては1日置かねばならなかったことが、これでわかる。「〈保留〉〈不許可〉の多かった日は、勤務を終って市ヶ谷の坂をおりるとき、生死の巷で身の危険をかえりみずに撮った写真を没にしてしまったことが、どこか心の奥にひっかかって、足が重かった」と反省的に回想をしている。時々、私が見ていても検閲官の判断の迷いが感じられるのは、かかる保留の写真である。報道部員は、スパイに狙われたというが、当然であろう。

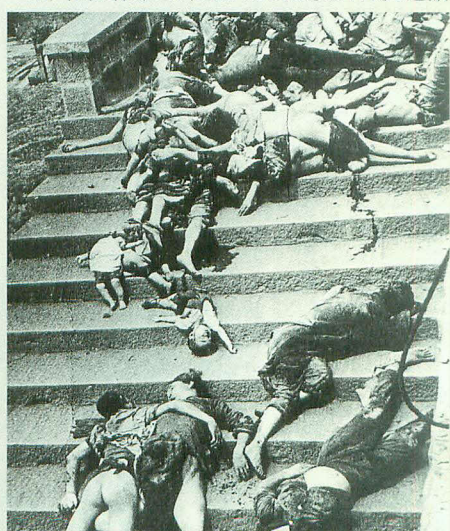
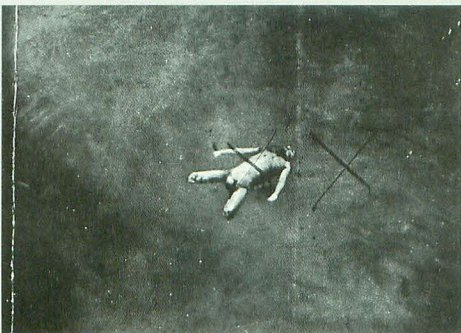
情報局の検閲をパスして発表されたものでも陸軍報道部から抜かりありとクレームをつけられたり、海軍省と陸軍省の角逐(縄張り争い)も、想像通り、ひんぱんにあったようだ。大本営も情報部も一元化を図っての設置だったが、まったく機能していなかったのである。また、報道部にまわされた軍人たちには、この任務はわが本色でない、という左遷意識があったし、他の軍人たちも報道部を軽蔑していたようだ。情報、情報というようになっていたが、情報認識は浅かった。報道部の軍人には、その道の専門家はいず、寄合世帯で、慣れのうちに検閲もこなしていたにすぎないようだ。

内務省警保局検閲課の『勤務日誌』がある(『戦時新聞検閲資料』第十四巻)。同課は、「情報局第4部第1課」と兼務で、同一体といってよい。この日記は、宿直や夜勤の担当者の手による業務日誌で、私が勝手に期待していたような検閲にからむ感想などは記されていない。こころみに昭和18年の分を見る。5月30日(日曜日)。この日の勤務日誌には、日直者(3人)、宿直者(2人)の名前が記されている。他に検閲統計表がある。「省令関係」「省令外」とにわかれている。前者は、内務省警保局の管轄に属する検閲である。後者は、他省の検閲をも(陸軍海軍をも)把握した上での統計表だろうか。

この日、「不許可」はない。省令関係の申請数は20。そのうち写真8、記事12。記事のほうがすこし多い。写真はすべて「検閲済」だが、記事は一部削除が3ある。「省令外」では、申請数は26。写真7、記事19である。写真はすべて「検閲済」。記事のほうは一部削除5、保留1である。思っていたより申請数は、すくないが、日によって違い、7月6日(火)などは、152件もある。写真83、記事69。写真検閲のほうが多い日もある。そのうち「一部削除」は9で、他はパスである。だが、数が多いだけあって、この日の宿直は2人、夜勤は7人である。

統計表の他に記事もある。5月30日の場合だと、検閲作業の外にも「全国主要日刊社電話

1945年12月16日
服毒自殺した、
近衛文麿元首相を
検視する米軍将校

不許可とされた
川面に浮かぶ遺体
…天津1937年

日本軍は1940年5月、翌41年5月重慶に無差別爆撃を加えた。写真は市内最大の地下壕前に築かれた死体の山(平塚柾緒編著『日中戦争　日・米・中報道カメラマンの記録』翔泳社・1995年より)

指導」を行ったことがわかる。新聞社が内閲するにあたっての注意であり、これもまた「検閲」といってよい。「アッツ島ノ戦況ニ関シテハ谷萩報道部長放送(后七時)ノ要旨ニ従ヒ国民士気ノ昂揚ニ努ムルト共ニ作戦方面ニ対スル信頼感ヲ失墜セシメザル様記事編輯上留意相成度」とある。谷萩報道部長は、いわゆる「大本営発表」で有名である。アッツ島の戦況は、軍部の領域だが、大きくは内務省が把握していたということだろう。「国民士気ノ昂揚」にからむ検閲は、内務省(情報局)であり、「作戦方面」の記事に注意しろというのは、軍部に文句をいわれぬようにしろ、という意味もふくんでいるのだろう。

戦争中の新聞記事でよく覚えているのは、山本五十六の葬儀、そしてアッツ島玉砕と山崎部隊長。ともに昭和18年であるから、私が国民学校に入学する1年前。戦死や玉砕(全滅)を隠したりせず、英雄化して国民の志気を昂めるのに役立たせようと計りはじめたころに当たる。他にルーズベルト大統領の死の報道もある。大人たちがルーズベルトをヒトラーなみの独裁者と誤解して、これで日本は勝つぞと、万歳を叫んでいたのを覚えている。5、6歳でも、覚えているものだ。

「情報」の語の発祥は?

「〈諜報〉とは、今日の〈情報〉のことである」

元大本営海軍参謀(諜報担当)の実松譲は『日米情報戦記』の中でいう。「情報」の語は、いつごろから使われだしたのか不明だが(おそらく昭和6年の満州事変からで、これまでの諜報感覚では、世界の情勢に応じ切れなくなったのだろう)、明治大正は、まだ「諜報」で間にあった。陸海軍の検閲要領の大半が、「諜報」「防諜」にからむのは、そのためである。あの禁止事項は、みな自軍が他国に対して行うことの裏返しで成り立っている。

今日では、野球でも情報戦である。今夏の甲子園でPL学園は、早くも序盤から横浜高校の好投手を打ち込んだ。三塁コーチが、横浜高校の捕手のサインを出したあとの癖を見抜き、速球か変化球かを打者にいちいち通報していた。PLの選手はレベルが高いので、そのどちらであると知っただけで、好投手を打ちくだく。その情報洩れを横浜高校の控えの選手(前日までの3番打者)が発見する。敵のコーチが打者へ送る暗号を解読してしまう。かくして横浜の捕手はサインを出したあと、からだを動かさぬようにする。以来PL学園は打てなくなる。かくて、延長17回の好ゲームとなる。両チームの諜報合戦は、ビデオ分析以上の成果をもった。戦争もまた同じである。

一般の国民に対し
「防諜上・写真を撮って良い所、悪い所」を示した例。
「室内撮影の場合　外景が要塞地帯ならば悪い」
(憲兵司令部検閲班嘱託・田玉栄吉編
『国防と写真の撮影』博文館・1941年より)

それにしても日本の検閲は、情報洩れを防ぐにはオートマチックにすぎ、情報戦もお粗末なものだった。実松譲は、こういう。

「対米戦備のためには、これに先行して、おそくとも、これと同時に、対米情報機構(第5課)を整備すべきであった。しかし実際には、整備どころか、満州事変当時の旧態依然たるものであり、その欠員をすら補充せず、〈平時定員マイナス1名〉のままで戦争にはいり、しかも、戦争の期間を通じて改善されなかったのである」

とぼやいている。

米国情報部の勇気と自信

まず情報資料の蒐集がある。これが「情報作業」の第1段である。情報入手に努力したが、情報機構が貧弱のため、労多くして報いられなかったという。第2段階が、資料評価。分析、整理、分類の作業で、「情報眼」を必要とし、それをうるには2年の年季が必要である。第3段階は、その分析成果を敵情と照合し、ズレを修正していく作業。第4段階は判定であり、作戦への充当である。これらが、実松譲の対米情報作業だが、「貧弱な情報機構に我慢しなければならなかったので、すぐれた成果を期待すること自体が無理な注文であった」と口惜しがっている。

みすず書房刊『現代史資料　太平洋戦争〈二〉』に「米海軍情報部の情勢見積りと〈覚書〉」が入っている。これを読むと、軍機にからむ陸海軍の検閲(情報閉鎖)は、すべて効なく、アメリカに情報は筒抜けでむだな作業であったと思えてくる。その分析(情勢見積り)にも感心する。たとえば1941年9月25日、海軍作戦部戦争計画部長のターナー提督に、海軍情報部極東課課員のR・A・ブーンが提出した「覚書」を読んで感心するのは、情報(諜報)分析による断定の鋭さの他に、曖昧なるものは曖昧のまま、きっちり書く勇気と自信(これも判断の一種)である。日本海軍の情勢を分析したあと、こうブーンは記す。

「艦船の建造は秘密の幕に包まれているが、2隻の新空母は就役し軽巡1隻は最近艦隊に編入され、過去1年間に駆逐艦5隻と少なくとも1隻の潜水艦が完成したと考えられる。資材の不足のために最近の建艦計画はおくれており、明らかに日本の不利な条件は増大している。1隻の新式戦艦は完成に近いかもしれないが、これを裏書きするはっきりした証拠はない」

写真の無意識と面白半分

わからないことは、わからないと書いているほうが、作戦に役立つ。昭和16年5月、『国防と写真の撮影』という珍しい本がでている。憲兵司令部検閲班嘱託の田玉栄吉という人が書いたものである。英国には、「写真統制令」があるのに、日本には「〈写真と防諜〉に限定化しての法令化したものはなく、僅かに防諜に関する法令の極く一部分に、特定の場所、特定のものに限って歌い込まれてあるに過ぎない。現在、我が国家は、古今未曽有の非常時局に当面してゐるにも拘らず、他国に見るやうな写真に対する強制命令はなく、国民の愛国心に信頼して」いると憂えたところから書かれている。機密保護の法は、いろいろあるが、写真については明文化されていない。写真のおそろしさを認識すべしと注意を促している。

今、読むとなかなか面白い本だが、説明している余裕はない。写真機をもって撮影する銃後の国民への警告であり、「撮影して悪い所」を示すハンドブックである。「一般カメラマンはもとより、相当利害関係の伴ふ写真業者の間さへ、写真関係の法令或は取締に疎く、為に無意識のうちに刑辟に触れ囹圄の人となり、又は行政処分を受け」ることを憂えている。彼がおそれるのは、意志的に法を犯すことは、もちろんだが、彼等の「無意識」と「面白半分」である。

たとえば、家族団欒の室内撮影。窓から要塞地帯が写っている場合である。思わず笑ってしまうが、「苟(いや)しくも無意識の間に、写真に因る売国的の結果を招来せぬやう、寧ろ進んで写真報国の心構へが必要である」としている。これらは、敵国のスパイの手に入ることを怖れている。第二次世界大戦は、ある意味で写真狂時代だが、まだまだ個人がカメラをもつのは限られており、あまりこの本は反響を呼ばなかった可能性もある。

さて新聞の検閲は、終局的に陸海軍よりも、軍事記事をふくめて一般記事をチェックする内務省が主導であったと考えてよいだろう。写真にからむ防諜の条項は、情報閉鎖によって役目を果たしたと思うが、国家宣伝行為としては、あざといまでに報国愛国の役目を果たしたと思わぬわけにいかぬ。つまり表層的で種なしの報国写真(記事)しか、徹底して載せさせなかったという「凄さ」がある。すくなくとも、まだ幼い子供たちは、それだけでもまんまと洗脳されたし、大部分の大人たちも、「大本営発表」の放送や新聞の記事をそのまま信じこみ、掲載された「検閲済」の写真のみを信じ、当時から批判の目をもてるものは、ほんの一部分であったと思われる。戦後になって玉手箱を開いて、びっくり仰天したわけである。内閣情報局(内務省)の「検閲係」は、白痴的なまでに「国民戦意ノ昂揚ニ資スル報道」へと新聞社を誘導した。ここでいう「国民」とは、「皇国の民」のことである。

私は、今、急に思いだしたことがある。昭和36年ごろと思うが、10歳位年上の先輩と、ボクシングの世界選手権の実況テレビを見ていた時のことだ。その先輩が、日本のボクサーと戦っている外国のボクサーをやたらと応援するので、私は腹を立てて「非国民!」と思わず叫んだ。すると、先輩は目を丸くして跳びあがったので、私こそが驚いた。私は言葉としてしか知らないが、先輩にとっては、過去における悪夢のような怖しい言葉だった。

不許可・検閲写真ハイライト

上海北郊の羅店鎮で撮影され
「参考」と注釈がつけられた白骨化した中国兵の写真。
送られてきた写真説明に「参考」または「参考写真」とあるものは、
現地特派員が掲載許可が得られないと判断、
検閲にまわさないように注釈をつけたもので、
なぜ検閲に出されたのかは不明…1938/2月

激戦半年後の
中国兵の死体。
「参考」写真だが、
検閲に出され、
不許可となった
…上海北郊・羅店鎮
1938/2月

平漢線・新鄭駅付近で鉄道を守備する日本軍、
中央の「死守」の文字は中国軍の銃弾で書かれている…1938/3月

特別陸戦隊が戦闘で使用した舟艇とともに海軍特務船で上海帰還。
舟艇が機密扱いで不許可になったものと推定される…1938/12/18

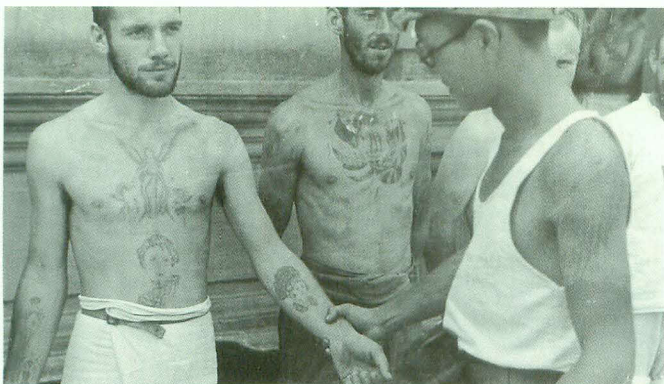
「炎天下、裸で活躍中の○○高射砲隊(測高機班)」 測高機だけでなく、
ふんどし姿の兵士も不許可になった理由かもしれない…1938/7月

洪水で水に浸かった山田長政神社。占領の象徴として建てられた神社が、現地の自然災害で
没していることは望ましくないので不許可になったものと推定される…タイ1942/10月

富金山占領後、山中で発見された三谷中佐の遺体を焼き、
墓碑を建て弔う倉林部隊の将兵。この写真は不許可になった…富金山1938/9/16

東江を遡って広東省南部の恵州に上陸する日本軍。
上陸用舟艇の写真は不許可になった…1941/5/12

占領したチャンギー要塞砲を見る山下奉文軍司令官。少将以上の写真は
階級を明らかにしなければ掲載可となった…シンガポール1945/2/25

日本兵から
支給された食事を
とる中国軍捕虜。
捕虜を虐待の感を
与える恐れのある
写真として
不許可になった
…1942/5/21

英国兵捕虜の入れ墨を見る日本兵
…1942/1/22

空襲を受けて炎上するバンコク停車場前の中国人街。
タイは独立維持のため日本と同盟を結び、
1942年1月25日には英仏に宣戦を布告した。
同盟国の被害を示す写真なので
不許可になったものと推定される…タイ1942/1/8

上海の収容所へ送られてきた米軍俘虜兵。
収容所内の米軍俘虜の写真はすべて不許可とされた…上海1942/1/23

黄河対岸の中国軍陣地を監視する日本兵。
本誌121ページ上の写真…蒲州1943/4/18

殷家湖庄に上陸する○○部隊・市川部隊の萩尾隊、
上陸用舟艇を削除すれば「使用差し支えなし」となっている…1938/7/24

徐州作戦・黄河渡河戦。北支那方面軍第1軍第14師団は12日未明、黄河を渡河。写真は
黄河を渡る土肥原部隊＝第14師団、上陸用舟艇が写っているため不許可になった…1938/5/12

徐州一番乗りを祝い、感状授与祝賀会で乾杯する○○部隊の幹部たち。
将官、多数の幕僚の写っている写真は不許可…1938/7/15

戦跡視察に出向く秩父宮、司令部が写っているためか不許可となっている…南京1938/5/7

「では行ってまいります」
漢口爆撃に向かう海軍航空隊搭乗員たち。
基地での爆撃機の写真は不許可…1938/3/28

日本軍占領下のシンガポール、
マレー半島の各州で華僑協会は5000万ドルの奉納金を集め献金した。
献納式典で小切手を受けとる山下司令官…シンガポール1942/6/25

インドシナ半島南部の仏領に進駐する
日本軍の大船団がメコン河口サンジャックに集結。
上陸する日本軍をみる市民…チオアン1941/8/2

演説するスカルノ。
日本が無条件降伏した2日後の1945年8月17日に、
スカルノはインドネシア独立宣言を読み上げることになる
…ジャワ・バタビア(現インドネシア・ジャカルタ)1942/7/28

小銃を肩に、毛布、飯盒、地下足袋などを背負い、上海にもどった日本軍部隊。不許可とされた
…上海呉淞路1938/2/27

ウェーク島で捕虜となり上海の捕虜収容所へ送られてきた米軍将兵。不許可とされた
…1942/1/23

■太平洋戦争地図

日本軍の攻撃
日本勢力の最大進出地域
連合軍の反撃
敗戦時の日本の勢力線

ソ連邦
ソ連参戦
満州国
ハバロフスク
ウランバートル
モンゴル人民共和国
新京（長春）
ウラジオストク
奉天（瀋陽）
朝鮮
北京
天津
大連
ソウル
日本
東京
大阪
広島
長崎
45.8
原爆投下
沖縄上陸
延安
インパール作戦
44.5
洛陽
中華民国
マニラ占領
南京
上海
44.6
長沙
インパール
昆明
桂林
廈門
広州
汕頭
台湾
沖縄
45.3
香港
41.12
ハノイ
カルカッタ
42.5
ラシオ
マンダレー
ビルマ
ラングーン
45.5
タイ
仏領インドシナ
バンコク
41.12
サイゴン
リンガエン
41.12
マニラ
42.1
コレヒドール
フィリピン
42.5
44.10
レイテ
マライ
ブルネイ
サンダカン
ダバオ
タラカン
ボルネオ
スマトラ
42.2
バリクパパン
モルッカ諸島
セレベス
マカッサル
パレンバン
42.3
ジャカルタ
ジャワ
スラバヤ
バリ
シンガポール占領
マレー沖海戦
ジャワ占領
レイテ沖海戦
ラングーン占領
オホーツク海
樺太
千島列島
小笠原諸島
硫黄島
45.2
硫黄島上陸
南鳥島
マリアナ諸島
44.6
マリアナ海戦
サイパン
グアム
44.7
サイパン島陥落
ヤップ
パラオ諸島
トラック
ホーランディア
43.9
ニューギニア
42.3
ラエ
ブナ
ポートモレスビー
ビスマーク諸島
ラバウル
43.12
ブーゲンビル
ソロモン諸島
ホニアラ
ガダルカナル
42.8
サンタクルーズ諸島
ニューヘブリディース諸島
珊瑚海海戦
ガダルカナルの戦い
オーストラリア
インド洋
ベーリング海
アラスカ
アラスカ湾
アッツ島
43.5
キスカ島
43.7
アリューシャン列島
ダッチハーバー
42.6
42.6
アッツ島玉砕
北太平洋
ミッドウェー諸島
ミッドウェー海戦
42.6
41.12
ハワイ諸島
ジョンストン
真珠湾攻撃
ウェーク
マーシャル諸島
44.2
クウェゼリン
マキン・タラワ島玉砕
43.11
ギルバート諸島
ナウル
パルミラ
フェニックス諸島
エリス諸島
トケラウ諸島
ライン諸島
サモア諸島
フィージー諸島
ヌクアロファ
ソシエテ諸島
90°
120°
150°
180°
150°

目次

引用・参照文献

陸戦史研究普及会編『陸戦史2　マレー作戦(第二次世界対戦史)』(原書房・1966)
張治国監修『最新中国地名事典』日外アソシエーツ(1994)
今井武夫『近代の戦争第5巻　中国との戦い』(人物往来社・1966)
大賀和男『日本軍は中国で何をしたのか』(葦書房・1989)
佐藤振寿『上海・南京見た撮った』(偕行社)
黒羽清隆『日中戦争(上)(中)(下)』(教育社・1977、1979)
古屋哲夫『日中戦争』(岩波新書・1985)
防衛庁防衛研修所戦史室「戦史叢書」(朝雲新聞社)
　『マレー進攻作戦』(1966)
　『大本営陸軍部1』(1967)
　『中國方面海軍作戦1、2』(1974)
　『支那事変陸軍作戦 1～3』(1975)
　『北支の治安戦 1』(1968)
　『陸海軍年表』(1980)
　『海軍捷号作戦 1、2』(1970)
　『捷号陸軍作戦』(1970)
　『昭和十七、八年の支那派遣軍』(1972)
　『中部太平洋方面海軍作戦1、2』(1970)
　『中部太平洋陸軍作戦』(1967)
　『ハワイ作戦 』(1967)
　『比島攻略作戦 』(1969)
　『比島捷号陸軍航空作戦』(1971)
　『比島・マレー方面海軍進攻作戦』(1969)
　『ビルマ攻略作戦 』(1967)
　『北東方面海軍作戦』(1969)
　『北東方面陸軍作戦1、2』(1968)
　『香港・長沙作戦』(1971)
　『マレー進攻作戦』(1966)
　『南太平洋陸軍作戦1～5』(1968)
　『蘭印攻略作戦』(1967)
　『蘭印・ベンガル湾方面海軍進攻作戦』(1969)
　『中國方面陸軍航空作戦』(1974)
杉江房造『最新大上海地図』(日本堂書店・1943)
小林龍夫・島田俊彦解説『現代史資料7　満州事変』(みすず書房・1964)
島田俊彦・稲葉正夫解説『現代史資料8　日中戦争1』(みすず書房・1964)
臼井勝美・稲葉正夫解説『現代史資料9　日中戦争2』(みすず書房・1964)
角田順解説『現代史資料10　日中戦争3』(みすず書房・1964)
小林龍夫・稲葉正夫・島田俊彦・臼井勝美解説『現代史資料12　日中戦争4』(みすず書房・1965)
臼井勝美編『現代史資料13　日中戦争5』(みすず書房・1966)
実松譲編『現代史資料35　太平洋戦争2』(みすず書房・1969)
稲葉正夫編『現代史資料37　大本営』(みすず書房・1967)
内川芳美解説『現代史資料40　マス・メディア統制1』(みすず書房・1973)
内川芳美解説『現代史資料41　マス・メディア統制2』(みすず書房・1975)
クリストファー・ソーン／市川洋一訳『太平洋戦争とは何だったのか』(草思社・1989)
クリストファー・ソーン／市川洋一訳『米英にとっての太平洋戦争』(草思社・1995)
倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』(草思社・1992)
「1億人の昭和史」(毎日新聞社)
　『日本の戦史2　満州事変』(1979)
　『日本の戦史3　日中戦争1』(1979)
　『日本の戦史4　日中戦争2』(1979)
　『日本の戦史5　日中戦争3』(1979)
　『日本の戦史6　日中戦争4』(1979)
　『日本の戦史7　太平洋戦争1』(1978)
　『日本の戦史8　太平洋戦争2』(1978)
　『日本の戦史9　太平洋戦争3』(1980)
　『日本の戦史10　太平洋戦争4』(1980)
　『不許可写真史』(1977)
甲斐弦『GHQ検閲官』(葦書房・1995)
粟屋憲太郎、中園裕編集・解説『戦時新聞検閲資料』(現代史料出版・1997)
憲兵司令部検閲班囑託・田玉栄吉編『國防と寫眞の撮影』(博文館・1941)
平塚柾緒編著『日中戦争　日・米・中報道カメラマンの記録』(翔泳社・1995)
『朝日新聞縮刷版』(朝日新聞社)
『毎日新聞縮刷版』(毎日新聞社)
『近代日本総合年表　第3版』(岩波書店・1991)
『岩波電子日本総合年表』(岩波書店・1993)
歴史学研究会編『日本史年表　増補版』(岩波書店・1993)
電子ブック版『日本大百科全書』(小学館・1996)
『世界大百科事典』(平凡社・1985)
『ブリタニカ国際大百科事典』(TBS・ブリタニカ・1984)
『世界史大年表』(山川出版社・1992)
『最新昭和史事典』(毎日新聞社・1986)
『國史大辭典(全15巻)』(吉川弘文館・1979～1997)
『日本史大事典(全7巻)』(平凡社・1992～1994)
『20世紀年表』(毎日新聞社・1997)

■編集
井上新八
追分日出子
小田切敏雄
黒岩比佐子
坂本光代
佐藤純
佐原宏臣
高木健一郎
高橋勝視(デスク)
遠山吉幸
永田典子
西井一夫(編集長)

■校閲
木之内良一(聚珍社)
聚珍社

■編集協力
毎日新聞大阪写真部
日本報道写真連盟関西本部
中里ゆか子

■写真・資料
北田研索
草森紳一
関美比古

■デザイン
鈴木一誌
竹内さおり
加藤昌子

■DTPディレクション
紺野慎一

■DTPオペレーション
山口裕子
喜古弘
中山美咲
明時茂樹
平山淳一
永田秀之
岩崎隆一

■制作管理
安斎征二
水谷裕保

■DTP進行
栗城英雄
金子友之
畑田美茂礼

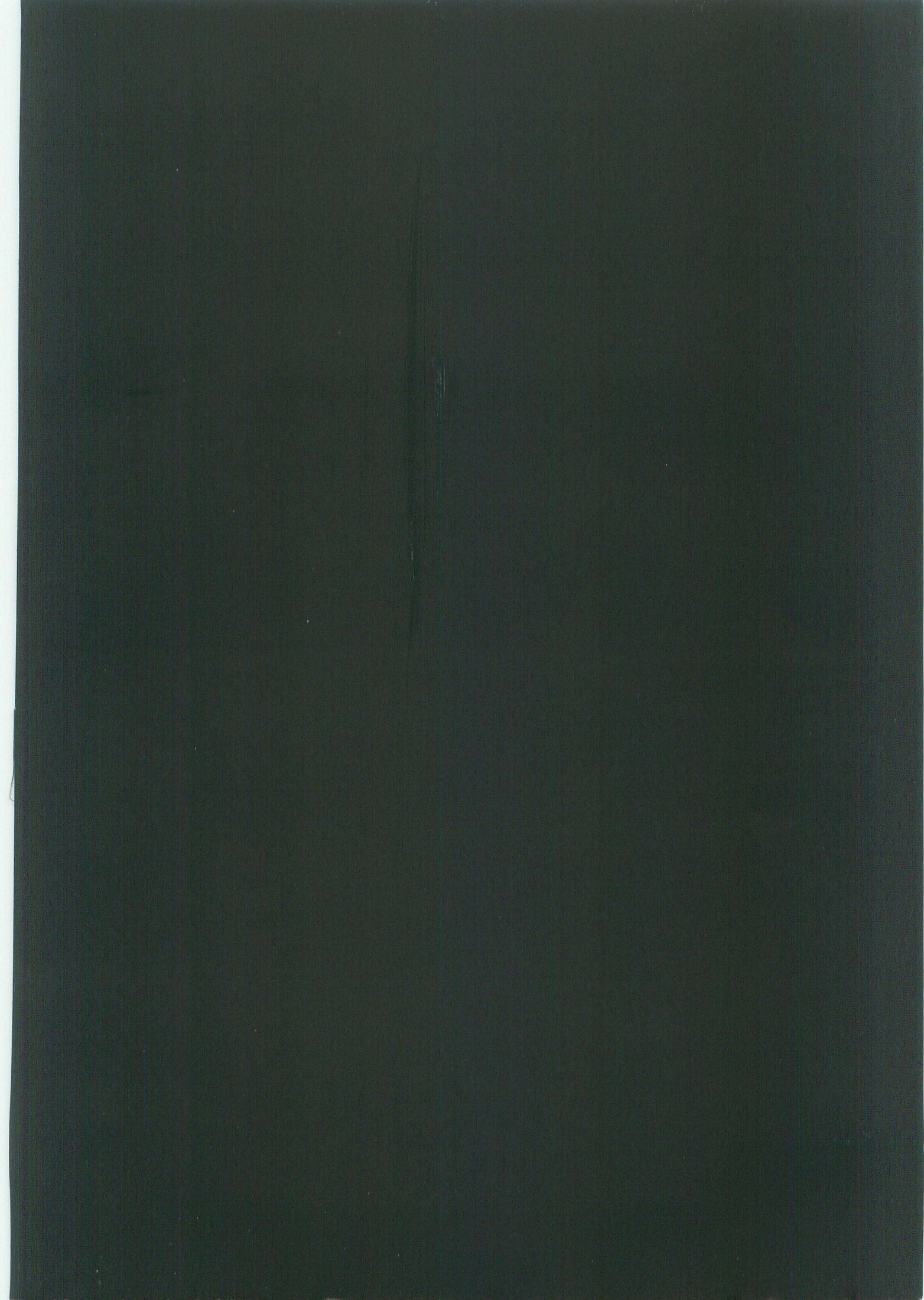
■DTP技術スタッフ
多田秀幸
桜井真樹

■図版制作
ジェイマップ

■外字制作
字游工房

■進行
長島基
幸福康樹
鈴木功

■使用アプリケーション
QuarkXPress
Adobe Photoshop
Adobe Illustrator
Easycompo II

■使用書体
大日本スクリーン
ヒラギノ明朝
3・4・5・6・7・8
ヒラギノ角ゴシック
1・2・3・4・5・6・7・8・9

毎日ムック シリーズ 20世紀の記憶

毎日新聞秘蔵 不許可写真2

1999年1月10日発行

定価 本体1714円 ＋税

編集長 **西井一夫**

発行 **毎日新聞社**

東京本社　東京都千代田区一ツ橋1-1-1　〒100-8051　✆(03)3212-0321

大阪本社　大阪市北区梅田3-4-5　〒530-8251　✆(06)345-1551

西部本社　北九州市小倉北区紺屋町13-1　〒802-8651　✆(093)541-3131

中部本社　名古屋市中村区名駅4-7-35　〒450-8651　✆(052)561-2211

2

シリーズ 20世紀の記憶

第1期刊行予定

第1回配本　1998年10月26日既刊　A4総372頁　2800円(税込)

1968年・グラフィティ　バリケードの中の青春

第2回配本　1998年11月25日既刊　A4総228頁　1800円(税込)

毎日新聞秘蔵　**不許可写真1**

第3回配本　1998年12月上旬刊行　A4総196頁　1800円(税込)

毎日新聞秘蔵　**不許可写真2**

第4回配本　1999年1月下旬刊行　A4総268頁　2500円(税込)

1945年　日独全体主義の崩壊

第5回配本　1999年2月下旬刊行　A4総260頁　2500円(税込)

第1次世界大戦　1914-1919年　総力戦とロシア革命

第6回配本　1999年3月下旬刊行　A4総180頁　1800円(税込)

20世紀キッズ　子供たちの現場

第2期刊行予定

第1回配本　1999年5月下旬刊行　A4総260頁　2500円(予定価格)

第三帝国の野望　1930-1939年

第2回配本　1999年6月下旬刊行　A4総196頁　1800円(予定価格)

ホロコースト

第3回配本　1999年7月下旬刊行　A4総260頁　2500円(予定価格)

第2次世界大戦・欧州戦線　1939-1945年

第4回配本　1999年8月下旬刊行　A4総292頁　2800円(予定価格)

大日本帝国の戦争・15年戦争　1931-1945年

第5回配本　1999年9月下旬刊行　A4総340頁　2800円(予定価格)

第2ミレニアム(千年紀)**の終わり　1900-1913年**

第6回配本　1999年10月下旬刊行　A4総260頁　2500円(予定価格)

連合赤軍の時代　1969-1975年

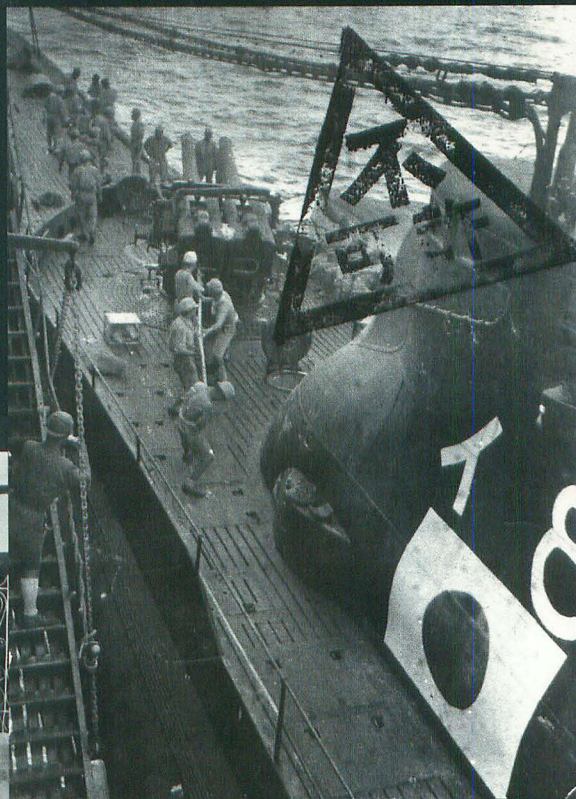
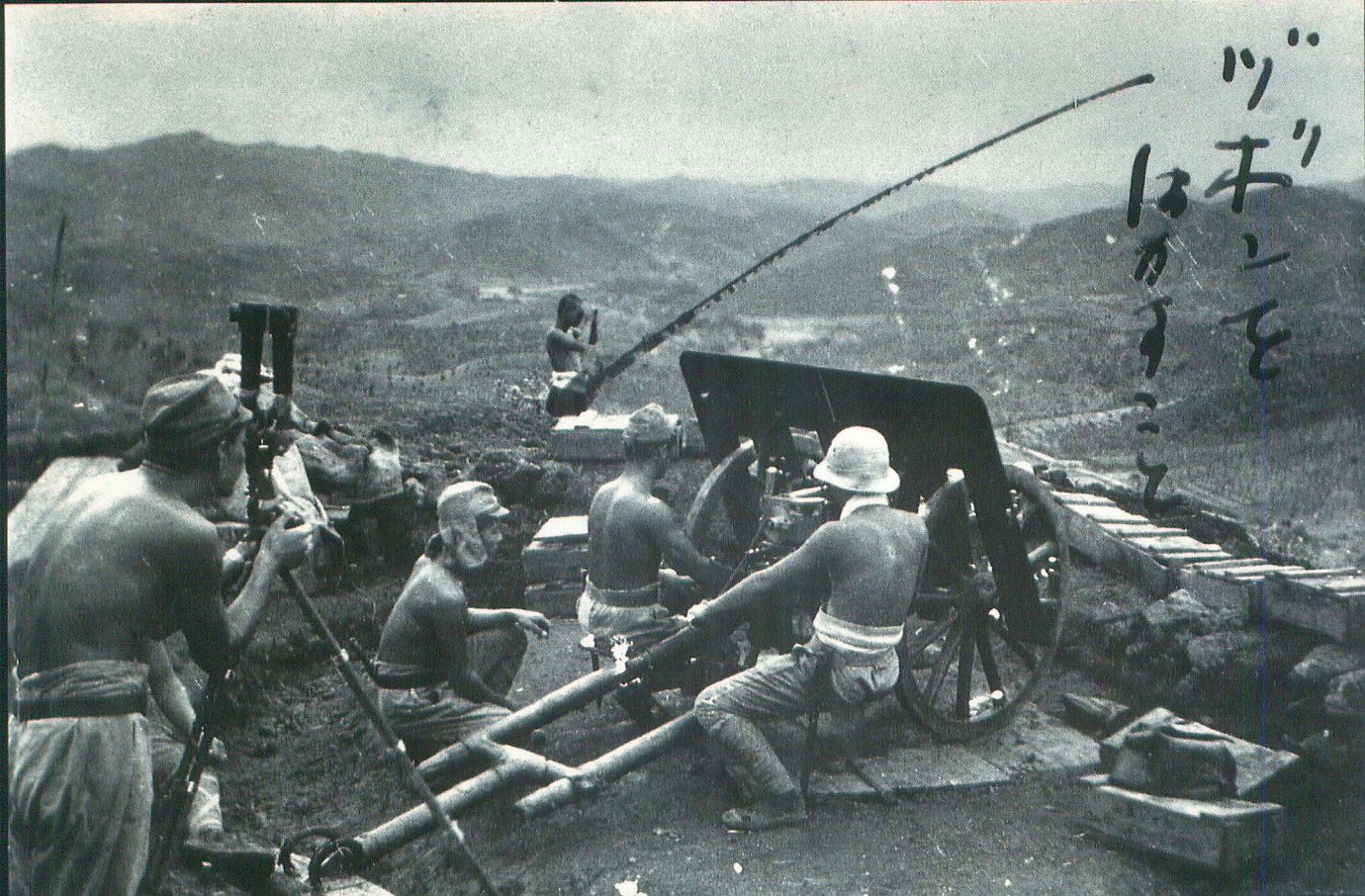
既刊

1997年9月刊行　A4総1208頁　9975円(税込)

20世紀年表

毎日ムック シリーズ⑩ 20世紀の記憶
毎日新聞秘蔵 不許可写真2
1999年1月10日発行

編集長 西井一夫
発行 毎日新聞社

東京本社 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 〒100-8051 ✆(03)3212-0321
大阪本社 大阪市北区梅田3-4-5 〒530-8251 ✆(06)345-1551
西部本社 北九州市小倉北区紺屋町13-1 〒802-8651 ✆(093)541-3131
中部本社 名古屋市中村区名駅4-7-35 〒450-8651 ✆(052)561-2211

9784620791135
ISBN4-620-79113-X
C9420 ¥1714E
1929420017148

定価 本体1714円 ＋税 雑誌68336-42

Printed in Japan 凸版印刷株式会社印刷